に見えたり我蕎麥は占ふに
よしなし
月九分あれ野の蕎麥よ花ひとつ
其六
畠中に霜を待つ瓜あり試に
筆をたてゝ
冬瓜におもふ事かく月見哉
其七
同隱相求といふ心を
むくの木のむく鳥ならし月と我
其八　寄薄
蘇鐵にはやどらぬ月の薄かな
其九　寄蘿

遠くとも月に這ひかゝれ野邊の蘿
其十
一水一月千水千月といふ古
ごとにすがりて我身ひとつ
の月を問ふ
袖につまに露分衣月幾つ
其十一　答
月一つ柳ちり殘る木の間より
其十二　寄芭蕉
去年の今宵は彼菴に月をも
てあそびて越の人あり筑紫
の僧ありあるじも更科の月
より歸りて木曾の瘦もまだ

(一)芭蕉「木曾の瘦もまだ直らぬに後の月」

直らぬになど詠じけらしこ
としも又月のためとて菴を
出ぬ松島象潟をはじめさる
べき月の所々をつくして隱
の思ひ出にせむとなるべし
此度は月に肥えてや歸りなむ
其十三　國より歸る
我をつれて我影かへる月夜かな
うるしせぬ琴や作らぬ菊の友
酒折(サカヲリ)(一)のにひばりの菊とうたはどや
こかしせし思ひを小夜の枕
(二)
にて我此心をつねにあはれ
む今なほ思ひ出るまゝに

はなれじときのふの菊を枕かな
石山
雲なかば岩を殘して紅葉けり
大江山
ふみも見じ鬼住む跡の栗のいが
(三)
甲斐が根
ほぞ落の柿の音聞く深山哉
追加
唐に不二あらばけふの月見せよ
堂高し梢の秋の嵐より
市中より東叡山の麓に家を
移せしころ

(一)日本武尊甲斐酒折の宮にて、「にひばり筑波をすぎて幾夜か寢つる」とよみ給へり
(二)こかしせしの句誤脫あるにや
(三)小式部「大江山生野の路の遠ければまだふみも見ず天の橋立」

鮭の時宿は豆腐の雨夜哉

芭蕉庵にまうでて

秋むかし菊水せむと契りしか

月一つ柳ちり残る木の間より

冬

天の原よし原不二の中行く時雨かな

三保夕照

網さらす松原ばかりしぐれ哉

深草の翁宗祇居士を讃して(一)

いはずや友風月家旅泊と

芭蕉の趣きに似たり

旅の旅つひに宗祇の時雨かな

寒くとも三日月見よと落葉哉

松陰に落葉を着よと捨子かな

竹日の畫

竹青く日赤し雪に墨の隈(二)

比良暮雪

暮遅し敦賀の津まで比良の雪

炭がまや猿も朽葉も松の雪

芭蕉いづれ根笹に霜の花盛

烏巾を送る

唐のよし(モロコシ)野の奥の頭巾哉

茶の花や利休が目にはよしの山(三)

金馬のとし仲の冬中の七日

三四友をかたらひて心ざし

を申侍る

人やしる冬至の前のとし忘

名をとげて身退しやふくもどき(四)

埋火

(一)深草の翁は釋元政をさす

(二)原本黒とあり、一本により墨と改む

(三)其角、「餅花や鼠の目には吉野山」

(四)「身退し」は「身退く」の誤なるべし、老子に「功成名遂身退天之道」

宮殿爐也女御更衣も猫の戀

花桃身しりぞかれしはいづれの江の邊ぞや俤は教へし

宿に先立てこたへぬ松と聞えしは誰をとひし心ぞや閑人閑をとはまくすれどきのふはけふを好みけふも又くれぬ

行かずして見る五湖煎蠣の音を聞く

(一)和布刈遠し王子の狐見に行かむ

鳴戸磯渦まく暦くれはやし

(二)此わすれ流るゝ年の淀ならむ

(三)市に入てしばし心を師走かな

(一)「和布刈遠し」一本「年の一夜」とあり

(二)これは芭蕉の句なり、葛の松原に「名月や池をめぐりて夜もすがら」の句と並べ出して、「必とする事なきは素堂亭の年忘にして固とせざるは芭蕉庵の月見なるべし」とあるより素堂の句なりと誤解せしなり

追加

亡友芭蕉居士近來山家集風躰を慕はれければ追悼に此集を讀誦す

あはれさや時雨るゝ磯の山家集

芭蕉舊庵にて

歎けとてふくべぞ殘る垣の霜

腹中の反古見分けむ年の暮

其角發句集

其角と嵐雪とは菴中の桃櫻なりと蕉翁の稱し申されしは、天下の桃李ことゞく公が門に在りといひけむ心ばへなるべし。かゝれば此ふたりは一雙の名家にして、世人も人丸赤人のやうにおぼえたれど、その中にも聊かの勝劣はなきにしもあらざるべし。そもゝ嵐雪は、風雅に禪味をかねて無門の關もさはる事なく世理の外に遊び、千里獨歩の氣性あり、晉子は志學の年より功をつみて、はたちばかりの頃は既に次韵の作者に許されたり。かく誓古の心あつき上に、醉鄕に入てはいよゝ奇語人を驚かす。おのづから松の尾の神の助あるにや、こやとも人をいふべきにとよみしやうに、人の思ひ及ぶまじき妙處に至る。されば嵐雪が下にたゝむ事かたくなむあるべき。翁も俳諧の定家卿なりと賞譽し、さわやかなる事は此人に及ばずと去來もぬかづきぬ。すべて濶達の中にほそみありて、句々みな自在をつくせり。誰の人か世に敵するものあらむや。此ごろ句集を板に刻むに、懷にひきいるゝばかりに殊にちひさくしたてゝ、學者に便あらせむとす。牛をたづねて跡を求め、魚をうらやみて網をむすぶ

輩、此書をはしだてとしてたゞちに百尺竿頭に歩をすゝむべしと也。

隨齋成美序

其角發句集

坎窩久臧考訂

春之部

日の春をさすがに鶴のあゆみ哉

鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春(一)

鶴さもあれ顔淵生きて千々の春

題黃金

目には見ず一萬枚を御代の春

世の中の榮螺も鼻を明のはる

松かざり伊勢が家かふ人は誰(二)

神明町に居をうつして

行きあひの松もかたそぎ飾竹

年たつや家中の禮は星月夜

明くる夜のほのかにうれし嫁がきみ

元日や月見ぬ人の橋のおと

元日の炭賣十の指くろし

破魔弓や當時紅裏四天王(三)

手握蘭口含雞舌

ゆづり葉や口にふくみて筆はじめ

師走の分野是かや春の物ぐるひ

高砂住の江の松を古今萬葉

のためしに引かれしより散

りうせずして連歌に傳ふし

かるに此松は枝葉百間にあ

(一)江戸の繁昌をいふ

(二)古今伊勢「家をうりて、飛鳥川淵にもあちぬ我宿もせにかはりゆく物にぞありける」

(三)「泰平の四天王は紅裏を着し往昔の四天王は甲冑を着す」と詞書あり

まりて諸木にことなる景色
尤俳諧なるべし

蓬萊の松にたてばや曾根の松

蓬萊の讃

島ぞよる三つの書院のかどやくまで(一)
庭竈牛も雑煮をすわりけり

春王正月老

生死のむかし男ぞと水いはひ
したしき友に
こなたにも女房もたせむ水祝ひ
若水に松魚のをどる涼しさよ

福祿壽の讃

長き日や年のかしらの影法師
はつ夢や額にあつる扇より
寶引に蝸牛の角をたゝく也

寶引の讃

保昌がちからひくなり胴ふくり
衆鼠入懐の夢をひらきて
引きつれて松をくはへる鼠かな

大根畫讃

兵のひかへてふたり子日かな
松かさやまはさば獨樂にまはるべく
花さかば告げよ尾上の春おろし(二)
帶せぬぞ神代ならまし踏歌宴
蛭子帋かけとり帳の三枚目(三)

十一日

(一)三書院を蓬萊、方丈、瀟洲に比す
(二)鞍馬山にて春に燈石を入れつりもろして賞るをいふ
(三)たち餘りのつきたる紙をいふ

お汁子を還城樂のたもと哉
大黑殿をいさめ申せとて樽
送られしに

年神に樽の口ぬく小槌かな

漸覺春相泥といふ切句

削りかけ膏藥ねりの鼻にあれ
景清が世帶見せぬや二薺(一)
百人の雪かきしばし薺ほり
とばしりも顏に匂へるなづな哉
七種や明けぬに聲のまくらもと
なゝ草や跡にうかるゝ朝がらす
さわらびの七種打は寒からむ
砂植の水菜も來たり初若菜

二人靜のかけものに
なつみ哉扇ふたつを飛ぶことふ
うかれ雀妻よぶ里の朝若菜
畠から頭巾よぶなり若菜摘
傘持はつくばひなれし若菜哉

長嘯の記をおもひ出て

土手の馬くはむをむげに菜摘かな(二)
菜摘ちかし白魚を吉野川に放てみう(三)

河州八尾嫁そしり

うすらひやわづかに咲ける芹の花

溪邊雙白鷺

沐ぶ鷺芹梳るながれかな

萬葉集にも朱雀の柳と侍り(四)

(一)景清が大宮司の女に通ひ又五條坂に通ふを二世帶といへる也
(二)吉原通の遊客の乘る土手馬、長嘯「いかなれや野邊に刈りかふ淺草のくはんをむまのはみ殘しける」
(三)「みろ」は「見よう」
(四)萬葉集云々は例の杜撰なり

所がらのけしきを

たびらこは西の禿にならひけり(一)

正月廿日冠里公に侍座

菜刻みの上手を握る蕨かな

新三十三間堂

若草やきのふの箭見も木綿賣

參宮の四判は來たり亥子の間

春の水かろく能書の手をはしらす

ちくま川春ゆく水や鮫の髓(二)

四十の賀し給へる家にて

御祕藏に墨をすらせて梅見哉

なつかしき枝のさけめや梅の花

うめが香や乞食の家ものぞかるゝ

小庭にうつしたる梅の小枝に鵙の草莖を見出て人々に句をすゝめけるついで

梅の名をうたてや鵙のやどりとは

さす枝のゆきとゞかぬや繪馬のうめ

等躬あいさつ

やみの夜のをりないかとは梅の袖(三)

百八のかねて迷ふや闇のうめ

進上に闇をかねてやうめの花(四)

こつとりと風のやむ夜は藪の梅

旅立ける人に

古郷へうめをり入れよかたな箱

不曲亭

(一)「たびらこ」は佛の座(鶏腸草)

(二)雪の氷りて流るゝが鮫の髓に似たりと也

(三)「をりない」は不居の意

(四)疎開の時より起きて長者に贈る梅を折るなり

あぜをこす目あても梅の匂ひ哉

腕押のわれならなくに梅のはな

三日月の命あやなしやみの梅

元祿十四年二月廿五日聖廟

八百齡御年忌於龜戸御社詩

歌連俳令興行一坐

梅松やあがむる數も八百所

箒木のゐぐひは是に闇のうめ(一)

和心水推敲之句

たゝく時よき月見たり梅の門(二)

白主改名

白黑の間の障子やうめと星

梅津硯水會に

窓をやれと梅ほころびぬ大家中

宰府奉納

守梅のあそびわざなり野老賣

元日眞珠喰ひあてし人の句を祝へといふに

夜光る梅のつぼみや貝の玉

小袖着せて俤にほへ梅がつま(三)

仙石壹岐守殿正月五日にみまかり給ひぬ玉芙公に御悔申上侍るとて

外樣まで手向のうめを拜みけり

久松肅山亭にて

梅寒く愛宕の星のにほひ哉

(一)坂上是則「園原やふせやに生ふる箒木のありとは見えて逢はぬ君かな」狂言の「居杭」は觀音夢想の頭巾をかぶればあたりの人に見えずといふを趣向とす

(二)心水詩宋若蕖に見ゆ「愛君滑稽一時豪、雁字帶霞入彩毫、想見梅花門裏月、不知誰與定推敲」

(三)用箱に、俳優龍井山三郎追善の句ならんといへり

梅津氏の祖父大坂表の軍功によりて御感狀御太刀を頂戴せらる正月十七日の朝とかや上杉蜂須賀等の家臣十七人と也家の風相つたへて今も正月十七日鏡開の興行あり其雫家督執權として此春の賀會あり

幡持を文臺脇やうめのはな

宿のうめ樅いかばかり青かつし

芭蕉翁百ケ日懐舊

墨のうめ春やむかしの昔かな

氷肌玉骨とかや

(一)嵐三右衛門は俳優

(二)竹虎落は竹の物干竿

むかしみし花にも香にも梅の皮

うぐひすの身を逆にはつねかな

鶯よいでもの見せむ杉鍬

芭蕉庵をとひて

うぐひすや十日過ぎてもおなじ梅

あらし座にて

鶯の子は子なりけり三右衛門(一)

うぐひすに罷出でたよひきがへる

うぐひすの曉寒しきりぐす

鶯に藥をしへむ聲のあや

市隅

竹と見て鶯來たり竹虎落(タケモガリ)(二)

うぐひすや鼠ちりゆく闇のひま

茶臼にとまりたる畫に

鶯やこほらぬ聲を朝日山

茶杓にとまりたる畫に

うぐひすの曲げたる枝を削りけむ

鶯がねぐら笛ふきおこせ笹鯛(一)

うぐひすや遠路ながら禮がへし

うぐひすに長刀かゝるなげし哉(二)

柳上鶯の圖に

さかさまに鶯の影見る柳かな

まがれるをまげて曲らぬやなぎ哉

蝸牛豆かとばかり柳かな

風なりに青い雨ふるやなぎ哉

傾城の讃

(一)風俗歌「うばらこきの下には鯛笛ふく猿かなづいなごまろは拍子うつきりふゝすは鉦鼓うつ」

(二)撮解に、「鶯の花ふみちらす細脛を大長刀にそうとかけばや」

(三)みゝなし草「鞠の神を精大明神といふ猿田彦なり鞠に衣紋流し柳流しなどといふ事あり成道卿清水寺の舞台の欄干を鞠を蹴て廻りし事あり」

青柳の額の櫛や三日の月

青柳に蝙蝠つたふ夕ばえや

柳には鼓もうたず歌もなし

欄干や柳の曲をつたふ狙(三)

山更上京

貫ざしもわがねて輕き柳かな

傾城の賢なるはこの柳かな

こと葉書有略

燒けのこる琴にうらみの柳哉

芭蕉の自畫十三懐周之讃

師の坊の十年しばし柳蔭

正月己巳布施辨財天へ詣侍る奉納

玉椿晝と見えてや布施ごもり
白魚や漁翁が齒にはあひながら
しら魚の嚢にあがる雲雀かな
白魚露命
月と泣く夜生雪魚の朧闇
しらうをの色かはるもの川げしき
白魚や海苔は下邊の買あはせ
行く水や何にとどまる海苔の味
のりすゝぐ水の名にすめみやこ鳥
一升はからき海より蜆かな
石ひとつ清き渚やむき蜆
陽炎や小磯の砂も吹きたてず
(一)四睡圖
かげろふに寢ても動くや虎の耳
梟にあはぬ目鏡やおぼろ月
點印半面美人の字を彫て琴
形の中に備へたるを始めて
冠里公の萬句の御卷に押弘
め侍るとて
春の月琴に物かくはじめ哉
(二)おぼろとは松の黑さに月夜かな
二月十七日原驛
富士の朧都の太夫見て譽めむ
沾德岩城に逗留して餞別の
句なきを恨むよし聞え侍り
しに

(一)豐干禪師、寒山、拾得と虎との睡りたる圖

(二)みゝな草に、「冠里公万句の褒貶を師に仰付られし時五十點の印なき由を申上げれば机上の文鎮を下されたりそれをすぐに用ひし也」

松島やしまかすむとも此ついで
不二の繪にのぞまれ侍り
三帆舟は鹽尻になるかすみ哉
みの路にかゝり侍るに
孫どもの蠶やしなふ日向かな
はるさめや桑の香に醉ふ美濃尾張
春雨やひしきものには枯つゝじ
綱が立て綱が噂の雨夜かな
(一)この雨はあたゝかならむ日次かな
本多總州公にて
春の夜や草津の鞭の夢ばかり
遠遊醉歸の駕のうちにて
はるの夜の女とは我むすめ哉
三州小酒井村觀音奉納
如意輪や鼾もかゝず春日影
伶人の門なつかしや春のこゑ
悼後立志 初音は女也
昔かなはつ音三井寺夢の春
(二)引きかへて蕪をはたのに春の駒
畫讃
浦島がたよりの春か鶴の聲
たねかしや太神宮へひとつかみ
舞鶴や天氣さだめて種下し
たねおろし俵にわたす小橋かな
苗代や座頭は得たる畝づたひ
格枝繪馬合に

(一)謠曲羅生門「いかに面々さしたる興も候はねども春雨のきのふけふ云々」この趣なり

(二)初音は立志のなじめる遊女、「三井寺」は立志の好みし謠なりといふ

ことし斯螽ふえたり稲荷山
禁固を破りて暇を玉はる也
破や見にくい銀を父のため
やぶ入やそれはいなばの是は星
藪いりや一つはあたるうらや算
藪入や早いにろくなつらはなし
やぶ入や牛合點して大原まで
故赤穂主淺野少府監長矩之
舊臣大石内藏之助等四十六
人同志異體報亡君之讎今茲
二月四日官裁下令一時伏刄
齊屍萬世のさへづり黄舌を
ひるがへし肺肝をつらぬく
うぐひすに此からし酢はなみだ哉
畫讃
拾得の鳳巾にからむや玉箒
かつしかや江戸をはなれぬ鳳巾
支考が遠遊のこゝろざし有
りけるに
白河の關に見かへれいかのぼり
人に胡椒の粉をふりかけら
れて
耳ふつてくさめもあへず鳴く音哉
自得
蝶を嚙んで子猫を舐るこゝろ哉
或お寺にねう比丘とて腰の

ぬけたるおはしけり住持の
深くいとほしみ申されしに
五の德を感ず
能睡 あたゝかな所嗅出すねぶりかな
能忘 おもへ春七年かうた夜の雨
能捕 鶉かと鼠のあぢを問てまし
能狂 陽炎としきりに狂ふ心かな
能耽 髭のあるめをと珍し花心
(一)
吉原の初午
はつうまや賽錢よみは芝居から
はつ午に寺のほりの例をふ
たりの御子達に祝願いたし
候
いの字より習ひそめてやいなり山
奉納
金柑や冬青にさしても稲荷山
爰にけふ御馬水かへ水間寺
惜春
梅ちるやこれを箕にせむ鳳巾
すべらずに筏さす見よ雪の水
類燒のころ邊鄙の居を問て
一樽に玉子を送る人に
わらづとや雪の玉水十とよむ
杉起きて畠をみする雪間哉
淺茅が原出て山寺に遊び畠
中の梅のほつえに六分ばか

(一)來山「兩方に髭があるなり猫の戀」

りなる蛙のからを見付て鵙
　の草莖なるべしと折取侍る
草莖をつゝむ葉もなき雪間哉
霞きえて不二を裸に雪肥えたり
足あとをつまこふ猫や雪の中
猫の子のくんづほぐれつ胡蝶かな
近隣戀　京町の猫通ひけり揚屋町
寄竹戀　埋られたおのが涙や斑竹(マダラダケ)
(一)
幼　戀　箒木の百目なき子に別かな
(二)
寄寺戀　柏木の柳もそれかあがり猫
(三)
思他戀　飯くへば君が方へと訴訟猫
疑　戀　花の夢胡蝶に似たり辰之助
(四)
御　忌
人の世やのどかなる日の寺ばやし
わたし舟武士はたゞのる彼岸哉
授記品無有魔事
くもりしが降らで彼岸の夕日影
不生不滅のこゝろを
海棠の鼾を悟れねはん像
佛若し大晦日に入滅し給は
ばいかに佛ともとんちやく
すべきかゝる衆生のために
は往生もふのものなるべし
佛とはさくらの花に月夜かな
二月十五日上京發足
(五)
西行の死出路を旅のはじめ哉

(一)舜崩して其妃の涙竹を染めて斑竹となれりといふ
(二)猫の子の百目あるに至り乳をはなし他にやるといふ
(三)源氏柏木「此春は柳のめにぞ玉はぬく咲きちる花のゆくへ知らねば」愛猫の寺にあがり物となりたる也
(四)辰之助は名優水木辰之助
(五)西行の歌、「願はくは花の下にて春死なん其如月のもちづきの頃」

寒食や竈下に猫の目を怪む
今案ずるに寒食の家には自身番
餅配り國栖(クズビト)人ごまめ奏してより
野老賣こゑ大原の里ぴたり
はつ茸の盆と見えたり野老賣
駒とめて雪見る僧に蕗のたう
うめが香や此一すぢをふきのたう
竹の香や柳をたづね蕗の臺
　榮苑
黑胡麻でこゝをあへぬか土筆(ツクヽシ)
すこ〳〵と摘むやつまずや土筆
野鼠のこれをくふらむ土筆
泥龜の腕とおもへば土わさび
山里の名もなつかしや作り獨活
　南都にあそぶ雨
傘や薪の夜のあれとほし
ねぶる蝶よる〳〵何をする事ぞ
　見獅子伶有感
蝶しるや獅子は獸の君なりと
百とせはねるが藥の胡蝶かな
(一)
　無車馬喧
夕日影町中にとぶ胡蝶かな
蝶とぶや猿をよびこむ原屋敷
藁屑に花を見すてしこてふ哉
　釋榮
聖堂にこまぬく蝶もたもと哉

(一)「睡るが藥」「胡蝶の夢の百年目」といふ二つの謎による

(一)撮解「自注にとびあがり障子といふちんとあり、井蛙抄に爲氏卿、いにしへのいぬきがやりし雀の子とびあがりしやうしといふちん」
(二)萬葉三に、鳥總立(トフサタテ)の語あり、トフサは木の梢なりといふ
(三)古歌「物いへば父は長柄の人柱鳴かずば雉もいられまじきを」雉子の顔の赤きを荒事の紅隈に比せり
(四)せみは帆綱をかくる滑車にて其形蟬に似たるよりいふ
(五)鰶はかげろふ
(六)うぶめは産婦の死して化したる鳥なりといへり

雀子(一)やあかり障子の笹の影
山の端に乙鳥をかへす入日かな

畫讃

燕やかろき巣を曳くいかのぼり
からかさに塒かさうよぬれ燕
川燕纏(サデ)さす邪魔と見ゆる哉

柳燕の圖

乙鳥の塵をうごかす柳かな
海づらの虹をけしたる燕かな
茶の水に塵なおとしそ里つばめ
階子(二)からとふさに及ぶ乙鳥かな
歸る雁米つきも古郷やおもふ
小田かへす鍬もはしらや殘る雁

市川才牛追善一子九藏名を
つぎ侍るに

塗顔(三)の父はながらや雉子の聲
世の中は何かさかしききじのこゑ
うつくしき顔かく雉子の距(ケツノ)かな

角田川にて

なれも其子を尋ぬるか雉子の聲
人うとし雉をとがむる犬のこゑ
帆柱(四)のせみよりおろす雲雀哉
鰶(五)やひばりあがれとか夕日かげ

淺草川泛舟

川上は柳か梅かもゝちどり
俗(六)にいふうぶめなるべし呼子鳥

(一)花は歌舞妓の本狂言、桃は脇踊となり
(二)瞿粟人形は極めて小き人形
(三)萬城神は夜間のみいであるきしといふ
(四)「駒とめて袖打拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」
(五)さうゝ〜しは淋しき意

花さそふ桃や歌舞妓の脇踊り
醍(アマザケ)に桃李の詩人髭しろし
菓子盆にけし人形やもゝの花
緣(ヘリ)豆の頭もしろし桃の眉
燕にすさめられてや庭の桃
あけぼのやことに桃花の雞のこゑ
鷄の獅子にはたらく逆毛哉
順禮はよそにをがむや鷄あはせ
勝足をひたさば關の清水かな
炭喰の聲だにたゝぬねらひ哉
毛ごろもに腹黑き名を雪(キヨノ)けり
老鳥のけふわかやぎぬ固本丹
割つて入るくるみ花冠も箕手かな

王子曲水もよほされて

水呑を烏帽子にきせむ岩つゝじ
曲水にあの氣違は茶碗かな
曲水や筧まかする宿ならば
おはしたに木兎もあり雛座敷
かつらぎの神(三)はいづれぞ夜の雛
もどかしや雛に對して小盞
見てのみや盜まぬ雛は松浦舟
上座ほど雛のすがたの新なり
傳へ來てひなのたからや延喜錢

三月四日雪ふりけるに

雛(四)やその佐野のわたりの雪の袖
紙(五)雛のさうゝしさよ立ち姿

綿とりてねびまさりけり雛の顔
ひなのさま宮腹々にましく(一)ける
いもうとのもとにて
世わすれに我酒かはむ姪がひな
雛やそも碁盤にたてしまろがたけ
折菓子や井筒になりて雛のたけ
くり言をひなもあはれめ虎が母
段のひな清水坂を一目かな
ひなくれぬ人をはつせの棧敷哉
永代島八幡宮奉納
汐干也たづねてまゐれ次郎貝
親にらむ比目(ヒラメ)を踏まむ汐干かな(二)
紀の國の鯛釣つれて汐干かな

(一)大なる雛から段々小なるを立並べたる景色
(二)諺に「親をにらむと比目魚になる」といふ
(三)鹽瀬の服紗に藤色の縁をもたせたり

貝(バイ)つるや白洲の末のながれ松
へなたりやかづき上げしは水の栗
われからと雀はすゞめからす貝
貝にて貝をむき侍るを
あさり貝むかしの劍うらさびぬ
海松(ミル)ふさや浪のかけたるほらの貝
藤潟や鹽瀬によするふくさ貝(三)
すだれ貝雪の高濱みし人か
子安貝一見の浦を產湯哉
貝ぞろへを送られしに
蛤のしかもはさむかたま柳
鐵槌にわれから嬴螺(ニシ)のからみ哉
江の島や旦那跡から汐干がひ

東潮留主見舞
出代や人おく世話も連衆から
傀儡師阿波の鳴戸を小うた哉
伊勢の雲津を過侍る
馬に出る子をまつ門や傀儡師
露沾公御庭にて
寢時分にまた見む月かはつ櫻
沓足袋や鐙にのこる初ざくら
一筆令啓上候と招かれて
はつ櫻天狗のかいた文みせむ
いざさくら小町が姉の名はしらず
猿のよる酒屋きはめて櫻かな
京中へ地主のさくらや飛ぶこてふ(一)

(一)清水地主權現の櫻

仁和寺
いなづまのやどり木なりし櫻かな(二)
八つ過の山のさくらや一沉み
雨後
さくらちる彌生五日はわすれまじ
さくら狩けふは目黑のしるべせよ
妙鏡坊より花送られしに
文はあとに櫻さし出す使かな
上野清水堂にて
鐘かけてしかも盛のさくら哉
折るに殺生偸盜あり
あた也と花に五戒のさくら哉
これは〳〵とばかり散るも櫻かな(三)

(二)仁和帝の御代短くて崩ち給へるよりいふ
(三)貞室の「これは〳〵とばかり花の吉野山」による

上野にて

浮助や扈従見にゆく櫻寺(一)

芳野山ぶみして

明星やさくらさだめぬ山かつら(二)

口びるを魚に吸はるゝさくら哉

大悲心院の花を見侍りて

灌頂の闇より出て櫻かな

酒のさかなに櫻花をたしなむ人に

下臥に漬味見せよしほざくら

墨染に鯛彼さくらいつかこちけむ

身をひねる詠(ナガメ)なりけり糸ざくら

浦人の花をもらうて

ちる時を計に買はむ磯ざくら

花中尋友

饅頭で人をたづねよ山ざくら

山ざくら鏡戀しき僧あらむ

やまざくら猿をはなして梢がな(三)

石河氏宜雨公の山莊にて

二すぢの道は角豆かやまざくら

ひまな手の鎗持寒し山ざくら

目黒松隣堂にて

浮世木を麓にさきぬやま櫻

小坊主や松にかくれて山ざくら

土取の車にそふや山ざくら

辛未の春上野に遊べる日門

(一)浮助はうかれ者

(二)山かつちは山の端にかゝれる曉雲

(三)手の届かぬ梢を猿に折らせたしとの意

主薨御のよしをふれて世上

一時に愁眉ひそめしかば

其彌生その二日ぞや山ざくら

含秀亭の花植ゑそへ給ふに

植(ウエタシ)足に三切の供や山ざくら

勢多春望

山ざくら身を泣くうたの捨子哉

茶もらひに此晩鐘をやま櫻

萬日の人のちりはや遲ざくら

一食千金とかや

津の國の何五兩せむさくら鯛

友猿のともぎらひすな花ごろも

緣からはこなたおもふや花の庭

泥坊や花のかげにて踏まれたり

行露公あたみへ御浴養の頃

脇息にあの花をれと山路かな

花鳥もうつゝとならむ願かな

含秀亭の山ぶみに御供して

御近習や花のこなたにかたをなみ

花ひとつたもとにお乳の手出し哉

地うたひや花の外には松ばかり

讀莊子

彼是は嵐雪の僞花のうそ

門柳塵を拂ふ折ふし鶯啼く

御用よぶ丁兒(デッチ)かへすな花の鳥(一)

花見哉母につれだつ盲兒(メクラナコ)

(一)白詩「臺頭有酒鶯呼客」

護國寺にあそぶ時馬にて迎へられて

白雲や花になりゆく顔は嵯峨
(一)はなざかり瓢ふみわる人もあり

大佛膝うづむらむ花の雪
世の花や五年已前の女とは

憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社殘りなく
傀儡の鼓うつなる花見哉
寢よとすれば棒つき廻る花の山
花に遂げて親達よばむ都かな

立君をあはれむ

ざれありく主よ下人よ花ごろも
徳利狂人いたはしや花ゆゑにこそ
花ざかり子であるかるゝ夫婦哉
人は人を戀のすがたや花に鳥

庚申の雨といふ題にて

此降を人が延ざる花見かな
ちるはなや踏皮(タビ)をへだつる足の心
此雨に花見ぬ人や家の豆

九條殿御下向

傳奏にものかは見ばや花の門

雜司ヶ谷にて

(二)山里は人をあられの花見かな
花折て人の礫にあづからむ
屋形舟花見ぬ女中出にけり

(一)千載集良經「櫻さく比良の山風吹くから に花になりゆく志賀の浦波」袁中郎送李湘洲使浙詩「不言知向越、面上有西湖」

(二)月清集「山里は槇の葉しのぎ霰ふりせき入れし水の音づれもせぬ」

意馬心猿解

立馬の曰くは猿のはなごころ

永代寺池邊

池をのむ犬に入相のはなの影
をるとても花の間のせかれ哉

侍座

花にこそ表書院でお月代

神力品現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音
はな笠を着せて似合はむ人は誰

惜花不掃地

我奴落花に朝寢ゆるしけり
(一)日輪寺の僧と對興して
花に酒僧どもわびむ鹽ざかな
花は都ものくるゝ友はなかりけり
かんざしや散りゆく花のおもしにも

上野御

わたり徒士(ガチ)見立つる頃の花見哉
酒を妻つまを妾の花見かな

妓子萬三郎を供して

その花にあるきながらや小盞
花に來て都は幕のさかり哉

代レ樵

彫笛(リヲ)縫(テヲ)蓑花に晴せむ浮世かな
車にて花見をみばや東やま

尋花

(一)今昔物語廿四「殿守のともの みやつこ心あちば此春ばかり朝清めすな」

植木屋の亭主留主なり花いまだ

この〳〵と花の名残や笻扇

湖春をいたみて

泣てよむ短尺もあり花は夢

甫盛はじめて上京に

花ぞ濃伊勢をしまへば裏移

名ざかりや作戀五郎花定め

行露公年々花を給はること

し遲かりければ

花を得む使者の夜道に月を哉

はな下げてやりてがひとり寺參り

(一)花に鐘そこのき給へ喧嘩買

客ずきやこゝろを花に浮藏主

榎島

花風や天女負れて歩わたり

宰府參詣の舟中

(二)菜のはなの小坊主に角なかりけり

海棠の花のうつゝやおぼろ月

山吹は黄玉青玉露ぞうき

三月正當三十日

やまぶきも柳の糸のはらみ哉

月雪に山吹花の素顔よし

淺草川逍遙

(三)鯉の義は山吹の瀨やしらぬ分

小鳥居は葉守の神かつゝじ山

(四)こゝろなき御影さんはに岩つゝじ

(一)謡曲雲林院「あち心もとなの散らしつる花や、さればこそ人の候、落花狼藉の人そこのき給へ」

(二)撮解に、「按ずるに鶏戸なるべし、渭北が集に晉子自ちいふ、紅葉に鹿、菜の花に小坊主とは案じつれど終には聞えぬ事とあり」

(三)山吹の瀨は宇治にあり

(四)西行の畫讃なり、「心なき」は鴫立つ澤の歌をいふ、「さんは」は佛家の生飯なり、散飯の意か

旦夕のはしるはじむるつゝじ哉

亦是より木屋一見のつゝじ哉

きりしまに豆腐を切て捨てばやな

柴舟の里は茶摘の水けぶり

白藤を酢みそにつたふ雫かな

畫讃

藤の花これまで顯れいで蛸なり

ふぢ咲て松魚くふ日をかぞへけり

水影や鷸(ムサヽビ)わたるふぢの棚

錦にも藤の虱は憎からし

よそに見ぬ石の五德やふぢの露

秋航庭せゝりせらるゝに

たそがれや藤うゑらるゝ扇取

わかさ三嘯公侍從になりて

京使にたち給ふを祝して

藤浪や廿七人草履とり

こゝかしこかはづ鳴く江の星の數

ちんば引く蝦(カハヅ)にそふる涙かな

市間喧

つけ木屋の手なら足なら雨蛙

(一)景政が片目をひろふ田螺かな

ある人の子の名をきいて

(二)ことわりや養ひ子なら蜂之助

竹に蜂の巣かけし繪に

(三)なよたけのさゝら三八宿とこそ

何必逃杯走似雲

(一)鎌倉權五郎景政

(二)似我蜂は他の虫をとりて我子として育つるといふ

(三)疱瘡除の守札に「さゝら三八宿」と書く事あり、そのさゝらを竹の緣によせたり

此虻をたばこで逃すけぶり哉

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して貪欲をしめし給ふにたとへば有瘡人近猛煙始雖悅後增苦の文の心を

雁瘡のいゆる時えし御法かな

摩訶止觀に一目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目此文のこゝろを

鳥雲に餌差ひとりのゆくへ哉

南村千調仙臺へかへるに

行春や猪口を雄島のわすれ貝

三月盡

鳶に乘て春を送るに白雲や

夏之部

風光別我苦吟身

大酒におきてものうき袷かな

一つとろに袷になるや黑木うり

越後屋に絹さく音や更衣(一)

卯月八日母におくれて

身にとりて衣がへうき卯月哉

ぬがでやは千手觀音ころもがへ(二)

法體もしまの下着や更衣

寄甘己

白禿もなほるばかりぞ衣がへ

奉幣使御代參の人の家にて

としたけて伊勢まで誰か更衣

乞食哉天地を着たる夏ごろも

わか鳥やあやなき音にも郭公

有明の面起すやほとゝぎす(三)

淀舟や犬もこがるゝ子規

夜這星鳴きつるかたやほとゝぎす

歷々や下馬のをりふし時鳥

川むかひ誰屋敷へかほとゝぎす

鶺啼くやこのあかつきを子規

あかつきの氷雨をさそふや郭公

百間長屋にて

時鳥人のつら見よ下水打

ほとゝぎす一二の橋の夜明かな(四)

(一)越後屋は江戸駿河町の三井呉服店

(二)千手觀音は虱をいふ

(三)攀白集逆衣「月花も面起すべき時なれや」

(四)東福寺門前大和大路に一の橋二の橋あり

阮咸が三味線しばしほとゝぎす(一)

亦打山(二)

夜こそきけ穢多が太鼓杜鵑

きぬ〴〵の用意か月に杜宇

寮坊主飲まねば淋し郭公

宰府奉納

ほとゝぎす鳥居々々と越えにけり

林中不賣薪

せになくや山ほとゝぎす町はづれ(三)

麓寺五加が奥をほとゝぎす

さる江といふ村にて

くらぶ山材場の日蔭や子規

曲終人不見(四)

あかつきの反吐はとなりか杜宇

たのみなき夢のみみる曉

夢に來る母をかへすか郭公

ほとゝぎす我や鼠にひかれけむ

子もふまず枕もふまず蜀魂

枳風が妻を供して熱海へ行

くとて

馬の間妹よびかへせほとゝぎす

桑名にて

蛤の燒かれてなくや子規

それよりして夜明烏や時鳥

點滴を硯に奇なりほとゝぎす

人間の四月にふけれほとゝぎす(五)

(一)阮咸は晉の七賢の一人、音律に妙にして善く琵琶を彈ず

(二)亦打山はまつち山

(三)西行「聞かずともこゝをせにせむ時鳥山田の原の杉のむらだち」

(四)唐の錢起驛舍に宿りし時舍外人あり、咏して曰く「曲終人不見、江上數峯青」と

(五)白氏「人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、長恨春歸無覓處、不知轉入此中來」

ある人の愛子にねだり申さ

れて

ほとゝぎす幟そめよとすゝめけり

月消えて腰ぬけ風呂や子規

六阿彌陀かけて鳴くらむ杜鵑(一)

淺草寺樹下

虫つかぬ銀杏によらむ郭公

葉になりてかゝれぬ梅や時鳥

子規たゞ有明のきつね落

ほとゝぎす人を馳走に寢ぬ夜哉

目の上に目をかく人や郭公

夢ゝ畫

砂は目に寢覺をあらへ蜀魂

姉が崎の野夫忠孝心をきこしめされて祿を給はりたるよし

起きてきけこの時鳥市兵衞記

ほとゝぎす二聲めには出馬かな

あのころで螈(トカゲ)くらふかほとゝぎす

音を守る夜寺に鬼なし子規

山田市之丞

ちつ〳〵と歸すつゞみや杜宇

觀音で耳をほらせてほとゝぎす(二)

我句人しらず我を鳴くものは杜鵑(三)

鉦かん〳〵驚破(ソヨヤ)時鳥草の戸に

あれ〳〵と艪まらはづれて子規(四)

(一)彼岸の中日に參詣する六箇所の阿彌陀佛、江戸にて上豐島村西福寺、下沼田延命院、西ヶ原無量寺、田端與樂寺、下谷長福寺、龜井戸普光寺

(二)當時耳の垢取を業とする者ありき、淺草にて耳垢をとらせしと也

(三)論語憲問篇「子曰莫我知者也夫……知我者其天乎」

(四)艪まらは艪臍

明方啼きすてし一こゑを
郭公中入までのばせをかな（一）
さもこそは木兎わらへ時鳥
須磨にて
ほとゝぎす雲も輪になる浦わ哉
屏風に藤房卿住みすつるの
所
迷ひ子の三位よぶなり郭公（二）
草の戸や犬に初音を隠者鳥
上行寺　二句
灌佛や拾子則ち寺の兒
灌佛や墓にむかへるひとり言
佛さへこの世間はくるしき
に知らでやけふは生れ出け
む
麥飯や母にたかせて佛生會
卯の花やいづれの御所の加茂詣
うの花や蛎がら山の道のくま
蟾（ヒキ）をふんで夜卯の花を憎みけり
年寒し若葉の雲の朝ぼらけ
舟歌の均（ナラ）しを吹くや夕若葉
慈母墓
花水にうつしかへたる茂かな
僧正の青きひとへやわか楓
いにしへの奈良のみやこの牡丹持（三）
河州觀心寺

（一）能樂の「芭蕉」をいふ
（二）三位は藤房をさす
（三）奈良産の牡丹に千貫屋、東大寺、乙子白などいふ名花あり

楠の鎧ぬがれしほたん哉
うかれ女や異見に凋む夕牡丹
筑前紅を（一）
しらぬ火の鏡にうつる牡丹かな
丹羽左京かうのとのの參勤（二）
を
黑牡丹ねるやねりその大鳥毛
艶士にめでて
八專をうつゝに笑ふ牡丹かな
むらさめや驪山を名にし深見草
肖柏の行狀をあつめて集編（三）
める人に
さゝはうし角に火ともす深見草
殿つくり並でゆゝし桐のはな
紅毛來貢の品々奇なりとし
て
桐の花新渡の鸚鵡ものいはず
今日にかはる淨瑠璃殿や青簾
下洛卯月の中の一日
隱岐殿のかへり見はやせ鏡山
帆をおろす舟は松魚か磯がくれ
鰹荷の跡は巳日の道者哉
夕しほや客の間にあふ中ぶくら
こよろぎの名は昔にてうつは哉
和重餞に
伊勢にても松魚なるべし酒迎

（一）筑前紅又霞關ともいふ、牡丹の名品にて黑田侯の江戸邸の庭に生ぜしより此名あり
（二）「かう」は守
（三）肖柏は「春咲かぬ花や心の深見草」の句を以て名高く、又牛に乘りて逍遙せり

たのみなき夢のみ見けるに
うたゝ寢の夢に見えたる鰹かな
妻鰹の卵の中のめぢか哉
人のまことまづ新しきかつを哉
魚市涼宵
楊貴妃の夜は活きたる松魚かな(一)
光廣卿の歌をおもひ合せ侍り
松魚かな先づまな箸を袖で拭く
木賀
名所は海を見ずして松魚かな
袖裏や茄よりけに白くゝり
淺野家義士等をいたむ

(一)鰹のいきゝしたるさまを楊貴妃の湯上り姿に見立てし也

澤潟の鑵を引くなりかきつばた
杜若疊へ水はこぼれても
かきつばた女雪駄のかたしあり
むらさきの蛛もありけり杜若
簾まけ雨に提げ來るかきつばた
護國寺にあそぶ
水漬になみだこぼすや杜若
奉納
から衣御影やかけてかきつばた
けしの花朝精進の凋れかな
散りぎはは風も賴まじけしの花
芥子ばたけ花ちる跡の須彌いくつ(二)
祝產育

(二)芥子の中に須彌山ありなどいふ佛語に本づく

たかうなの皮に臍の緒つゝみけり
笋よ竹よりおくに犬あらむ
笋や丈山などの鎗の鞘(一)
大町亭法會
法のため筍羹皿もかたみ哉
寄幻吁長老(二)
老僧の筍をがむなみだ哉
わか竹や鞭にわがぬる箱根山
しなびたる法師の梅干しけ
るを
うめいくつ閼伽の折敷に玉あられ
傾城の夏書やさしやかりの宿
帋合羽かろしや浮世夏念佛
短夜や朝日まつ間の納屋の聲
岩翁亭題送蟹
みじかよや隣へはこぶ蟹の足
秋しらぬしげりも憎し烏麥
馬士起きて馬をたづぬる麥野哉
麥にかなし薄に月を見む迄の秋
能化堂麥つく僧をけしき哉
壁の麥葎に年を笑ふとかや
田家
早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ
汁鍋に笠のしづくや早苗とり
木賀入湯のころ
しばしとや早苗よりみる寺の門

(一)丈山は石川丈山
(二)筍羹皿は未詳
(三)幻吁は圓覺寺大巔和尚の俳名

田植まで水茶屋するか角田川

合羽着て友となるべき田植かな

早乙女のよごれぬ顔は朝ばかり(一)

摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ

憫レ農ヲ

燒鎌の背中にあつし田草取

幟網沖にはいくつ帆かけ船

ものゝふの幟甲や庫のうち

なよ竹の末葉のこして紙のぼり

幟たつ長者の夢や黒牡丹

疱瘡のあとははるかに幟哉(三)

花あやめ幟もかをる嵐かな

公門に入る時

あやめわく明り障子のみどりかな

錢湯を沼になしたる菖かな

けふもけふあやめも菖かは(三)

らぬにと伊勢大輔家の集に

見え侍る

菖こそ蛙のつらにあやめかな

本つゝじゆふべをしめて菖かな

きる手元ふるひ見えけり花あやめ

根合や御池にひたす花筐

廻文

けさたんとのめや菖の富田酒

此友や年を隱さず白髭一毛

の身を忘れて松どの太郎ど

(一)來山の句に、「早乙女やよごれぬものは歌ばかり」

(二)事類全書「唐劉訓京師富人、梁氏開國管假貸以給軍、京師春遊以牡丹爲勝賞、訓邀客賞花、乃繫水牛數百前、指曰此劉氏黑牡丹也」

(三)下の句「宿とそありし宿と覺えね」後拾遺にも見ゆ

のなりけりと言れば今の人

形の風俗殊更に小兵衞など

いふ人形はなし

我むかし坊主太夫や花あやめ

蝙蝠の屎も子になれあやめ草(二)

屋根ふきとならんで葺ける菖かな

粽かはむ驛にとめて鈴のぼり

ちまきゆふはさみや蘆の葉分蟹

相知れる女の塔澤に入て文

こしたるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ

くさの戸やいつまで草のかひ粽

午の年午の月午の日午の時

うけに入る

競馬埒に入る身のいさみかな

いかにひまなき雨とおもへ

ば

さみだれの名もこゝろせよ節句前

五月雨にやがて吉野を出ぬべし(二)

三味線や寢衣(ネマキ)にくるむ五月雨

隅に巢を鷺こそねらへ五月雨(三)

さみだれや是にも外を通る人

燕もかわく色なしさつきあめ

顏ぬぐふ田子のもすそや五月雨

呈露江公餞

箒木や人馬へだつる五月雨

(一)天和貞享の頃坊主小兵衞といふ道外役者あり、その姿を五月の兜人形に作り始めて小兵衞人形といふ(奇跡考二)

(二)西行の歌、「吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらん」に對していふなり

(三)狂言「酢薑」の狂歌「住吉の隅に雀が巢をかけてさぞや雀は住みよかるらむ」に本づきたる句作、五元集に「千山亭新宅雪舟の繪に」と前書あり

題江戸八景

住むべくば住まば深川の夜の雨五月
さみだれや湯の樋外山にけぶり鳧
五月雨や君がこゝろのかくれ笠
五月雨やからかさにつる小人形(一)
さみだれや酒勾(サカワ)でくさる初茄子
嚴宥院殿の大法事を拜み奉
る(二)
五月雨の雲もやすむか法のこゑ
七十餘の老醫身まかりて弟
子どもこぞりて泣くまゝ予
に追善の句を乞ひけるその
老醫のいまそがりける時さ
らに見しれる人にもあらず
哀にも思ひよらずして古來
稀なる年にこそなどいへど
とかく許さざりければ
六尺もちからおとしや五月雨(三)
江の島
黴雨(ツユ)の窟座頭一曲聞えたまへ
何を音にすほん鳴くらむ五月闇
舞坂や闇の五月のめくら馬
竹の屁を折ふしきくや五月闇
雨雲や竹も醉ふ日の人あつめ(四)
下闇や鳩根性のふくれ聲
腰越

(一)小人形は五月の節句に小兒の玩ぶ人形をいふ、骨董集に圖あり
(二)四代將軍家綱
(三)六尺は駕籠かき
(四)竹を植うる時季なる竹醉日をいふ

篠すがき熨斗を敷寢の五月雨

傾廓

八兵衛や泣かざなるまい虎が雨(一)
須磨の山うしろに何を閑古鳥
風ふかぬ森のしづくやかんこ鳥

僧正ヶ谷

わびしらに貝ふく僧よかんこどり

自愧

夜あるきを母寢ざりける水雞哉
水鷄啼く夜半に遊行のつとめ哉

和古詩

琴を燒て水雞を煮る夜酒淋し
吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝かな
鵜につれて一里は來たり岡の松
石燈籠かやに消えゆく鵜舟哉

杜國をいたむ

羽ぬけ鳥啼く音ばかりぞいらこ崎(二)

ある人の別墅にて

内川や鳰のうき巣になく蛙
朔日に七里は出たり名古屋鮓
石の枕に鮓やありける今の茶屋

永代島の茶店にやどりして

明石より神鳴はれて鮓の蓋(三)

湖舟餞に酒たうべて

貫之の鮎のすしくふわかれ哉(四)
飯鮓の鱧なつかしきみやこ哉

(一)貞享頃淺草田町に住みし三絃の師小歌八兵衛の女穢多と不義して出奔せし事をいふ(奇跡考一)
(二)芭蕉が杜國に面會の節「鷹一つ見つけて嬉しいらこ崎」の吟ありしに據る
(三)續博物志「雷不蓋醬、令人腹中雷鳴」
(四)土佐日記に干鮎を食ふ事あり

岩根こす鞋に鱗あり走鰷（ハシリアユ）

しらすか通るに

世の中を知らずかしこし小鰺賣
更るほど四つ手に鮲（イナ）の光かな
目通りの岡の榎や簗（ヤナ）ざかひ
夏川に藏より仕出す簀子哉
枇杷の葉やとれば角なき蝸牛
爭はぬ兎の耳やかたつぶり
かたつぶり酒の肴に這はせけり
鎌倉やむかしの角の蝸牛
文七に踏まるな庭のかたつぶり
たのめてや竹に生るゝ蝸牛
草の戸に我は蓼くふ螢かな

(一)句中に「しらすか」の四字をよみ込みたり

(二)文七は元結の製造者、古歌に「牛の子にふまるな庭の蝸牛角ありとても身をな頼みそ」

(三)元祿六年駒形に殺生禁斷の碑をたつ、それを杜甫の哀江頭の詩にいひかけたり

宇治にて　二句

柴舟にこがれてとまる螢かな
川くまや水に二重のほたる垣
蠹（シミ）しらみ窓のほたるに語る也
妾が家ほたるに小唄告げやらむ

こまがた

此碑では江を哀まぬ螢かな
蚊ばしらに夢の浮橋かゝるなり

愛娘子

鷄啼て玉子すふ蚊はなかりけり

烏山へおもむく人に

青柳やつかむほどある蚊の聲に

市の假屋のいぶせきに

沓つくり藁うつ宵の蚊やり哉
夜はや寢む紙帳に風を入るゝ音

夜讀書

蚊をうつや枕にしたる本の重（カサ）

松賀秋帆岩城へ赴くに

かやり火に挾箱から團扇かな
蚊遣火に夕顏しろし橙は

醉て忘る

宵の蚊も枕をわたる八聲かな

生死去來

烏行く蚊はいづくより暮のこゑ

捕虎　東坡

七つ毛の蚊にくるしむや足疾鬼（ソクシツキ）

かやり火や蚊帳つるかたに老ひとり
蚊をやくや褒姒が閨の私語（サヽメゴト）

佛骨表

しばらくは蠅を打ちけり韓退之

射ル者中リ奕スル者勝ツ

蠅打よいづれにあたる點ごころ

信濃へまゐらるゝ人の餞に

梁の蠅をおくらむ馬のうへ
蠅なくば一花をらむ夏の菊

土さへさけて照る日にも

蠅追ふに妹わすれめや瓜作り

西鶴が矢數俳諧に後見たの

みければ

(一)足疾鬼は佛骨を盗みて走りしといふ鬼

(二)褒似は周の幽王の寵妃

(一)蒼蠅の蹟尾につきて遠きに達すとの語に據る

(二)歐陽公に「憎蒼蠅賦」あり

(三)枕草子「蚊の細聲に名のりて顔のもとに飛びありく」

(四)撮解「日蓮御書の中、身延山御抄に梢に一乘の菓を結び下枝に鳴蟬の滋く云々、故に浮瑠璃の文句にも梢に蟬の鳴く時はとあり日蓮山入の段なり、晉子は此詞によるならん」

驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり
(一)
不二の雪蠅は酒屋にのこり鳧

逐歐陽公賦
(二)

蠅の子の兄に舜なき憎さ哉

いきげさにうちはなされた
るがさめて

斬られたる夢はまことか蚤の跡

蚊は名のりけり蚤は盗人のゆかり
(三)

綠槐高處

はつ蟬や笛に袋を十文字

一晶の宿坊にて

日蓮よ木ずゑに蟬の鳴くときは
(四)

空蟬に吉原ものの訴訟かな

木戸番をあはれむ

蟬をきけ一日鳴て夜の露

入湯の人木賀をかたりしに

蟬の聲ましらもあつき梢かな

蟬なくや木のぼりしたる團(ウチハ)うり

水打や蟬も雀もぬるゝほど

涙(モヂ)子を懐紙の表紙にして點

取おこせければ

飯櫃にかけもたらぬか蟬の衣

視(レバ)彼蟬(ヲ)貧者に衣をぬぐ事を

隣から此木にくむや蟬の聲

竹の蟬さゝらにしほる時もあり

蝙蝠に宇治のさらしや一くもり

(一)宗長の句、「橘のかにせゝられて寢ぬ夜かな」

(二)「春宵一刻價千金」の句に本づく

かはほりの物書きちらす羽色かな

うつせみの繪に

夏虫の碁にこがれたる命かな

宗長の句をとりて

橘のひとつ二つは蚊もせゝれ
(一)

むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮(チンピ)さへ

交代の葉守の神やはつ柏

夏木立哉池上の破風五寸

建長寺　無(レバ)詩俗(ニ)了人(スヲ)

爰に詩なし我に俗なし夏木立

露江公溜池の高閣にはじめ
て涼を挽くとき當座と仰せ
ありければ

夏山にわれは御簾とる女かな

或人の從者參宮の餞とて

なつの夜を吉次が冠者に恨かな

夏の夜は寢ぬに疝氣のおこり鳧

夏の月蚊を疵にして五百兩
(二)

日待醉ひしらけて皆逃げち
りたる跡にひとり燈火をか
かげたる難有さよ

いつのまにお行ひとりぞ夏の月

雪に入る月やしろりと不二の山

淺草川逍遙

富士行や網代に火なき夜の小屋

しら雪に黑き若衆やふじ詣

はれてゐ又くもりゐ不二日記
氷室やま里葱の葉しろし日かけ草
夏草や橋臺見えて河通り
引舟の讃
夏草に臑でかるたをそろへけり
楓子居
なつくさや家はかくれて御用茅
麻村や家をへだつる水ぐるま
三藏といへるかたゐのもの
俳諧の歌仙とり出して點ね
がはしき由を申してしさり
ぬその卷のおくに
(一)あまさかる非人たふとし麻蓬
蕗の臺にとおもふも悲し深草寺(ミクサデラ)
百合の花折られぬ先にうつぶきぬ
(二)蟷螂の小野とはいはじ車百合
紅粉買や朝見し花を夕日影
望相州
(三)雲見草かまくらばかり日が照るか
ひるがほや猫の糸目になるおもひ
白露を石菖にもつ價かな
祐天和尚に申す
(四)夕顔にあはれをかけよ賣名號
ゆふがほや白き雞垣根より
畫に題す
(五)夕がほや一日のこす花の宿

(一)「麻の中の蓬は扶けずして直し」の語による
(二)「螳螂の斧を以て隆車に向ふ」の語を取れり
(三)雲見草は樗の異名、俗謠「坊さんよ沙彌さんよ鎌倉五山へ行かんすかひと夜は泊らんせ鎌倉ばかりに日が照るか」
(四)祐天和尚は自筆の六字の名號を多く信者に授けたりき
(五)五元集詞書に、「豐顏に米搗涼む哀也、故翁の句を繪にかゝせて讃望むあり其繪は夕顏の花をかきたり云々」

酒滿
葛の葉の酒典童子も二面
藻の花や金魚にかゝる伊豫簾
遊女小紫をかゝせて讃望ま
れしに
(一)藻の花や繪に書きわけてさそふ水
藻の花や海老越す袖にさゞれ石
茂叔讃
傘に蝶蓮の立葉に蛙かな
詞書略
(二)香一爐蓮に錢を包みけり
得正觀世音像
手に蓮膠にしまぬ匂ひかな
妙法蓮華經
たへなりや法のはちすの華經(ハナイカダ)
(三)惠遠法師は法花の筆受たり
といへども廬山の交りをゆ
るさゞりけるとかや
玉あらば爰で筆とれ白蓮社
泥坊の影さへ水の蓮かな
(四)靈夢を感じて東湖辨財天に
詣侍る
出ぬ茶屋に欺かれてもはちす哉
蓮切や下手にし切れば莖を角
寢てか問へ蓮にさそふ朝ぼらけ
海松の香に杉のあらしや初瀨山

(一)小町の「偖びぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」の歌に據る
(二)圓覺寺にて大巔和尚の位牌を拜せし時の句
(三)此事つれ〴〵草に見ゆ
(四)東湖は不忍池

籠前栽

海松和布をや蜑の腰簑青角豆(一)

みるの香や汐こす風の磯馴松

鎌倉の濱出を

海松ふさや貝とる出刄を海士にかる

瓜の一花

この花に誰あやまつて瓜持參

ならはしの鹽茶のみけり瓜の後

あたまから蛸になりけり六皮半(二)

母の日や又泣出す眞桑うり

水飯にかわかぬ瓜のしづく哉

瓜の皮水もくもでに流れけり(三)

浴衣着て瓜買ひにゆく袖もがな

(一)箱に野菜を入れて人に贈りし時の句なり

(二)瓜の皮を六皮半に剝けば蛸の形に似たりと也

(三)瓜の皮をむきたる形の蜘蛛に似たるを伊勢物語の趣に取合せたり

(四)詩人玉屑、閩僧可士送僧詩「笠重吳天雪、鞋香楚地花」

龜毛に餞

うりの皮笠は重しとかさねけり(四)

鬼のやうなる法師みちのくへ下るとて道祖神にとがめられ異例して何某のもとより心よわき文ども送られしに

辨慶も食養生やうりばたけ

瓜守や桂の生洲たえてより

干瓜やおしろいしても黑き顏

ほし瓜やうつむけて干す蜑小船

豐年

ぬか味噌にとしを語らむ瓜茄子

順禮のよる木のもとやところてん

皿鉢に駒の蹴あげや心太

手にとるも林檎は軸でおもしろし

百日のあゝら戀しやあらひ鯉(一)

百姓のしほるあぶらや一夜酒

醉登二階

酒の瀑布冷麥の九天より落るならむ(二)

ひや酒やはしりの下の石だたみ

會盟

交りのさめて亦よし夏料理

手にかわく蓼摺小木の雫かな

止波浦にて

地引すと蜑のまに〳〵暮の汐

鳴燒はゆふべを知らぬ世界かな(三)

土用のいりといふ日に

箒木に茄子たづぬる夕べかな

蓮生は歌はよまぬを虫はらひ

樟腦に代をゆづり葉の鎧かな

よめりせし時のまくらか土用干

捨人や木草にかけて土用干

うたゝ寢や揚屋に似たる土用ぼし

市原にて

虫ばむと朽木小町の干されたり

夜着をきてあるいて見たり土用干

法のこゑむなしき蠱の窟かな

宗竹のもとへ博多より文參

(一)徒然草に百日の鯉料理の事あり

(二)李白廬山詩「飛流直下三千丈、疑是銀河落九天」無村にも「心太さかしまに銀河三千丈」の句あり

(三)西行の鴫たつ澤の歌にいひかけたる也

りたり送りものやさしかり
ければぬしに代りて

生の松いかにわすれむ汗ぬぐひ
(一)
死の海を汗のうき寢や夢中人

歌仙貫之の古畫に

冠にも指をそふめり歌の汗
(二)
汗濃(アセゴ)さよ衣の背縫のゆがみなり

灸すゑてゆふだつ雲のあゆみ哉

白雨や内儀たま〳〵物詣に
(三)

市中白雨といふ題に

鳶の香も夕だつかたに腥し

夕だちや漏(モリ)をとむれば鼠の子

白雨にひとり外見る女かな

雨乞するものにかはりて

夕立や田を見めぐりの神ならば

ゆふだちに鶯あつく鳴く音かな

舟中嗑

さゝがにの筑波鳴出て里急ぎ

夕だちや法華かけこむ阿彌陀堂

ゆふだちや洗ひ分けたる土の色

白雨に獨活の葉ひろき匂かな

夕立やきのふの坂をのぼらば瀧

淺茅が原にあそびて晴間うれしく

白雨や蠅(イナゴ)ちひさき草の原

(四)ゆふだちや樂屋をかぶる傀儡師

(一)生の松原は筑前の名所

(二)みゝなし草に「もと實定といふ殿上にて冠を落せし時けふよりは紀の貫之と召さるべし紀の實定が冠落せば」

(三)「に」は「て」の誤か

(四)傀儡師の樂屋は即ち肩にかけたる箱なり

夕だちや家をめぐりて啼く家鴨

八雲たつこの嶮(ケン)嶮(マク)を雲の峰

櫛挽のこゝろすかすや雲の峰

高閣挽涼

香薷散犬がねぶつて雲の峰
(一)

西行と武藏坊には清水かな
(二)

にんにくの跡が清水のこゝろ哉

ある人大なるふくべを二つに引割て盞としたるに句をのぞむ

しみづかけ李白が面にかぶりけり

芋の葉に命をつゝむ清水かな

元角田川牛田といふ所にて

いそのかみ清水なりけり手前橋

井に髪あらふ女は思ひもかけぬつやなり

顔あげよ清水をながす髪の長(タケ)

露沾公能興行

日にやけて酒のみけるか清水鬼
(三)

世にありわびて西行の跡なつかしき儘

ひとりすむ友よ朧の糒(ホシヒ)雪清水

清めり濁れりの判談せよといはれて

此論は一荷ににへ氷水

嵯峨の御寺の開帳に

(一)事文類聚「淮南王安臨仙去、餘藥在鼎中、雞犬舐之、竝得飛昇、故雞鳴雲中、犬吠天上」

(二)西行は道のべの清水、雜屢は龜割坂にて京の君御産の時清水を汲みしこと義經記に見ゆ

(三)鬼清水は狂言にあり

まはらば廻れ振舞水の下向道
祇園殿のかり屋しつらふを
杉の葉も青水無月の御旅かな
里の子も夜宮にいさむ鼓かな
乳のめば清水がもとの祭かな

七日

鉾にのる人のきほひも都かな
山王氏子として
我等まで天下祭や土ぐるま
番付を賣るもまつりのきほひ哉
松原に田舍まつりや晝休み
瓜むいて狙にくはするあつさ哉
蓮の葉の赤鱔(アカエ)もかるゝ暑かな

かまくらにて

山賤が額の瘤のあつさかな
蠟かけの欄干あつし星は北
小女の帶にくるまるあつさ哉

冠里公備中松山初入の時

川と暑や浦の苫屋の軸うつり

傳九郎が持ちし扇に(一)

朝比奈の樂屋へ入りしあつさ哉
むらさめの木賊にとほる暑哉

呈露江公餞

供かたの鞘のあつさや岡の松
舟暑し覗かれのぞく闇の顔
身にからむ一重羽織も浮世かな

(一)俳優中村傳九郎

何と羽織縮緬は重し紗は輕し
晝よりいねて
うたゝ寢やかぶりつめたる麻頭巾
抱籠や妾かゝへてきのふけふ
曲水の旅宿に湖水をおもひ
出して
蓮やあふみ表をたかむしろ
うすものの風情日にはる團扇哉
紅に團扇のふさの匂ひかな

小町の讃

腰かけて休むなるべき大團扇

破扇の圖

維光が後架へもちし扇かな(一)
烏飛ぶ紺のあふぎのあつさ哉
水の粉に風の垣なる扇かな
ある御方より蕣書たる扇に
讃せよとあるに
朝顏やあふぎのほねを垣根哉
と書て奉りけるに重ねてま
た軍繪かいたる扇に讃のぞ
ませ給ふ
涼風や與市をまねく女なし
序令はじめて上京に餞
涼みまで都のそらや連と金(三)
すゞみ舟泥ぬりあひし游かな

所見

(一)維光は光源氏の家臣
(二)與市は那須與市をいふ
(三)腰纏十萬貫、騎鶴上揚州の意

藏か家か星か川邊のすゞみ哉

翁よりの文のかへしに

丈山の渡らぬあとを涼かな(一)

夕薬師すゞしき風の誓かな(二)

少年を供して不死の肴をと

とのへたる

此舟に老たるはなし夕すゞみ

布袋の讃

寢たうちを子ども起すな夕納涼

海を見て涼む角あり鬼瓦

淺草川歳々吟涼

此人數舟なればこそ涼みかな

河すゞみ顔に泥ぬる泳(オヨギ)かな

涼(スズミ)つむ安房や上總に舟はなし

すゞしさや帆に船頭のちらし髪

千人が手を欄手や橋すゞみ

すゞしさや先づ武藏野の流れ星

舷を玉子でたゝくすゞみ哉

韓退之捨酒吟あり

酒ほかす舟をうらやむ納涼かな

牛御前

是やみな雨を聞く人下すゞみ

餞久松肅山

筆をさす御笠やかろき下涼

人の子をめでて

涼しいか寢てつぶり剃る夢心

(一)石川丈山「渡らじなせみの小川の清ければ老の浪そふ影もはづかし」

(二)薬師には夜の空詣多きより夕薬師といふ

畫讃

大虛すゞし布袋の指のゆく所

日枝にむかひ給ふ御神を

十八の明神つねにすゞみかな

河原にて

曉を牛さへすゞみ車かな

この松にかへす風あり庭涼み

勘當の月夜になりし涼み哉

人にまだ暑い顔あり橋すゞみ(一)

自棄

たがためぞ朝起ひるね夕すゞみ

上下と裸の間をゆふすゞみ

蟹をもてなす人に

うき舟のすゞしき中へ蟹の甲

はなむけの一句を扇にのぞ

まれて生の松原のうたをよ

す

木曾路とは涼しき味をしられたり(二)

祇公日次の題をとりあはせ

て

河簀垣德利もひたす流かな

遠浦の獵船押送りしてこの

橋の下に入る

帆をかふる鯛のさわぎや薫る風

夏醉やあかつきごとの柄杓水

子の肩とみつはくむなり夏旱

(一)千載、俊成「すみわびて身を隱すべき山里にあまり隱なき夜半の月かな」

(二)新古今、枇杷皇太后宮「太宰帥隆家下りけるに扇賜ふとて、すずしさは生の松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ」

青流亡妻をいたみて

園女とはこれや此世を夏の海

夏痩に能因しかも小食なり

蕣になくや六月郭公

庵の留守

すびつさへすごきに夏の炭俵

隣家に樹をすく人ありその

四時先後を愛する事をしらず

何かいはむ六月桐をうゑる人

洞木(ウツボギ)の鬼なおそれそともし笛(一)

市中の光陰はことさらにいそがしきを

秋ならすさゝら太鼓や夏神樂

御祓

夏祓御師の宿札たづねけり

大雨大風

吹降りの合羽にそよぐ御祓かな

(一)ともし笛は照射の時に用ふる鹿笛

其角發句集下

坎窩久臧考訂

秋之部

文月や陰を感ずる蚊屋の中

詞書略

空や秋蚊屋を明れば七多羅樹

身にしむや宵曉の舟じめり

父の煩はしきを心もとなく

まもり居たるにいなみがたき會に呼びたてられて此句を申出たれば一折過るほどに快しといふを告げたり妙感のあまりこゝにしるす

秋といふ風は身にしむくすり哉

格枝亭柱がくしに

乾(ヤ)兌坎震離(ス)艮坤巽

空や秋水ゆりはなす山風と

御よみゐへ下の字自然にまはりゐこそ彌三五郎にてゐ(一)

秋夜話隱林

雨冷(ビエ)に羽織や夜の簑ならむ

文月やひとりはほしき娘の子

七夕や暮露(ボロ)よび入れて笛をきく(二)

星合やいかに痩地の瓜つくり

(一)撮解に、「山本彌三五郎碁盤人形を使ふ手づまの人形の元祖……人形のやすちかにまはる如く又手づまの如く下の字よめんとの意なるべし」

(二)暮露は虚無僧

ほしあひや山里もちし霧のひま
ほし合や女の手にて歌は見む
星あひやあかつきになる高燈籠
ほしあひや人のこゝろの爪はじき

比叡にのぼりて

ほしあひや雙林塔の鈴のおと
丸腰の冶郎笠とれ星むかへ
笹の葉に枕つけてやほし迎へ
二星うらむ隣のむすめ年十五(一)

雨後

鵲や石をおもしの橋もあり
はしとなる烏はいづれ夕がらす
露橋やまつとは宇治の星姫も
かさゝぎや丸太のうへに天の川

新居

塀梢かけてかよへや銀河
あまの川けふのさらしや一しほり

弄化生

あひろの子孕るといなや天の川
樽買がひとつ流すやあまの河
大切の夜は明けにけり天の川

素堂が母七十七歳の賀　題

秋七草

星の夜よ花火紐とく藤ばかま
妻星よあふに一くせある女か
けふ星の賀にあふ花や女郎花

(一)白氏文集「隣家嬢恨歳」

葛花や角豆も星の玉かづら
明星や額に落る鞠ほくろ

二挺立歸棹

鬢をやくまくらつれなし星の露
女わらべの心ばへして籠に
露かひ侍るを七夕の手向草
にせしかば
露まつや味噌こしふせて蟋蟀

七夕歌盡しなどいふ草紙

行く水に數かくよりも鷺に傘(一)
三遷のをしへに慣ひて七つ
になりける姪を寺へのほせ
たれば一日ありて七夕に歌
を奉りけるをいとほしみて
文月や産るゝ文字も母の恩
井の柳きのふを桐の一葉かな
水の蛛ひと葉に近くおよぎ寄る
肅山子のもとめ笙の畫に
けしからぬ桐の一葉や笙のこゑ
草庵に水つきて住みわびけ
る僧をとひて
手拭の笙よりもるひと葉哉

餞肅山子

かけて待つ伊豫簾もかろし桐の秋
春日野や風こく猿の一葉川
朝なくに咲きかへての御

(一)撮解に、「子供の弄ぶ七夕歌づくしの表紙鷺の傘をくはへて舞ふ所を畫く、伊勢物語に行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」

歌を感じ奉りて

あさがほは仙洞様をいのちかな

朝顔にしをれし人や鬢帽子(一)

あさ顔やとれぎはに咲く猪口の物

朝顔に立ちかへれとや水のもの

あさがほやよし見む人は竹格子

すゝきを書けるかけ物の讃

朝顔や穂に出るまで這ひあがる

蕣にきのふの瓜の二葉かな

あさ顔にいつ宿出し御使

殊に晴れて雷朝顔にいさぎよし

あさがほの日陰まだあり中老女

暮蕣といふ題を

あさがほに花なき年の夕かな

道心の妻しをれて恨む槿垣

市隅

西側に燈籠なかれや三日の月

美女美男灯籠にてらす迷ひかな

増上寺晩景

馬老ぬ燈籠使の道しるべ

見る人もまはり灯籠に廻りけり

遊山火を蘆の葉わけやたま迎

かへらずにかのなき魂の夕べかな

たらちねに借金乞はなかりけり

右二句文有略

魂まつり門の乞食の親とはむ

(一)後水尾院「朝顔は朝な〳〵に咲きかへてさかり久しき花にぞありける」

きのふみし人や隣のたままつり

棚經よみに參られし僧の袖

よりおひねりを落しけるか

の授記品の有無價寶珠と說

せ給ふ心をおもひて

衣なる錢ともいざやたままつり

棚經やこのあかつきのあかの水

棚經や聲のたかきは弟子坊主

送り火や定家のけぶり十文字(一)

淵明が隣あつめや生身たま

生靈(イキミタマ)酒の下らぬ親父かな

侍坐

さし鯖も廣間に羽をかはしけり

文月をかねて刺鯖を獵領し

世の人のいはひ草とすと

鯖切のかくてもへけり大赦迄

親も子もきよき心や蓮うり

陀羅尼品

銀を罪のはかりや墓まゐり

分郊原

みぞはぎや分限にみゆる髑髏

小娘の生ひさきしるしかけ踊

一長屋錠をおろしてをどり哉

青山邊にて

躍子を馬でいづくへ星は北

踊召して番の太郎に酒たうべけむ

(一)定家「大原やをしほの山の横雲たつは柴屋の烟なるちん」

伊勢の鬼見うしなひたる踊かな

千之と黄檗にあそぶ

盆前をのがれし山の二人かな

玉川の水筋かれたるとし

水汲の曉起やすまふぶれ

投げられて坊主なりけり辻角力

よき衣の殊にいやしや相撲とり

卜石やしとゞにぬれて辻ずまふ(一)

上手ほど名も優美なり角力取

相撲氣を髪月代(サカヤキ)のゆふべかな

神のため女もうるや角力札

壹兩が花火まもなきひかり哉

扇的花火たてたる扈從かな

小屋涼し花火の筒のわるゝ音

鵜さばきも逆櫓もやるや花火賣

稲妻やきのふは東けふは西

妻におくれて後子にもはな

れたる人に

稲妻や思ふもいふもまぎるゝも

稲妻や朝暾(アサヨケ)したる空に又

齋院の此戸さしけむ露なれや

船ばりをまくらの露や閨の外

周信が瓢の畫に

しら露も一升入のめぐみかな

石藏寺對僧

手に提げし茶瓶やさめて苔の露

(一)撮解「師説に相撲取のまはしを三石といふと、ふんどしと讀まむかと、愚按ずるに三つゆひの所をいふか……又三つゆひとよむべきか」

露の間や淺茅が原へ客草履

霧汐烟行(キリシホケブリ)くすゐかけて須磨の浦

宇治山水

川ぎりや茶立ぶくさののし加減

中の鄕にて

幸清が霧のまがきやむかし松(一)

遠里小野の忠守にまかりて

霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ

あさぎりに一の鳥居や波の音

宵闇や霧のけしきに鳴海がた

笠取れよ富士の霧笠しぐれ笠

朝ぎりや空飛ぶ夢を不二颪

彌陀のりさうをかうむらず(二)

ばとこそたのみしにこれら

が結緣は

夏のうちに杓子をかぶる鼠かな

杓子のうせけるをとぶらひ

けるなり

つぼみともみえず露あり庭の萩

ことば書畧

萩もがな菩薩にて見し上童

萩な苅りそ西瓜に枕借す男

文はこゝに畧

はぎの露蛤貝にくすり哉

切悠亭にて

日盛を御傘と申せ萩に汗(三)

(一)幸清次郎は小鼓の家也、融の謠に「松風も立つなりや霧のまがきの鳴がくれ」とあり

(二)「りさう」は利生

(三)古今「みさむらひみ笠の木と申せ宮城野の下露は雨にまされり」

(一)鹿は萩を妻と戀ひ親むより萩が花妻ともいへり

(二)「名にめでてをれるばかりぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」の歌による

曉松亭

獅子舞の胸分にすな庭の萩

ねだり込は誰の内儀ぞ萩に鹿(一)

仙石玉芙公御加番に餞別

萩すりや傘すかすむかし鞍

專吟庵

萩すゝきむすび分けばやササ芽

二間茶屋にて

白馬の尾髪吹きとる薄かな

召すことになれし子方や花すゝき

在原寺にて

僧ワキのしづかにむかふ芒かな

井筒を略したる畫に

いそのかみ竹輪にむすぶ薄かな

角文字や伊勢の野飼の花すゝき

ぜにかけ松

蛛のいや薄をかけて小松原

二見にて

岩のうへに神風寒しはな芒

沾德餞別

點せがむ人の宿かれ花すゝき

牛にのる嫁御落すな女郎花

遍昭の讃

僧正よ鞍がかへつて女郎花(二)

一夜前栽といふ事を

御城へは何に成るやらをみなへし

(一)曼珠沙華は彼岸花、死人花などいふ植物

(二)「はゝ」一本「眞」とあり

(三)「髭がちなる云々」枕草紙の文による

(四)山城は本所三目に住みし釜師藤兵衛、鈷はカマ又はナベと讀むべきか

(五)みゝな草「花鳥餘情にさまゝゝの香を紙に包て五色の糸にて結ひかけて佛に奉るとあり、唐櫃の先には糸のやうなる物あり、中七文字味ふべし」

短冊かゝせらるゝ迷惑さを

葛の葉のあかい色紙をうらみかな

悲しとや見猿のためのまんじゆさげ(一)

茶筌もてはへの掃除や白芙蓉(二)

あまがへる芭蕉にのりてそよぎけり

ばせを葉に雀も角をかくし鳧

醤油くむ小屋の堺や蓼のはな

花もうし佐野のわたりの蓼屋敷

酢を乞ふあり隣の蓼のはなざかり

雞頭や松にならひの清閑寺

たばこ干す山田の畔の夕日かな

取る日よりかけてながむる烟草かな

夢となりし骸骨をとる荻の聲

髭がちなる男の椎つみたる(三)

はにげなかるべし

西瓜くふ奴の髭のながれけり

西瓜喰ふ跡は安達が原なれや

山城がまだ鑄ぬ形や鈷西瓜(四)

芋をうゑて雨を聞く風のやどり哉

やま畑の芋ほるあとに伏猪かな

嵐蘭一子孤愁をあはれむ

芋の子もばせをの秋をちから哉

淺茅が原

仇し野や燒もろこしの骨ばかり

吉田氏

唐櫃も糸をたれたる手向かな(五)

唐秬を流るゝ沓や水見舞
蘆の穂や蟹をやとひて折りもせむ
　妓子萬三郎を悼て
折釘にかづらやのこる秋のせみ
鬼灯のからを見つゝや蟬のから(一)
　工齋をいたむ
其人の鼾さへなしあきの蟬
　亡父葬送場にて
一鍬に蟬も木の葉も脱(モヌケ)かな
頬摺やおもはぬ人にむしやまで
元結のねるまはかなし虫の聲
　柴雪と伊勢をかたりて
故郷もとなり長屋か虫のこゑ

(一)今昔二十二「空蟬はかちを見つゝも慰めつ深草の山煙だにたて」

松むしに狐を見れば友もなし
すむ月や髭をたてたるきりぐす
まくり手に松虫さがす淺茅かな
猫にくはれしを蟀(イトヾ)の妻はすだくらむ
すゞむしや松明さきへ荷はせて
蜻蛉やくるひしづまる三日の月
山の端をやんまかへすや破れ笠
酒さびて螽やく野の草もみぢ
酒買にゆくか雨夜の雁孤(ヒト)つ
一しほの妻もあるらむ天つ雁
　翁にともなはれて來る人の
　　珍らしきに
おちつきに荷兮が文や天津雁

題湯豆腐
あとの湯か雁を濁さぬ豆腐哉(一)
　隣家に元結こくを
大絃は晒す元結に落つる鴈(二)
雁の腹見送る雲やふねの上
しら雲に聲の遠さよ數は雁
　冠里公御わたまし祝奉りて
初鴈や臺は場はれて百足持(三)
品川も連にめづらし鴈のこゑ
　自畫
片足はやつしゐ也小田の雁
　詞書を畧す
陣中の飛脚もなくや鴈の聲

(一)「たつ鳥跡を濁さず」の諺にいひかく
(二)元結車の音を「大絃嘈々如急雨」に比す
(三)一本の巨材に多人數かゝりて運ぶをむかで持といふ

鳴たちてさびしきものを鳴をらば
泥龜の鳴に這ひよるゆふべかな
順檢に問はずがたりや百舌の聲
　むすめ食ひぞめに
鵙啼くや赤子の頬を吸ふときに
　感微和尚に對す
そば打つや鶉衣に玉だすき
　餞秋航
諸鶉駒はまかせぬ脇目かな
　平家の衰を語るに
かへり來て福原さびし鶉たつ
みゝつくの頭巾は人に縫はせけり
木兎や百會にはかり巾りもの

仁兵衛の片山かげやわらひ菟

秋葉禪定下山

かし鳥に杖を投げたるふもと哉

山雀の戸にも窓にもなら柏

春澄にとへ稲負鳥といへるあり

小鳥盡長歌

四十から小夜の中山五十から

中村少長夫婦連にて上京せし時

山鳥も人をうらやむ旅寢かな(一)

つばくらもお寺のつゞみかへりうて(二)

鹿の一聲といふ小歌のさんに

(一)中村少長は俳優、山鳥は雌雄谷を隔てゝ眠るといふ

(二)謡曲難波「梅が枝に來居鶯春かけて鳴けども古き鼓の苔むして打鳴らす……拔頭の曲はかへりうつ」

(三)木辻は奈良の遊廓

(四)鰍はハゼに似たる川魚

更けかたを誰か御意得て鹿のこゑ

さをじかや細きこゑより此ながれ

木辻にて(三)

門だちの袂くはへる男鹿かな

小原女や紅葉でたゝく鹿の尻

合羽着てしかにすがるや秋葉道

暮の山遠きをじかのすがた哉

自畫讃

さを鹿やばせをに夢の待ちあはせ

苅りのけよそれを縄なへ小田の鮭

鰍(カジカ)此夕愁人は猿の聲を釣る(四)

さちほこに笹をかまする鱸かな

遠州二股川を河ふねにて下り侍るに推河脇といふ所逆水大切所を越て

打つ櫂に鱸はねたり淵のいろ

小いわしや一口茄子藤の門

ほのぐと朝飯にほふ根釣かな

高雄にて

此秋暮文覺我をころせかし

岡釣のうしろすがたや秋のくれ

ない山の不二に竝ぶやあきの暮

木兎のひとり笑ひや秋のくれ

あきのくれ祖父(オホヂ)のふぐり見てのみぞ(一)

青海や淺黄になりてあきの暮

寂蓮

和歌の骨槇(コヅ)たつ山のゆふべ哉(二)

あきの空尾上の杉をはなれたり

鑑素堂秋池

風秋の荷葉二扇をくゝるなり

背面の達摩を畫て

武帝には留守とこたへよ秋の風

秋山や駒もゆるがぬ鞍のうへ

相模川洪水落水接天

狼の浮木にのるやあきの水

あきの心法師は俗の寢覺哉

野田玉川に西行上人の堀井

あるよし

濁る井を名にな語りそ秋のあめ

(一)祖父のふぐりは蟷螂の巣をいふ

(二)寂蓮「寂しさは其色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮」

工齋三回忌に智海師をともなひて

三人の聲にこたへよ秋のこゑ

子々等には猫もかまはず夜寒哉

酒もる詞を切題にして間を

あびせばや夜寒さこその空寢入

悼朝叟

此人に二百十日はあれずして

春日法樂

今幾日あきの夜結を春日やま

砧の町妻吼ゆる犬あはれ也

芭蕉廬の夜

墨染を鉦鼓に隣るきぬた哉

點取におこせたる懐紙のおくに

二卷に目をさましたる砧かな

みの路に入て

(一)きぬたきかむ孫六屋敷志津屋敷

ある長者のもとにて

中の間に寢ぬ子幾人さよぎぬた

和水新宅

さい槌の音を仕舞へば碪かな

餞青流難波

(二)蘆刈のうらを喰せてきぬた哉

雪の下にて

(三)きぬたうつ宿の庭子や茶の給仕

(一)孫六志津共に美濃の鍛工

(二)大和物語なる蘆刈は女富みて男貧しきに青流は之に反して妻難波にありて貧しく暮ちすと也

(三)庭子は奴婢の間に出來たる子

奥好(オクズキ)の殿やうつらむ唐ごろも

駒曳や岩ふみたてゝもと筥根

こまひきの題にて

甲斐駒や江戸へ〳〵と柿葡萄

眺めやる函谷やけふ驢馬迎

盃と椀を畫て

中椀の黑いも御意に三日の月

紀川いくせもあり

たつか弓矢に行く水や三日の月

池水も七分にあり宵の月

雲井にかけれの畫に

傘持は月に後るゝすがた也

小くらがり故郷の月や明石潟

水想觀の繪に

我書てよめぬものあり水の月

(一)夢かとよ時宗起きて月の色

あつたにて

更々と禰宜の鼾や杉の月

月出て座頭かたむく小舟かな

宿とりて東をとふやくれの月

維摩の讃

(二)山のはは大衆なりけり床の月

張良圖

胷中の兵いでよ千々の月

布袋の月を掬る繪に

有てなき水の月とや爪はじき

(一)源氏、明石「秋の夜の月毛の駒よわがこふる雲ゐにかけれ時のまも見む」

(二)矢根五郎の歌舞妓の澤瑞璃に「時宗夢さめむつくと起き」とあり

(三)維摩が三千の大衆を方丈の室に入れたりといふ事を比喩とす

閑倚橋

猿這ひに我とらんとや橋のつき

寺の月葡萄膾は葉にもらむ

小野川檢校に餞

入る月や琵琶を帛にをさめけむ

聲かれて猿の齒白し峯の月

契不逢戀

閨の火にひかる座頭や袖のつき

病中制禁好

橋桁の串海鼠はづすや月の友

遊子

いねぶるな松のあらしも江戸の月

鴈啼くや弓弛をみれば暮の月

玉津島歸望

わかはみつ更井の月を夜道かな

燃杭に火のつきやすき月夜哉

庖丁の片袖くらし月の雲

長柄文臺之記

もる月もむかしの橋に朽目かな

仲麿畫讃

月影や舌を帆にまく三笠やま

月をかたれ越路の小者木曾の下女

月になりぬ波に米守る高瀬歌

滿百

ありあけの月になりけり母の影

(一)萬葉二「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」

(二)詩の舟は大納言經信桂川の舟遊に後れて至り詩歌管絃いづれの舟にても寄せ候へといひし著聞集の故事、山市丸と川武丸とは有名なる屋形船の名

(三)白樂天琵琶行「十三學得琵琶成、名屬教坊第一部」

(四)西鶴の句、「鯛は花は見ぬ里もありけふの月」

(三)其角の弟信濃にあり、老父看病のため江戸に來りし時の句也

有明や待夜ながらの君と伯父

所思

いざよひも公づくしや十四日

待宵や明日は二見へ道者われ

木母寺に歌の會ありけふの月

烏帽子屋はゑぼしきて見よけふの月

雨

駒とめて釜買ひとりけふの月

川すぢの關屋はいくつけふの月

納屋に何雨吹きはれてけふの月

含秀亭

富士に入る日を空蟬やけふの月

琵琶行をよむ

十五から酒をのみ出てけふの月

所思 京にて

いはぬ事三つ心に名ありけふの月

汐汲をかゝへて見ばやけふの月

鯛は花は江戸に生れてけふの月

ましらふに飲まざるもありけふの月

文略

信濃にも老が子はありけふの月

酒くさき鼓うちけり今日のつき

淺妻舟の繪に

おもふ事なげぶしは誰月見舟

得蟹無酒

蟹を畫て座敷這はする月見哉

(一)

(二)

(三)

人音や月見と明すふしみ草

風雨

雷に楫はなひきそ月見舟

布袋の畫に

月みるも杖につなげる小舟かな

平家落の屏風に

宿なしのとられて行きし月見哉

てつぺんに丸盆おいて月見かな

一休の狂詠自畫を寫して

律師沙彌相剃をして月見かな

上交語上

平家なり太平記には月も見ず(一)

娘には丸きはしらを月見かな

僧と咄あかして

小便に起きては月を見ざり鳧

名月や疊のうへに松のかげ

名月やこゝ住吉のつく田じま

名月や居酒のまむと頰かぶり

めいげつや竹をさだむるむら雀(二)

名月や金くらひ子の雨の友

名月やかゞやくまゝに袖几帳

三日糧をつゝむといふに

めいげつや十歩に錢を握りけり

柴ふるひ荷へる人に

名月や皺ふるびとの心世話

めいげつや人を抱く手を膝がしら

(一)平家は流石に風流なり、太平記には月見の記事なし

(二)此句「明星や櫻定めぬ山かつち」と同調にして有名なり

鐘聲客船

めいげつや御堂の太鼓かねて聞く

名月やことしも筆にへらず口

新月やいつをむかしの男山

閏十五夜　前の十五夜江戸雨

ふりければ

御番衆は照る月を見て駿河舞

待乳山

今宵滿てり棹のふとんにのる烏

松前の君に申しおくる

こさ吹かば大根でけさむ秋の月(一)

宗因がまづ月をうるの句を

とりて

芋は〳〵凡そ僧都の二百貫(二)

君がいひけむと云すてゝ出

たるあした

物かはと青豆うりが袖のつき

いざよひや龍眼肉のからごろも(三)

十六宿は儒者と名乘りし姿なり

あたかの童に扇とらする畫

に

關守の心ゆるすや栗かます

山川やこずゑに毬はありながら

いが栗に袖なき猿のおもひ哉

栗賣の玄關へかゝる閑居かな

あふひの上の後花子喜太郎

(一)蝦夷人の息を吹きて幻術を行ふをこさ吹くといふ

(二)徒然草に盛親僧都芋頭を好み師匠より讓られたる錢二百貫と坊とを芋に代へて食ひたりと、宗因の句は「芋は芋はまづ月をうる今宵哉」

(三)撮解「龍眼肉は殼を少し穿ちて實をとる形の既望の始めて缺くるに似たり、かち衣は殼をいふ比喩なり」

に

三栗のうはなりうちや角被(ツノカブキ)
生栗を握りつめたる山路かな

如是果のこゝろを

二子山ふた子ひろはむ栗のから
泊瀬女に柿のしぶさを忍びけり

嵯峨遊嶮

清瀧やしぶ柿さはす我こゝろ(一)

霧香月灯を憐む

古寺や澁紙ふまむところだに

駿府御番に旅立給へる人に

たがうへに賤機ごろも木澁桶
御所柿やわが齒にきゆるけさの霜

(一)さはすは柿の澁みを除き去ること

問ひ來かし椎いる里の松葉より
月日の栗鼠葡萄かつらの甘露あり
子籠の柚の葉にのりし匂ひかな
南天・やおのが實ほどの山の奥
南天の實をつゝめとや雁の聲
南天や秋をかまへる小倉やま

子なきことをなげく夫婦に

おもふ葉は思ふ葉にそへ秋菓

種竹三竿

竹のこゑ許由がひさごまだ青し
茸(クサビラ)や御幸のあとの眉つくり
茸狩や山のあなたに虚勞病
たけがりや鼻の先なる歌がるた

(一)冷泉は澤瑠璃姫の女

(二)夫木集、まつだけの隱題「足曳の山下水に れ〳〵て其火まつたけ衣あぶちなん」

(三)みくな草「元祿年間三圍社内に姥が茶屋といふありて此姥が呼べば狐出來りて供物を持去ると也、今も御社の艮位に彼の姥が石像あり」

(四)參入の吉野より入りて熊野へ出るをかけ出といふ

松吟尼の庭に嵯峨野の土を
ほりうつして薄に松など其
まゝにもてなす中にしめじ

初たけ有り

行かずして都の土や木の子狩
松の香は花と吹くなりさくら蕈

鳳來寺の山の澄を過る時

冷泉の珠數につなげる茸かな(一)
松の葉にその火先づたけ薄醤油(二)
川芎の香にながるゝや谷の水
稻葉見に女待ちそへすみだ川
いねこくや穀(ヒヨコ)をにぎる藁の中
敷臺に稻干す窓は手織かな
いつしかに稻を干す瀨や大井川
稻塚の戸塚につゞく田守かな
にはとりの卵うみすてし落穗哉
早稻酒や稻荷よび出す姥がもと(三)
足あぶる亭主にとへば新酒かな

太郎二郎の貝をとりて

かけ出の貝にもてなす新酒哉(四)

横几追悼

一鍬を手向にとるや新麴
よこ雲やはなれ〳〵の蕎麥畠
種茄子北斗をねらふひかり哉
茶のけしき咄しむころや新豆腐
生綿とる雨雲たちぬ生駒山

(一)繪巻後素の語によせたる作意なり

あほうとは鹿もみるらむ鳴子曳
七十の腰もそらすか鳴子引
雞の下葉つみけり宿のきく
いきぬけの庭や鐙摺菊の花
手のうちの觳(ヒヨコ)こぼれて菊の露
駕にぬれて山路の菊を三島かな
しほらしき道具何ある菊の宿
荷兮が從者短冊ほしがるに
土器の手ぎは見せばやけふの菊
けふの菊小僧で知るやさらさ好
きくの香や瓶よりあまる水に迄
白雞の碁石になりぬ菊の露
雨重し地に這ふ菊をまづ折らむ
こは誰に雨ののこりの袋ぎく
畫菊
きく白く莟は後にかゝれけり(一)
素堂殘菊の會に
此きくに十日の酒の亭主あり
菜苑
菊をきる跡まばらにもなかり鳧
病起 千山より菊を得て
大母衣のうしろを押すや瓶の菊
三島にて重陽
門酒や馬屋のわきの菊を折る
宮川のほとりに酒送らせら
れて

(一)産兒の始めての實をかに屎といふ

重箱に花なきときの野菊哉
みちとせの桃の名におふと
よみけるに
いかで我七百の師走菊にへむ
竹苑のやごとなきたねをう
つして
出世者の一もとゆかし作り菊
時服藏菊にはきくの笆(マガキ)かな
千々のきく歌人の名字しのばしく
袖の浦といふ貝づくしに
白菊を貝の實にせむ袖のうら
笠きたる西行の圖に
菊を着てわらぢさながら芳しや
女の子をねがひてまうけた
る人に
かに屎にうつらふ花の妹かな(一)
觀世殿十日の菊をかねてより
宸宴の殘りもがもな菊膾
未曉唸
鐘つきよ階子に立つて見る菊は
翁さび菊の交(ツル)むに任せたり
籠鳥のゆるすにうとし園の菊
千家の騷人百菊の餘情
菊うりや菊に詩人の質(カタギ)をうる
柚の色や起きあがりたる菊の露
きくの酒葡萄のからにしたみけり

(一)謡曲高砂に阿蘇宮の神主友成播磨一見のため都に上る事あり

(二)元政の身延紀行に十三夜にいねかねたる文あり

(三)喜撰の歌によりていふ

(四)撮解「梅花心易に冬至の時、邵康節一子と爐を擁して座するに斧をかりに來りしを鉞と斧との考、父子の心易あり、月夜に藥研をかりに來るはこがしの用ならめと推せる、後の月の閑寂か」

内藤風虎公十三回忌

菊の香やたぶさよごれぬ箙さし

九月九日扇を拾ひける人に

きくや名も星に輝く禮あふぎ

菜花餞別

友成は菊の使に播磨まで(一)

手入かなよしある賤がむかし菊

産寧坂くだりて

菊紅葉鳥邊野としもなかり鳧

菊もみぢ水やはじけて流るめり

水鼻にくさめなりけり菊桃(モミヂ)

母と月見けるに

寢られねば雨元政の十三夜(二)

うれしさや江尻で三穂の十三夜

しかぞすむ茶師は旅寢の十三夜(三)

藥研(四)では粉炊(コガシ)おろすか後の月

後の月上の太子の雨夜かな

のちの月躍りかけたり日傘

白鷺の蓑ぬぐやうに後の月

いづれも古郷をかたるに

後の月松やさながら江戸の庭

はらゝ子を千々にくだくや後の月

家こぼつ木立も寒しのちの月

樽むしの身を栗に鳴く今宵かな

住の江や夜芝居過ぎて浦の月

白玉に芋を交(カヘ)ばや瀧のつき

(一)參宮に圓頂の者は附髪する事あるよりいふ

(二)白詩「林間暖酒燒紅葉」平家物語「詩の心をばされればそれらには誰が教へけるぞや」

やよや月夜は物なき木挽町

漬蓼の穂に出る月を名殘かな

笈の菓子古郷さむき月見哉

御遷宮の良材ども拜奉りて

大工達の久しき顔や神の秋

御齋にまうで奉りて

御穂をとりて髪ある眞似のかざし哉(一)

内宮法體の遠拜なるに

身の秋や赤子もまるる神路山

外宮

日ははれて古殿は霧のかゞみ哉

太々や小判ならべて菊の花

雲津川にて

花すゝき祭主の輿を送りけり

二月堂に參りけるに七日斷食の僧堂のかたはらに行ふ聲を聞て

日の目見ぬ紙帳もてらす桃かな

かつちりて翠簾に掃(ハカ)るゝ紅葉哉

戸越山庄

むら紅葉荏(エ)の實をはたく匂かな

谷へつけ鹿のまたきの紅葉がり

三條橋上

片腕はみやこにのこす紅葉かな

紅葉にはたが教へける酒のかん(二)

山姫の染がら流すもみぢかな

(一)みゝな草「智海といへる人への文に、十八町の岩壁を九文にて腰をゐし申候いづれ親仁が小便に出る手を引てきへ孝行の名は取候しにかやうの無用の骨を折申候」

(二)謡曲江口「普賢菩薩とあらはれ舟は白象となりつゝ光と共に白妙の白雲に打乗て西の空に行きたまふ」

宮根

杉のうへに馬ぞ見え來る村紅葉
もみぢ見る公家の子達かはつせ山
道役に紅葉はくなり佐夜の山
もみぢして朝熊の柘といはれけり

大山

(一)腰押やかゝる岩根の下もみぢ
山ふさぐこなた面や初もみぢ

新殿六間港

水つかぬ塵のはじめや下紅葉
氣のつまる世やさだまりて岩に蔦
木葉の食蘿を狄(エビス)のにしき哉
この風情狂言にせよ蔦のみち
うつの山の繪に
笈の角梢の蔦にしられけり
鶴が岡古樹のもとにて
ありし代の供奉の扇やちる銀杏

遊弘福寺

木犀や六尺四人唐めかす
うら枯や馬も餅くふうつの山
餞少長上京
うらがれに花の袂や女ぼれ
白扇倒懸東海天といへる句
をつねに此頂に對して手に
握りたる心ちせらる

(二)白雲の西に行くへや普賢不二

(一)徒然草「女のけはる足駄にて作れる笛には秋の鹿必ず寄るとぞいひ傳へ侍る」

(二)新古今、頼政「こよひたれすゞ吹く風に身をしめて吉野のたけに月を見るちん」

(三)始めて蕉門に入りし時の句なり

洞房の茶屋孚兒生前笛を好
みけるがうせたるを悼て
とぶらへや笛のためには塗足履(一)
見し月や大かたはれて九月盡

吉野山ぶみせし頃

頼政(二)の月見どころや九月盡

怨閨離

傾城の小歌はかなし九月盡
雁鹿蟲(三)とばかり思うてくれけり暮

九月盡

寢ぬ夜松風身のうき秋を師走哉

冬之部

神無月ふくら雀にまづ寒き
高砂や禰宜の湯治の神無月
玉津島にて
御留主居に申しおくなりかみな月(一)
高野にて
卵塔の鳥居やげにも神無月
東には祇園清水とうたへば
楊弓に名のるをんなや神無月
神の旅酒勾は橋と成りにけり(二)
家々の留主居よるなり大社
あれきけと時雨くる夜の鐘の聲

(一)原本「御留居」とあり、今改む

(二)酒勾川は春秋の落水烈しき時は橋を引崩し冬夏のみ橋ありし也

鷺からす片日がはりやむらしぐれ
しぐるゝや葱臺のかた柳
遊金閣寺
八疊の楠の板間(イタマ)をもるしぐれ
蓑を着て鷺こそすゝめ夕時雨
むらしぐれ三輪の近道たづねけり
釣柿の夕日にかはる北しぐれ
芭蕉翁病床
吹井より鶴をまねかむ時雨哉
飼猿の引窓つたふしぐれかな
時雨痩松私の物干にと書けり
時雨もつ空の間にあへ酒の
かんといふ人に

しぐれ來る醉や殘りてむら時雨
當麻寺奥の院にて
小夜しぐれ人を身にする山居かな
松蔭の硯に息をしぐれかな(一)
三尺の身を西河(ニシガワ)のしぐれかな(二)
本多總州公に侍坐しける夜
村雨とひとしく蝙蝠の鳴く
に發句せよとあるに
蝙蝠や柱(デ)を捻(ヒネリ)たる一しぐれ
守山の子にもりを蒼く時雨かな
夢よりか見はてぬ芝居むら時雨
柴はぬれ牛はさながら時雨哉
神鳴のまことになりし時雨かな

(一)五元集の詞書に、「當院に靈寶什物さまざま多し、中にも小松殿法然上人にまゐらせられし松陰の硯あり云云」

(二)西河の瀧は吉野にあり

(三)これは詞書にあちて「七とせを知らずやひとり小夜時雨」の句の脇句なるべし

(四)深川長慶寺に芭蕉の墓を移したれば也

今熊をしぐるゝ頃はあれぞかし
國阿の繪
我山は足駄いたゞく時雨かな
よそに名たつるからさきの(三)
まつ
しぐるゝやありし厠の一つ松
おもしろき人をよび出す時雨哉
島むろで茶を申すこそしぐれ哉
松原のすきまを見する時雨かな
ばせを翁終焉の記に
なきがらを笠にかくすや枯尾花
同年忌に　三句
しぐるゝやこゝも舟路を墓まゐり(四)

(一)「それよりも」は五元集に「それよりは」とあり、鳳尾は芭蕉の一名

七とせと知らすやひとり小夜しぐれ
辰霜(アサジモ)や鳳尾の印のそれよりも(一)
達摩忌や自剃(ジリ)にさぐる水かどみ

文有畧

風よ世にひろはれぬみなし栗
こがらしとなりぬ蝸牛のうつせ貝
こがらしや沖より寒き山のきれ
風に氷るけしきや狐の尾
木枯や瀬多の小橋の塵も渦

曲翠と幻住庵のあとを尋て

まほろしもすまぬ嵐の木の葉かな
しばらくもやさし枯木の夕づく日
からびたる三井の仁王や冬木立
冬木立いかめしや山のたゝずまひ

靈山のみちにて

かまきりの尋常に死ぬ枯野かな

畫讃

松一木乞食の夜着のかれ野哉
捨人やあたゝかさうに冬野ゆく

芭蕉翁を見送りて

冬がれを君が首途(カドデ)や花ぐもり
三日月のをぐらきほどに玄猪(キノコ)哉

何某の家にて御流頂戴のこと

とぶきに

紅葉の下部もあらむるのこかな
玄猪とや祖父のうたふ枝折萩

(一)生島新五郎は俳優、嚴冬に扇使ふも笑ふべかちず、歸花もあればと也

(二)「坊主小兵衛道心して人々小兵衛坊主と申しければ」と詞書あり

(三)「板倉殿の冷火燵」といふ詞をさせり

くろのもの代々の玄猪にかへり花
歸花それにも敷かむむしろぎれ

生島新五郎上京

鉢の木の扇(一)わらふなかへり花

坊主小兵衛小兵衛道心に

坊主小兵衛小兵衛坊主と歸花
口切(二)やはかまのひだに線蘿蔔
爐開や汝をよぶは金の事

朝叟老父七十の賀に

白川の浪をかゝばや桐火桶
埋火の南をきけばきりぐ〳〵す
うづみ火に芋やく人は薫(タキモノ)す
埋火や土器かけていじり燒

閑居安慰

へら鷺の爐を殘さぬや灰ぜせり
寢ごころや巨燵ぶとんのさめぬうち
火燵のうたゝ寢夢に眞桑を枕とす

周防殿は才ある人にて政事

行はるゝに一生非なしひな
きをめでて板倉殿と申すと
かや此中より錢を拾ひて(三)
こたつから青砥が錢をひろひけり
松風や爐に富士を燒く西屋形
侘にたへて一爐の散茶氣味ふかし
さびしさはひとり我住むほいろかな

片手打落したる火鉢を幸の

物哉とて

忠度と灰にかゝれし火鉢かな(一)

名も忠度といふべしこれに

對して

炭とりに鏡のぬけし手樽哉

炭焼のひとりぞあらむ釜のきは

炭竈や鈴木龜井が軒のまつ

炭賣やおぼろの清水鼻を見る(二)

すみがまや煙をぬけば猿の聲

かた炭もその木の葉より發りけり

炭屑にいやしからざる木の葉哉

新宅

竹の場の小庭なるべし炭俵

(一)忠度は一の谷にて岡部六彌太の童のため右の肘を切落されたり

(二)おぼろの清水は大原にあり

(三)此文は「栗飯のこげて匂ふや霜の聲」の句の註なり、此に出すは誤なり

とてもならかの一車とのゐずみ

茶の幽居炭の黒人を佗名なり

蚫のうつせ貝を盃にして都

鳥と名づけたるによせて

炭うりは炭こそはかれ都鳥

眞炭割る火箸を斧の幽なり

表えびす十九日から見えぬなり

大黒のうせたる家にて

醉さめて大黒出でむ夕えびす

まな板に小判なけけり夷講

嵯峨山や都は酒のえびす講

打鎰に鰒も惠比壽の笑かな

法雲寺老僧春色と聞えたり(三)

源氏もや季吟の家の蛭子講

福天の床机(シャウギ)にするや仕切帳

子は衣裝親はつねなり夷講

幻住菴にて

雜水(ゾウスイ)の名どころならば冬ごもり

新宅

鼠にもやがてなじまむ冬籠

蕗のたう其根うゑおけ冬がまへ

つくづくと壁の兎や冬ごもり

霜月朔日の例を

諸人や嵐芝居を冬ごもり

顔見せや曉いさむ下邸の橋(一)

何よけむ藻魚はた白冬ざかな(二)

閑(シヅカ)さや二冬なれて京の夜

帆かけ船あれや堅田の冬げしき

此木戸や鎖(ヂャウ)のさゝれて冬の月(三)

山鳥の寢かぬる聲に月寒し

人を見む冬のはしるも夕納涼

冬川や筏のすわる草の原

住吉にて

蘆の葉を手より流すや冬の海

憎まれてながらふる人冬の蠅

立願

冬持の足下をかけむなるとぜめ

冬來ては案山子にとまる烏かな

關守の紙子もむ矢か手束弓

(一)下邸橋は張良が黄石公と出會せし所

(二)備馬樂「我家は戸張帳をも垂れたるを大君來ませ寢にせん御看に何よけん、顔さだをかかせよけん、〳〵」

(三)平家物語五、月見「惣門は鎖のさゝれて候ぞ東の小門より入ちせ給へと申しければ」

縫ひかゝる紙子にいはむ嵯峨の冬

むかしせし戀の重荷や紙子夜着

紙子着てわたる瀬もあり大井川

紙子きてくゝり頭巾もみそぢ哉

目ばかりを氣儘頭巾の浮世かな(一)

朝あらし馬の目で行く頭巾哉(二)

おき出でて事しげき身や足袋頭巾

捨人のための切とて火打かな

大町新宅

水仙や鉋(カンナ)ついでの小島臺

水仙になほ分けゆくや星月夜

柯求老人の手向

山茶花や獨もれたるお盛もの

對友

内藏の古酒をねだるや室の梅

園より大工めしけり室のうめ

朝鮮の妻やひくらむ葉人參

玄賓を世に見るさまか干菜賣(三)

御殿場に馬休めけり大根ひき

お師どのは先づこなたへと大根引

日本の風呂ふきといへ比叡山(四)

蟹の刈る蕪をかしやみるめなき

かぶ汁や霜のふりはも今朝はまた

祕藏がる鍋のかるさや筑摩汁

文略

茶の湯にはまだ取らぬなりひさご汁

(一)氣儘頭巾は奇特頭巾、又ともこも頭巾ともいふ、目ばかり出るやうに頭を包むなり

(二)三谷通ひの土手馬のさま

(三)玄賓は道鏡の族人にして野に隱れし高僧、山田守るそほづの身こそ哀なれ秋はてぬれば問ふ人もなしの吟あり

(四)叡山の三千坊より思ひつきて天台根本の台根を大根と見立て三千坊を三千本ともぢりたる作意也

閑居の糠味噌うき世に配る納豆哉

砧つきて又の寢覺や納豆汁

遠水三十五日

おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁(一)

つみ綿に兎の耳を引たてよ

金藏のおのれとうなる霜の聲

鬢の霜木賊の一夜枯れにけり

滋樂(シガラキ)城の火洞にあらば霜の聲

貞佐新宅

此宿を御師もたづねて杉の霜

酒くさき蒲團剝ぎけり霜のころ

妙身童女を葬りて(二)

霜の鶴土にふとんも被されず

宗隆尼みまかり給ふ年(三)

婆に逢ひにかゝる命や瀨多の霜

野の宮の藪蔭に槌の音しけるに

鍬鍛冶に隱者たづねむ畑の霜

はつ霜に何とおよるぞ舟の中(四)

石菖の露もかれ葉や水の霜

播州の僧をいたむ

粟めしの焦けて匂ふや霜の聲

あな寒しかくれ家いそげ霜の蟹

山犬を馬が嗅ぎ出す霜夜かな

蝶の手に匂ひのこるや霜の菊

ふれみぞれ柊の花の七日市

(一)千載、慈圓「おほけなく憂世の民におほふかな我立つ杣に墨染の袖」

(二)其角の女、寶永三年十歳にて死す

(三)宗隆尼は其角の父の姉、元祿元年八十四歳にて死し堅田に葬る

(四)狂言鶏猿「舟の中には何ともよるぞ苦を敷寢に榻を枕に一淀にての吟なり

みぞれにも身はかまへたり池の鷺

宿僧房

あられなし閼伽の折敷に冬榮哉

取次へあられをはじく長柄かな

武藏野や富士の霰のこけどころ

海へ降るあられや雲に波の音

みがかれて木賊に消ゆる霰哉

市川三升を祝す

みつますやおよそ氷らぬ水の筋

瀧幅や氷の中にゐざり松

閑倚橋

うすらひや鐙長なる橋ばしら

煮凍(ニゴリ)や簀子の竹のうすみどり

長屋割付られし人の有明の月に酒賣不許入内とてなき

あかしたり

水窓の網手もきるゝ氷柱かな

柳寒く弓はむかしの憲淸なる(一)

夢なほ寒し隣家に蛤をかしぐ音

たかとりの城のさぶさや吉野山(二)

使者ひとり書院へ通るさぶさ哉

父が醫師なれば戯に

鮒汁にまた本草のはなしかな

河豚あらふ水のにごりや下河原

人妻は大根ばかりをふくと汁

生煮をふぐといふなりふくと汁

(一)蕉淸は西行の俗名

(二)「白雪峯に重り烟雨谷をうづんで山賤の家所々に小く西に木を伐る音東にひゞき院々の鐘心の底にこたふ寒雲纏磐石といふ句に思ひよせて」と詞書あり

世の中に舅をよぶや河豚じる

ふけゐの浦打めぐりて

鮒ひとつ捕へかねたる網引かな

ふぐ汁や祝言のこす能もどり

妻ならぬ鰒なうらみそ小夜衣(一)

鐵砲のそれと響くやふくと汁

手を切ていよ〳〵にくし鮒の面

詩人ゆるせ松江の鰒といはむに

鯖にこりず松魚にこりず雪の鰒

鮟鱇をふりさけ見れば厨かな

足袋うりやたびかさなれば學鰹(マナガツヲ)

蠣むきや我には見えぬ水かゞみ

鯉ひとつあじろの夜のきほひ哉

梅津某秋田へ發駕を送り侍て

こゝに呑む座敷しつらへ網代守

網代もり大根ぬすみを咎めけり

あじろやに心太屋の古簾

夜興曳(ヨウヒキ)ぬすびと犬や龍田山

犬引て豆腐狩り得たり里夜興

衿卷の松にかゝるや三穂の海

市隅の侘人に

宮藁屋はてしなければ矢倉賣(二)

貞德翁五十年忌

帶ときも花たちばなの昔かな

霜月廿七烏候于黃門光圀卿

(一)新古今「さなきだに重きが上の小夜衣わが妻なちぬ妻なかさねそ」

(二)新古今「世の中はとてもかくても同じこと宮も藁屋もはてしなければ」

之御茶亭ニ題ス周山之佳景ニ

硝子の御茶屋
水の工み醉顔清し氷茶屋

清水寺音羽

櫻精舍梢や千々の雪ざかり

耕作の御茶屋

根深ひく麥の早苗やあやめ草

黑木の御茶屋

我や賤牛に雪咲く黑木茶屋

藤棚

藤葺やあられにやどる不破庇

西行堂

炭や岩間こかしの清水とく〳〵と

唐橋

長橋やせたにあひ見むふゞき松

八はしの花のかほよきを恥て

坊主かげ月にも冴えよ御川水

河原書院

八千代とぞ河原御館の御千鳥

西湖

詩をあさるなるらむ雪の樽小舟

右十章

越後屋の算盤過ぎて小夜ちどり
啼く千鳥いく夜明石の夢おどろく
むら千鳥その夜は寒し虎が許
心をや筌にゆらるゝ浦ちどり

浦千鳥さこそ明石も大神鳴
しほ擔や投げてたゆたふ磯ちどり
よき日和に月のけしきやむら衝
妹が手は鼠の足か小夜ちどり

人丸講月次

沖の帆も十はたみそや濱千鳥
氷にも蓋とぢよ鴛の中
十石は鴛につくなり龍安寺
瀧口(一)やおもひすてゝも池の鴛

夜學感

鴛氷る夜や蜉蝣燈蓋に羽を閉ぢ
て揚屋の外邊に鴨の毛を引く

を見て

鴨の毛や鴛の衾の道ふさけ
しほくみの猪首も波のかもめ哉
菰一重わぶや乞食のぬくめ鳥
めづらしき鷹わたらぬか對馬船

京なる人に案内して

ゐほし着た船頭はなし都どり
町神樂店前の日蔭をかつらとし

ひたち帶のならはしなど思

ひよせ侍りて

たれとたが緣組すんで里神樂
夜神樂や鼻息しろき面のうち
はつ雪や犬のつら出す杉の垣
初雪に此小便は何やつぞ

(一)平家物語の瀧口入道が横笛に死別れし事をいふ

(二)常陸鹿島神社にて正月十四日男女の名を布帶に記し巫覡之を結び合せその結ばれたる男女を夫婦の緣ありとする神事ありたりき

智恩院町にやどりて

はつゆきに眞葛が原の妾かな

初雪に人ものぼるか伏見ぶね

はつ雪や赤子に見する朝朗

初雪や雀の扶持の小土器

はつゆきは盆にもるべきながめ哉

初雪やうちにゐさうな人は誰

めづらしい物が降ります垣根かな

人も來ぬ夜の獨酌

はつゆきや十になる子の酒のかん

或御方より雪見に迎へさせ

給ふ馬上にて

初雪に牧やえられて無事なやつ

楠の銅壺四間に一間とかや

萬客の唇をうるほせば

はつ雪や湯のみ所の大銅壺

市中閑

はつ雪や門に橋ある夕まぐれ

雪買に雪を沽らばや鶴の雪

清水修行にとまりて

(一)

むかしたれ雪の舞臺の日の氣色

雪の日や船頭どのの顔の色

馬士(ウマカタ)に貧しきはなし雪の宿

寒山の讃

寢る恩に門の雪はく乞食かな

我雪とおもへば輕し笠のうへ

(一)修行は執行と書くを正しとす

(二)「笠重吳天雪」の句に據る

門といふ字を得て

馬に炭さこそはたゝけ雪の門

窓錢のうき世をはなす雪見哉

(一)

芭蕉庵をとひて

衰老は簾もあげず菴の雪

官城御普請成就して諸家御

褒美給はりける頃

陪臣は朱買臣なりゆきの袖

山居の僧に

雪を汲て猿が茶を煮けり太山寺

かも川にひとむれとよみた

るを

釋迦とよぶ頭も雪の黑木かな

醉吟

雪うちややり手をかへす小忌衣

戸障子の音は雪なり松のこゑ

望叡山

薄ゆきや大の字枯るゝ山の草

かはかうや竹田へかへる雪のくれ

(二)

遊女土佐をむかへたる人に

うとく成て

黑塚の客あしらひや閨の雪

もとすみだ川といふわたり

にて

半衿の洲崎もありや雪の松

鴨川の鴨を鐵輪に雪見哉

(一)柳亭筆記二「窓一つにつき何程といふ運上錢を出すを窓錢といふ也、此事江戸にはなし、さればかく雖有き所に住む故に思ふさまの所へ窓をあけ雪を快く見る事かなと浮世語りをせしといふ句意也」

(二)「かはかう」は「厠買はう」の意にて、肥料取

軍兵を炭團でまつや雪つぶて
まつの雪蔦につらゝの下りけり
　前といふ字にて雪の句
叡覽の人になりつゝ今日の雪
　出口にて
きぬぐに犬をはらふや袖の雪
すてゝあるといふ小歌を句の題にして(一)
おもはめや捨ててあるかは雪の宿
腸を鹽にさけぶや雪の猿
溫飩屋へゆく念佛なり夜の雪
　文略
黑塚のまことこもれり雪をんな
埋木のふしみ勝手や雪の友
雪の日は聲ばかり賣る黑木かな
　不二の烟のかひやなからむ
　との御製をよく〳〵了簡せ
　ばふし無念に思ひ淺間を討
　ちぬべきものとかく作を龕
　相に極めおいて淺間がうら
　み成べしといひて
諷(ウタヒ)にてあさまになりぬ富士の雪
青漆を雪の裾野や丸合羽
富士うつす麥田は雪の早苗かな
奈良茶の詩さこそ盧仝も雪の日は(二)
拔出してゆき打拂ふ柄ぶくろ

(一)寶永の頃吉原にて、すてゝくん節といふ小唄流行せり、福德男五の卷に「聞けば聞く程聲やさしく、三谷土手下に主のない子がすてゝくんあると歌ふ聲色云々」

(二)盧仝は唐の詩人、茶を愛して七碗歌を作る

雪おもしろ軒の掛菜にみそさゝい
　祕藏の鶉の落ちたるををし
　める人に
黑染に御弔や雪うづら
朝ごみや月雪うすき酒の味
雪にとへばかれも蘇鐵の女なり
　雪窓
損料の史記も師走の螢かな
書出しを何と師走の卷柱
秋にあへ師走の菊も麥ばたけ
　大小の唸　元祿十年
大庭(二)をしろく(四六)はく(八九)霜師走哉
荷よばりの小坊主にこそ師走ごゑ
妖(バケ)ながら狐まづしき師走かな
　不分當春作病夫
酒ゆゑと病をさとる師走哉
新堰にて食くふやうに師走かな
ありがたき親の慳氣もしはす哉
山陵の壹分をまはす師走かな
千鳥たつ加茂川こえて鉢たゝき
ことぐく寢覺はやらじ鉢たゝき
伊勢島をにせぬぞまこと鉢敲(一)
あかつきの筑波にたつや寒念佛
寒念佛橋をこゆれば跡からも
酒飯の飲酒はいかにかんねぶつ
　南都にあそべる時

(一)伊勢島宮内の始めたる淨瑠璃節をまねぬが鉢叩の殊勝なりとの意

寒聲や南大門の水の月
並藏はひゞきの灘や寒造り

極寒

さだめよの遺精もつらし寒の水

漫成五倫

君臣有義　家の子等けふを忘るな年忘
父子有親　鮪計や憎き嫁にはなほくれじ
夫婦有別　鉢敲めをと出ぬもあはれなり
長幼有序　はかま着は娘の子にも袴かな
朋友有信　君と我爐に手を反すしがなかれ

極月十四日西吟大坂へのぼるに

いそがしや足袋賣にあふ宇津の山

節季いやや口を閉ぢたるわたし舟
元日を起すやうなり節季いや
節季いは左の耳になるとぞ
煤はいて寢た夜は女房めづらしや
すゝはらひ暫しと侘て世捨藏
童にはしころ頭巾やすゝはらひ
忠信が芳野じまひや煤拂

閑窓に羽箒をめでて

煤ごもりつもれば人の陳皮かな(一)
鼻を掃く孔雀の玉や煤ごもり

辰之助に申す

すゝはきや諸人がまねる鎗踊(二)
寒苦鳥明日餅つかうとぞ鳴けり(三)

(一)煤拂の時老人病者などの別室に移り籠るを煤ごもりといふ、此句は業平の「大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの」の歌を下に含ませたり
(二)水木辰之助の槍踊の所作事當時評判高かりき
(三)寒苦鳥は寒氣に堪へずして夜明りなば巣作らんと言ひて鳴きながら明くれば亦遊びくちして巣を作るを忘るといふ

餅花や灯たてゝ壁のかげ
もち花や鼠が目にはよしの山
餅と屁と宿はきゝわく事ぞなき(一)

震威流火しづまりて

妹が子や薑(ハジカミ)とけてもちの番

女子疱瘡しける家にきげん

とりて

餅の粉や花雪うつる神の唉(エミ)
弱法師(ヨロバシ)(二)わが門ゆるせ餅の札
としの市誰をよぶらむ羽折どの
梟よ松なき市の夕あらし
鰤荷ふ中間どのにかくれけり

行露公萬句御興行卷軸

萬代の〆をあげけり神樂帳

揚屋に醉房して

戀の年差紙籠をさらへけり(三)
詩商人年を貪る酒債かな
いざくまむ年の酒屋の上(ウハ)だまり
行く年も板戸めでたし餅の跡
ゆくとしに唾はくらむ鏡とぎ

座右銘

行く年や壁に恥ぢたる覺えがき
ゆくとしや貉評定夜明まで
やりくれて又や狹莚としのくれ
行幸の牛あらひけり年のくれ
小傾城行てなぶらむ年の暮

(一)素堂「茶の花や利休が目には吉野山」
(二)撮解「弱法師は物もちひ也、師走門々に貰ふの札をはる也」
(三)揚屋に客ある時遊女を借りにやる手形を差紙といふ

鳩部屋の夕日しづけし年のくれ
子をもたばいくつなるべき年の暮
千觀の馬もせはしや年のくれ(一)
年中の放下みえけり年の暮
ばせを翁はてのとしは堅田
のゆかり伊賀のしるべおも
ひの外になりぬるをわびて
うつの山より人々に申遣は
す
おきずてに笈の小文や年のくれ
流るゝや千手陀羅尼の年の垢
流るゝ年の哀世に白髪(フクモガミ)さへ物うき
年の瀬やひらめのむ鵜の物おもひ(二)

(一)千觀は橘敏貞の子、三井寺に上りて學び後攝津の田中金龍寺に住す、時々淀口にいでて自ら馬夫となりて行人を惠む、永觀元年寂、年六十六

(二)年末の苦しさは鵜が比目魚を呑む如しとの比喩

臘兎五つの子を産めり樊中
にやしなはれて若草にかけ
らむ事をいはひて
年をとる兎に祝へ熬らぬまめ
駿洲久能の別當さんざめか
して御通あるを
ゆゝしさや御年男の旅すがた
豆をうつ聲のうちなる笑かな
三升所持鍾馗の自畫讃
今こゝに團十郎や鬼は外
乾元の節分
長き夜の遠くてちかし得方丸
とし越やたゞ業平の御袖ひき

のり物の中に眠沉て
年わすれ劉伯倫はおぶはれて(一)
乳母ふえてしかも美女なし年忘
千山宅とし忘に
割すそや八乙女神樂男より
御玄關より破魔弓をかぞへ
奉りて
誰いふとなしに大殿としわすれ
大晦日ねいつたうちが年わすれ
聖代
鶴おりて日こそおほきに大晦日

(一)劉伯倫は晉の詩人にて酒德頌を作れり

雜之部

十及の圖に　文略

尋牛　闇の夜は吉原ばかり月夜かな
呼牛　呼子鳥あはれ聞てもきかぬ哉
隱牛　夏の夜は寢ぬに疝氣の起り鳧
貧牛　二朱判や取るがうへにも年男
廻牛　小便も筧にあまる五月かな
番牛　ほとゝぎす曉傘を買はせけり
無牛　きりぐす枕も床も草履哉
半牛　何となく冬夜隣を聞れけり
送牛　さめよとの千手陀羅尼や霜の聲
老牛　けふも又溫飩のはひる時雨哉

於冠里公各題五色梅　黑

黑梅や花のしらべのかけちがへ

村雨のとぎれ〳〵や曾根の松

天智天皇

うちをさむ入鹿が首に四海波

文化十一年甲戌

本石町十軒店
英　平　吉
本石町四町目
西村源六

玄峰集

かくともなく集むるともなく、机上に一書あり、みな雪中庵嵐雪のほくなり。ひとりこれを紐といてまもりをるひるつかた、例の竹川訪ひ來りて、たまへ梓にきざまむといふ。さはまて、かうぶりして得させむとて、玄峰集とものしうちくれぬ。

百萬坊旨原

玄峰集

春之部

改正

四海波魚のきゝ耳あけの春

(一)元日やや〻動くいかのぼり

元日やはれて雀のものがたり

年すでに明けて達磨の尻目哉

面々の蜂をはらふや花の春

(二)三つの朝三夕暮を見はやさむ

今朝春の奥孫もあり彦もあり

(三)若水に智慧の鏡を磨うよや

五十にて四谷を見たり花の春

(四)あら玉の馬も泥障(アブリ)をしむには

初空や烏をのする牛の鞍

(五)楪(ユズリハ)の世阿彌祭りや青かづら

(六)惟茂(コレモチ)と起しに來たる二日かな

此句は睦月二日にあさいせしを人の來て起せしにかく申されしとかや

寶ぶね詞書有 委に略

須磨明石見ぬ寢ごころや寶舟

夢明けて浪のりふねや泊瀬寺

む月はじめのめをといさかひを人々に笑はれ侍りて

(一)元旦の物靜にして魚もきゝ耳たつべしと也

(二)三夕暮は定家西行寂蓮の三夕の歌をいふ

(三)北條盛衰記といふ書に、「親の子の子の子まで山賤の榾の火けたで形見とぞする」といふ古歌ありとぞ

(四)泥障は馬の兩脇を覆ふ泥よけの革、李白紫騮馬詩、「紫騮行且嘶、雙翻碧玉蹄、臨流不肯渡、似惜金泥障云云」

(五)世阿彌は觀世太夫の二代目

(六)紅葉狩の惟茂をこれ併と戲れたる也

(一)萬葉に「初春のはつねのけふの玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒」
(二)七草粥
(三)喰摘は米麩炮昆布搗栗などを三方に盛りたるをいふ

よろこぶを見よやはつねの玉はゝき(一)

若菜七つがいを判する詞 略(二)

七草を三べんうつた手首かな

ぬれ椽や薺こぼるゝ土ながら

霜は苦に雪に樂する若菜かな

憶翁之容中

裾折て菜をつみしらむ草枕

夫婦とゝはやすめは聲若しなつみ歌

春朝

蔀(シトミ)あげてくゝだち買はむ朝まだき

風渡つて石にすがれる薺かな

題しらず

ほつ〳〵と喰摘(クヒツミ)あらす夫婦かな(三)

鶯

鶯にほうと息する山路かな

うぐひすや書院の雨戸はしる音

鶯をなぶらせはせじ村すゞめ

鶯の宿とこそ見れ小摺鉢

梅

梅一輪一りん程のあたゝかさ

此句ある集に冬の部に入たり又おもしろきか

輪に結ぶ梅をぬけたる月夜かな

臥龍梅

白雲の龍をつゝむや梅の花

荏柄天神奉納

(一)「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」の古歌に依る
(二)毎朝養生のため蕃椒の如き辛味を服せよとなり
(三)さすの神子は晴明五世の孫桑親の占卜掌を指すが如くなりしよりいふ

こぼれ梅かたじけなさの涙哉(一)

北といふ一字題

手のゆかぬ背中を梅の木ぶり哉

梅ちるや齒のない馬に恥しき

桐雨のぬし京うち參りとて

出ぬ行くかたの覺束なく知

る人はそこ〳〵に道のほど

はかう〳〵と言ひふくめて

出したてつ卯の花の雪消え

五月雨のくもらぬほどに歸

り來べきなれどいと名殘を

しくて

梅にさむる朝け忘るな辛きもの(二)

翁の春もやゝけしきとゝのふと申殘されし句意を味へ

侍りて

この梅を遙に月のにほひかな

梅干ぢや見知つて居るか梅の花

椿

鋸のからき目見しを花つばき

柳

目前に杖つく鷺や柳かけ

中納言藤房

於馬場殿龍馬に付て直諫を奉られしが其言行未如鏡(シノ)

亂るべき風の柳をさすの神子(ミコ)(三)

(一)嵐雪の上京を門人百里氷花二人餞別せるに對する挨拶の句なり裝遊稿にいづ

春の水に秋の木の葉を柳鮠(ヤナギバエ)

題しらず

正月も廿日に成て雜煮かな

一鹽(ヒトシホ)の聲さぞあらむ南部雉

せはしなき身は痩せにけり作り獨活

蕗のとうほうけて人の詠かな

狗背(ゼンマイ)の塵にえらるゝわらび哉

きさらぎや火燵のふちを枕もと

春風の石を引切るわかれかな

此句は門人なにがしが旅立けるに蠟石をおくるとてかく申されしとなりをんなにかはりて

なれも戀猫に伽羅燒てうかれけり

燕

簾に入て美人に馴るゝ燕かな

柳には吹かでおのれ嵐の夕燕

歸雁

順禮に打ちまじり行く歸鴈哉

箱根にて

かへる雁關とび越ゆる勢なり

(一)紙鳶

糸つくる人と遊ぶや風巾(イカノボリ)

惜暫別

虛空(オホゾラ)を引きとどめばやいかのぼり

蚊足が鄰かへたるに申しつ

(一)「さで」は魚を掬ふ手網

(二)辰の市は大和添上郡にあり、辰の日に市たちしより此名あり

(三)狂言「花子」に「花よりも紅葉よりも見たいものぢやえ」の句あり

(四)寒食の日桐柳等の若芽をつみとりて染めたる飯を青精飯といふ

かはしける

此夕べ軒端へだちぬいかのぼり

行脚惟然へ申しおくり侍る

木の枝にしばしかゝるや風巾

蛙合

よしなしやさでの芥とゆく蛙(一)

上野より歸り侍るとて

酒くさき人にからまる胡蝶かな

朧月

中川やほうり込んでも朧月

我等今日聞佛音敎

歡喜踊躍と讀誦し奉りて

嬉しいか念佛をどりの柄杓ふり

出かはり

出かはりや幼心にものあはれ

出かはりや其門(カド)に誰辰の市(二)

接

見たい物花もみぢより接穗(ツギホ)かな(三)

苗代

なはしろに老の力や尻だすき

青精飯

桐柳民濃(コマヤカ)に菜飯(ナハン)かな(四)

上巳

隣々雛見廻るゝ小家かな

うまず女の雛かしづくぞ哀なる

鶯の來て染めつらむ草の餅

(一)馬刀貝の筆の鞘に似たるよりいふ
(二)「しほひくれて」原本「しほひくれ轉」とあり、虚栗集に據りて改む
(三)等持院は洛北衣笠山の麓にあり
(四)桃の日は三月三日
(五)膝木は絲をよる器具
(六)炭俵集には「兼好もとあり、兼好阿部野にありける頃筵を織りて衣食の資とせりといふ
(七)風もとすは風の吹き落す也
(八)此句嵐雪の作にあちずと雀志いへり

汐干に

(一)水莖の馬刀かき寄せむ筆の鞘
(二)しほひくれて蟹が裾引くなごり哉

桃

(三)おの〳〵の桃の席や等持院
(四)桃の日や蟹は美人に笑はるゝ

花

あらおそや爪あがりなる花の山
白鳥の酒を吐くらむ花のやま
花に風かろくきてふけ酒の泡
櫻川はほそくながれて青柳
の里一かまへうちかすめり
(五)膝木よる長女いやしや糸櫻
殿は狩りつ妾餅うるさくら茶屋
手習の師を車座や花の兒
(六)兼好の莚おりけり花ざかり

逍遙鵬鷃之間出入是非之境

花の夢此身をるすに置きけるか
花はよも毛虫にならじ家櫻
はなを出て松へしみ込む霞かな
新發意が花折るあとや山颪

賴光山入之讃

(七)なまくさき風おとすなり山櫻

小町讃

(八)我戀よ目も鼻もなき花の色

原の宿を通るに勅使の歸京

(一)裝遊稿中の句なり
(二)文集にいづ、詞書あり
(三)見筆序にいづ
(四)東湖は嵐雪の弟子和田堵中
(五)駿州島田の宿役人塚本如舟の好意にて大井川を渡りし時の挨拶なり
(六)白鷺蹋を角櫓の麓に見立てしなり

ましますとて海道も塵をは
らひ山も殊更に恥しげにけ
ふを晴とつくろひたてり砌
のすだれはね上げられたる
にゐぼうしの用意なんどき
ら〳〵と見ゆ恐らくはいま
だきかず富士に雲ゐの客人
を見る人は仕合なる旅に參
り合ひたり

富士を見ぬ歌人もあらむ花の山
(一)雲雪と仇名も言はじ花ざかり
(二)筆とるは硯やほしき兒ざくら
(三)花片々鼓にあたる舌の先
月花の其ひとふしや火吹竹
女中方尼前は花の先達か
(四)大和廻りの東潮めぐれ〳〵
風車東風ふかば西へ行き西
吹かば戻れ前後與す箱根は
手形あり大井は川越あり左
右廣し空吹く風の何が吹く
やら
逢坂は關の跡なりはなの雲
(五)大井川船有るごとし花の旅

鄰蹋

(六)白つゝじまねくやうなり角櫓

藤 詞書あり略す

ふぢ浪に鵜は得たりいらこ崎

小奴吉齋に花を見せて

小坊主よ足なげかけむ松に藤

立志追善 (一)

山吹のうつりて黄なる泉哉

ばせを翁は普化の師晉子は

臨濟の怨子三十年來は面に

から竿をならして他のつら

を出せるなし末期に及て半

句を吐かずさらに遺跡を止

めざるは若夫それもしらず

大悲院へ齋喰に行く歟

中陰廻向

(一)高井立志天和元年十月歿

(二)普化禪師は昇天せし人なり

普化去りぬ匂ひ残りて花の雲 (二)

亡跡

菜の花や坊が灰まく果はみな

三七日

鶯や弓にとまりて法の聲

墓参

山吹の實を穴掘の鍬ひとつ

追加

飯焚の輔は筆師よ釋奠

雷や油のまじる春の雨

雷の姑なれや花の父母

羽子板や只にめでたき裏表

名月を家隆にゆるす朧かな

草餅にあられを炒るやほろ〳〵と

男もすなる俳諧は女もすな

り童もすなり誰もすなり鋤

立もすなり我もすなりとて

それの日も硯とりけむ土佐の海

武藏野八百里といひし頃を

思ひ合せて

武藏野の幅にはせばき霞哉

名取川笠は持ちたりさくら魚

草庵と捨てしも秋や花の庵

玄峰集

夏之部

更衣

鹽魚の裏ほす日なり衣がへ
腸(ハラワタ)は野に捨てたれど袷かな
すどりする傍(ソバ)にうつくし白がさね

詞書あり略

老ひとつこれを荷にして夏衣

青簾

五位六位色こきまぜよ青すだれ(一)

時鳥

行燈を月の夜にせむほとゝぎす
ほとゝぎす恥かき道具かたづけむ(二)

伊勢法樂

こゝろには松杉ばかり郭公(三)
錦帳の鶉世を草の戸や蜀魂(ホトトギス)(四)
たちばなを喰ひもつみもし時鳥

待乳山の社頭に雨をしのぎて

空は墨に畫龍のぞきぬ郭公(五)
時鳥鳴くや利休の落し穴(六)

悼晉子が母

啼きいりて音もなしそれは時鳥
ほとゝぎす旦夕(タヅガレ)里さび燧(ヒウチ)うつ頃

(一)源氏行幸の卷に、「青色の衣えび染の下がさね殿上人五位六位こきまぜて云々」
(二)恥かき道具は見苦しき夜具食器などをいふ
(三)裝遊稿中の句
(四)錦帳の中に飼はる鶉草の戸に啼く時鳥いづれか幸なるべき
(五)社殿の天井に畫龍あればなり
(六)山科の ノ貫といふ隱者利休を招きて陷井に陷れて戲れし事あり

御成筋いかなる筋をほとゝぎす

冠里公にて

ありがたやたゞとり山の郭公(一)
時鳥聞けば座頭の根付(ネツケ)かな(二)
似た鳥を賣付けてゆけ時鳥(三)

卯花

聲もなく兎うごきぬ花卯木(ウツギ)

齋をまうく

樒賣あな卯の花の飯を見る

川骨(カワホネ)(四)や櫟に凋める夜半樂

經の偈は連歌ときゝぬ時鳥

此三句は晉子追善の吟なりとぞ

懷舊

からびたる秋なりけるを若楓

島田の宿に或僧をとふ

やすき瀨を人に教へよかきつばた(五)

牡丹

古庭にあり來りたるぼたん哉
土嘗(ナメ)てはにかむ顏が牡丹かな
はつ鰹盛りならべたる牡丹哉

青嵐

青あらし定まる時や苗の色

義仲寺師父之廟

色としもなかりける哉青あらし(六)

新樹

(一)奥州磐城平の城主安藤冠里候の邸にて羽織を拜領せし時の即興
(二)根付の笛を按摩の吹き鳴らしゝよりいふ
(三)似せものにても早く聞きたし
(四)川骨の花櫟に似たり、夜半樂は樂の名
(五)裝遊稿中の句
(六)裝遊稿中の句、寂蓮、「さびしさは其色としもなかりけり槇たつ山の秋の夕暮」

若葉ふく風やたばこの刻(キザミ)よし
煮鰹をほして新樹の烟かな
鎌倉鶴が岡
並松の行列ありし夏木立
こかね海道にて
霧雨に木下闇(コノシタヤミ)の紙帳かな
ばせを菴(アン)にて
菴の夜もみじかく成りぬ少しづつ
うたゝ寝の夢に見えたる鰹
哉　晉子　其夢に戯る
下部等に鰹くはする日や佛
内外の神拜終りて猶磯の宮
の奥深く八十瀬をわたりぬ

(一)神社の屋根の棟に横へたる木をかつを木といふ
(二)鰹節を蒸して製する時いづる液を煮取といふ
(三)「桑笑む」は「靖笑む」の誤なるべし

塵外五里の山陰にして森の
雫に舍殿(ミアラカ)破れ寄生(ヤドリキ)としを重
ねて夜の嵐いぶせげなるに
いとどかみさび渡らせ給ふ
神ませばかつをもすめり山の奥
(一)大勢の中へ一本かつをかな
熊野
煮取(二)たく爰でもお僧愚なり
南無大悲觀世音ほさつと聲
よくうたひ連れたり
桑笑(三)むや名とりの老女娵(ヨメ)達者
燕居もやう〳〵見出されて
このごろは新麥くるゝ友もあり

(一)「くはへ」はくわゑ(慈姑)に加へを掛けしなるべし
(二)源氏横笛の卷に、「御齒のおひいづるにくひあてんとて筍をつと握りもちて雫もよゝとくひぬらし給へば云云」
(三)遍昭、「たちちねはかゝれとてしもぬば玉の我黒髪はなでずやありけん」
(四)青流は稲津祇空の初名、享保十八年四月歿
(五)裝遊稿中の句

氷花へ祝義つかはすとて
澤潟(一)(オモダカ)の花にくはへの銚子かな
筍
竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき
たけの子やかり寢の床の隅よりも
善光寺にてみる喰ひける尼
に
海松(三)(ミル)ふさやかゝれとてしも寺の尼
悼青流亡妻(四)
物ごとに妻なき家の茄子づけ
蝸牛
白露や角(ツノ)に目をもつ蝸牛
坂本の宿にとまりたるに樵(キコリ)
木つみたる火たき屋の隅に
具足と太刀の埃にまじりて
侍りけるを持ちつたへたる
故やあるとたづねければ爰
のならはしにてかばかりの
器具もたぬ家は侍らずと申
しける心にくかりける
なめくじり這て光るや古具足(五)
大津の驛に出て
あぢさゐを五器に盛らばや草枕
大津の梅主入集の句あまた
こされけるを草案みだりが
はしく失ひければ

(一)菖蒲は其根一寸九節なるを良しとす
(二)裝遊稿中の句
(三)曾根太郎曾根次郎は紀州熊野路の難所、句意は五月人形の見立なり
(四)亡魂が舊恩に報いんために草を結びて魏武子の軍を助けしこと左傳宣公十五年に見ゆ
(五)五月五日樗を帶ぶれば邪氣を避くといふ、芝肴は武州芝浦の魚
(六)印地打とて石を投合ふ遊戯、端午の日に行はれたり
(七)五月五日の競馬の準備として一日に足揃あり、裝遊稿中の句

あぢさゐやどこやら物のこと足らず

漁父

蓑ほして朝々ふるふ螢かな

照射

弓杖に歌よみ顔のともし哉

端午

しだり尾の長屋々々に菖蒲哉

一刀見せむあやめの九節(コノフシ)(一)

あやめ草賀茂の假橋いま幾日(二)

世のあやめ見ずや菰(マコモ)の髑髏(サレカウベ)

曾根太郎を登り曾根次郎を下る(三)

片足は岩に放つてかぶとかな

粽一ふさ全阿袖にし來りね

ぶりかたむきたるに

粽もつ扨はうつゝの草むすび(四)

文もなく口上もなし粽五把

樗佩(アフチオビ)てわざとめかしや芝肴(五)

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫(ツブテ)(六)

競馬　賀茂

落ちたるがことに目立つやあし揃(七)

拔劍逐蠅

蠅はじき怒る心よ手束弓

顔につく飯粒蠅にあたへけり

獨坐

(一)蚤は性金を好むといふ
(二)水驛は人馬の水を飲み飯粥を食ふために立寄る宿驛

來る蚤蚊裾から蠅の折ふしは

題しらず

それにさへ願ひ絶えめや金(キン)の蚤(一)

めづらしや唐の蚊詩人を喰

つて桃のごとし珍らしやか

らの蚊美人の帳にこがれて

痩せて柳に似たりからの蚊

からの蚊

唐(カラ)の蚊や終に枯れたる藻鹽草

此句は唐紙に蚊を漉きい

れたるに書かれたる由

うち歎く事侍りて

哀れとより外には見えぬ蚊遣哉

蚊遣木や斧に女の石をうつ

旅意

萍(ウキクサ)の實もいさぎよし水驛(ミヅウマヤ)(二)

紀の山紀の浦海にいり江に

入る禹益の水を治めて異物

をしるせる海外山表のあり

さまルスンカボチャなどい

ふ遠津島根の人がらは畫に

のみ見たり目前に南のえび

すの洞にかくれいはほに走

るを鬼にもせよ人にもせよ

こゝろおかるゝ旅寢なり

蛇いちご半弓提げて夫婦づれ

(一)風雅集に「和泉式部熊野へまうでたりけるにさはりにて奉幣かなはざりけるに、晴れやらぬ身のうき雲のたなびきて月のさはりとなるぞ悲しき」

(二)謡曲「賴政」に「さるほどに平家は時をめぐらさず云々」

(三)同行の妻に問ひかけたるなり

(四)掌中の珠とするには大に過ぐ

和泉式部之石塔

(一)本宮より一里彼式部の月の
さはりと詠みたる所といふ

蚋(アト)のさす其跡ながらなつかしき
維盛彌助

十津川近き湯の川のほとり
なり除田百五十石代かはり
家くだりたれどさすがに今
も平家なり

(二)川骨の花一時もさるほどに
妻驪(メグロ)詣 文あり略

(三)茨の花裾(モスソ)きらじや旅ごろも
梶原屋敷を見る此人はさば
かり文筆には達せざれども
歌も詠み物の情もしれる人
にや折ふしの口ずさみもき
こえとどまりしをにくきも
のの一つには先づ此一族を
いひふらしぬるはいかなる
宿執のつきたるにか舊跡あ
はれに覺え侍りて

むつかしき中に香もありばらの花
茱萸(グミ)

山茱萸のかざしや重きふじ颪

瓜

(四)兒の手の玉にもあまる眞桑哉

(一)此事著聞集にあり

(二)妻のみならず子をも失ひたるなり

(三)瀉氣拂として唐がらしを用ふ

(四)五月音は五月雨の誤なるべし、蓑虫が父を戀ひて鳴くといふ話を母に轉じ用ひたり

(五)鞍遊稿中の句

(六)同前、夜明くれば直に立退く家なれどの意

八幡太郎讃

(一)御堂關白殿御物忌に義家朝
臣參籠の時南都より早瓜を
たてまつりしに博士毒氣あ
るよしを申義家に仰せて瓜
を割たるに毒氣則出 下略

瓜切てさびぬ劍の光かな

(二)氷花が妻うしなひたるにい
たみとて遣す 詞書有略

撫子よ紅粉おしろいも散らしすて
常盤木のちるや母さへ其子さへ
うち籠るほど訪ひ侍りて

山鳥のほろ〳〵なきや五月雨

夜雨吟

(三)五月雨や硯箱なる唐がらし

(四)さみだれや蚯蚓の徹(トホ)す鍋の底
時鳥の二聲三聲おとづれけ
れば

五月雨の端居古き平家をうなりけり
亡母を夢見る

(四)五月音に我蓑虫や母戀し
伏見橦木町

炬松(タイマツ)ふつて野邊を行くもげに爰
もとの古風なるべし

(五)行燈で來る夜送る夜五月雨(サツキアメ)

(六)明けてのく家に伏見や夏の月

草菴むすび侍るとて

蓼紫蘇にむすばぬ先の白露か

題しらず

鶯の音を入るあやし二つほし

早乙女にかへて取たる菜飯かな

三河鳳來寺

一もとのあふひを登る山路哉(一)

打麥歌

蟬鳴くや麥をうつ音三々三

六本木にて(二)

下闇や地虫ながらの蟬の聲(三)

あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲

那智山

暑雲の外瀑(タキ)に奪(トラ)るゝ人の色(四)

夏の日に懶(モノウ)き飴のもやし哉

おもだかのふとり過ぎたる暑さ哉

江の島

夏の日やさめて窟(イハヤ)のいなびかり

稻村が崎を過ぐるに木陰ともなき砂のうへに漁父のこぞりてわかなごといへるものをえりとり侍る

照付けてひかりも暑し海の上

貝うる家の男のわらは麥の粉を盒子にもりてかしら揃へてうちなめたるに水を乞

(一)葵は直立の嘘

(二)江戸麻布六本木

(三)木下闇の蟬聲は土中のものかと疑はる

(四)許渾、「一聲山鳥曙雲外、萬點水螢秋草中」

て

蜑(一)の子にたふとがらせむ道明寺

長谷寺の前にて

飴賣の箱にさいたや百合の花

能見堂(二)

ふるく侍るといふ人あり

汗ぬぐひ小松に干して沖つ風

雪の下に泊り侍りしに蚊やりたきたてけぶたかりけれ

ばみたらしのふちにむしろ敷て

川芎(三)のたまさか匂ふ茂り哉

藤澤を出行く民家の門に木立根は土を抜きあがりて五尺ばかり高く左右にひろごり元木たくましく肥えて末葉もつたて蟷螂の髭をもて鼻にかへたるさまして這出たり西行のもどり松とかや申侍る越路松島のかたにもかゝる名のきこえ侍る故はしらず

童(ワラハベ)(四)にあふぎとらせむ松の陰

納涼

犬に逃げ犬を追ふ夜のすゞみ哉

水車のしづくをうけて

(一)道明寺糒は夏季の旅行に携ふるが常なり

(二)武州金澤八景の一

(三)川芎は川骨の根

(四)銀猫を童子に與へし事によそへたり

すゞしさや心手へとる水の色
かはらの涼
來る水の行く水洗ふすゞみ哉
(一)埋火を涼しとあふぐ夜的かな
(二)一種賞翫にとて皆ゆく中に
まじはり侍りて
(三)味噌するにすゞしき鮴の游哉
祇園の會の七日の鉾十四日
の山綾より錦より見ものな
るは荻野いがらし松尾まつ
むら素袍に太刀はきて四條
高倉の辻に床几を据れば下
の雜式おなじさまにて紅の
總さげたる鐵棒かいこみか
ちんの上下着たる男等黑漆
の棒手に手に持て粧をつく
ろひ非常をいましむ兼て定
められたる一二の闘を改め
かへす威儀嚴重なる中には
しごと臼と車に積て町ごと
に引くは何の用にか侍りけ
む
(四)たて臼もともに踊るや祇園の會
移徙の祝義に
(五)とこなつの家にいれたる德利哉
逢恨戀

(一)裝遊稿中の句
(二)同前、的の下に穴をほりてその中に火を點じ矢を射るを夜的といふ
(三)初五一本に「摺鉢に」とありとぞ、裝遊稿中の句
(四)同前
(五)常夏の家は卽ち德利なり

我戀や口もすはれぬ青鬼灯(フヲホ、ツキ)
竹婦はなれて抱きよけれど
こと人やねたまむ涼しくて
一人ねむには
汗に朽ちば風すゞぐべし竹襦袢
(一)尋常(ジンジヤウ)の和巾(フキン)さばきや汗拭
清水 詞書あり略
拔けたりなあはれ清水の片草鞋
目黑の瀧も人のまうでぬ日
底しみづ心の塵ぞしづみつく
序令沾洲ちなみ侍りて京よ
(二)り大和路かけて和歌の道た
づねむと出立けるを跡をし
みして
(三)神奈川の岱の清水に先づ進め
紀伊野中の清水 播州に同名有
すみかねて道まで出るか山清水
柴の菴
夕だちや障子かけたる片びさし
題しらず
(四)すぐろたつ羽黑のきゞす夏尾花
夏畑に折々うごく岡穗哉
切味噌のひなた臭さや夏泊り
芭蕉の墓まゐりのついで義
仲菴へ尋ね侍りけるに庵主
出奔せられければ

(一)竹襦袢は細き竹又は葭の類を短く切りて中に糸を通して菱形などに編みしもの
(二)序令は本名石打四郎兵衛、沾洲は貴志氏、共に江戸の俳人
(三)「進め」は「涼め」の誤なるべし
(四)燒野の草木の末の黑くなりたるをすぐろといふ

住持まで拂ひ果てけり夏の空

御祓

今日の日は東北の隅より出
て西北の間にをさまる長日
短夜の頂上なりとて此國の
法しれる家々にはことさら
に日の神を祭り侍るとかや
青海のおもても限りなく覺
えて尤祓すべき砌なるべし

いくばくの溜息つきて夏はらひ(一)
なつはらひ目の行くかたや淡路島

(一)形代に息を吹きかけて川へ流すよりいふ

追加

淺草川にて

郭公なくは佛法長吉か
若竹は片肌ぬぎのきほひかな
轍士に尻するよとて
根のつくやさき〳〵へ飛ぶ石荷(ユキノシタ)

玄峰集

秋之部

初秋

秋風の心うごきぬ繩すだれ(一)
つくり木の糸をゆるすや秋の風
洛外の辻堂いくつあきの風(二)

閑居

痩る身をさするに似たり秋の風(三)

葛

齒のあとのあり葛の葉のうら表

宗祇之廟(四)

石塔をなでては休む一葉かな(五)

市中

盆までは秋なき門の灯籠かな

七夕

眞夜半(ヨナカ)やふりかはりたる天の川
ほし合に我妹かさむ待女郎
ほし合や瞽女(ゴゼ)も願ひの糸とらむ
大伽藍造營ましまして年
の今日遠くをがみ侍りける
に富士筑波根の間に更に山
ひとつ出來たるかと空のに
ほひもちかく成るべきほど
なりけり

(一)後嵯峨院、「あし簾夕暮かけて吹く風に秋の心ぞうごきそめぬる」
(二)裝遊稿にいづ
(三)裝遊稿には「歸庵」と前書あり
(四)箱根湯本にあり
(五)塔澤記中の句

上野より道や付くらむ銀河（アマノガハ）
瀧飛のけろりと浮くや星使
名月の夜はいかならむはか
りがたし
七夕は降（フ）ると思ふがうき世かな
(一)七夕や賀茂川わたる牛車
防鴨河使
妻越や人目づつみの河づかひ
梶の葉に小うたかくとて
我や來ぬひと夜よし原天の川
年渡りえや隅田川原の橋柱
さもあらばあれ句を洗ふ天の川
(二)飛鳥井なんばどのの蹴鞠池
の坊の立花みやこの田夫る
なかの風流立て見るあり居
て見るあり
(四)秋風のうしろを覗く立花哉
薄
野の宮にまゐりて
(五)嵯峨中の淋しさくゝる薄かな
花すゝき階子つれなくこけかゝり
品川へ二里の休（ヤスミ）や花すゝき
野の花
おもしろく富士にすぢかふ花野哉
花の秋草に喰ひあく野馬かな
盃のことばを切題にして一

(一)裝遊稿中の句
(二)硯筆は洗はずとも句を洗ひ清めんとなり
(三)七月七日六角宣池の坊にて立花の式ありき
(四)裝遊稿中の句
(五)裝遊稿にいゞ、一本「淋しさくるゝ」とあり

字を探りうる
洗
潛（クヾ）らせて色々にこそ萩の露
蟲
寺にて
常燈や壁あたゝかにきりぐゝす
(一)蓑虫の音をきゝに來よ草の菴 芭蕉翁
聞きにゆきて
何も音もなし稲うちくうて蠶哉
茶碗銘
黑茶碗あり花の朝はますま
すくろく雪の夕はいよ〳〵
黑し月待つ宵のやみをさぐ
り闇夜に鼻をとられしはお
のおのつちめくらのまじは
りなるべし
檢挍　貧僧　大黑　小ぐろ
はちの子　早ふね　小雲雀
三代目をのんこといふのむ
ここそ猶ふかき意味あれ祕
してしばらく殘す
松むしのりんともいはず黑茶碗
底倉木香あしの湯を經て地
獄めぐりといふことあり惣
じて此邊の濕化蝶蜻の類墨
をぬりたるがごとし

(一)文集の「蓑虫を聞に行辭」參照

(一)塔澤記中の句

(二)駒取りは童の連りて帶と帶とをとり首尾をなす遊戯、遍昭「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらん」

(三)神子の目の物すごく神のつきたるが如きをいふ

(四)白鶏頭を味噌にて煮て食すれば腹藥なりといふ

(五)胡塞記にいづ

(六)蜉蝣稿に出づ

おのれさへ餓鬼に似たるよ蟋蟀(一)

露

草の葉を遊びありけよ露の玉

十歳に成りける童の身まか

りけるに

駒取りのもとの雫や末の露(二)

うすひ權現にて

稲妻にけしからぬ神子(ミコ)が目ざしやな(三)

鶏頭

まだ夏の心ならひや葉鶏頭

味噌で煮て喰ふとは知らじ鶏頭花(四)

鶏頭は蜑のたきさす煙かな

西瓜

身ひとつをもてあつかへる西瓜哉

妻悼

尸かな桔梗かるかやをみなへし

蓮の骨あはれは美女の尸哉(五)

朝叟をとぶらふ

蓮の實の飛びはとびしがそもされば

同一周忌

青ふくべひとり廻つて一周忌

里右が娘うしなひたるに遣

す

鬼灯のさすればつぶす歎哉(六)

盆會

魂棚は露も涙もあぶらかな

(一)蜉蝣稿中の句、妻の都にて死せしを弔ふ

(二)蜉蝣稿中の句

(三)撮解に、「いの字草は狼尾草にて粟に似たる草也」

(四)あかねや半七美濃や三勝をいふ

(五)七月十六日洛北松ケ崎に妙法の火を點ず、蜉蝣稿中の句

(六)洛東淨土寺山の送火をいふ

魂祭母屋の妻戸の音は何

喰ものも皆水くさし魂祭

たま棚や皆こまぐと茄子あへ

詞書有略

たま祭り爰が願のみやこなり(一)

九日の六道まゐり小野の篁

の冥途にかよへる道なりと

て洛中の貴賤まうでて槇の

葉をもとめて魂をむかふる

印とし侍る

打てば響く物としりつゝ迎鐘(二)

靈棚の粟にさきだついの字哉(三)

あかねや美濃やと聞えたる(四)

なき名のながれとどまる所

は千日寺の蓬生の露ときえ

かへりぬ盆のこのごろは夜

ごとに群集して逆縁にとぶ

らふ人もあまた侍りけり戒

名嵐雪月照と石の塔婆に彫

入れたりあるまじきことな

らねどをりからは思ひかけ

ずおぼえ侍りければ

夢によく似たる夢哉墓參り

松が崎妙法の火(五)

經を燒く火のたふとさや秋の風

大文字の句をもとめたれば(六)

雪のこゝろの出でけるまゝに

山の端を雪にも見ばや大文字(一)

相撲

角力とり並ぶや秋のから錦

千本を南へよつづかの邊(ホトリ)へ

行くとて

島原の外もそむるや藍畠(二)

戻りにも賣れずに鵙(モズ)の草鞋哉

蘭鮑同肆

盗みたる蘭や乞食の蓑の下

秋暮

立出てうしろ歩や秋のくれ

もどかしく吾面くはす秋の暮

寢て起きて又寢て見ても秋の暮

秋の暮石山寺の鐘のそば

定家

舟炙(アブ)るとまやの秋の夕かな(三)

單誓上人の岩室

燕のかへりみちありほらの雨(四)

江の鳴

日を拜む海士のふるへや初あらし

江の島の穴をうなるや秋の夢(五)

鶴が岡の放生會拜みにとて

待宵の月かけて雪の下のや

どりに侍り試樂の笛に夜す

(一)裝遊稿にいゞ

(二)裝遊稿中の句

(三)定家「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」

(四)塔澤記中の句なり

(五)「秋の夢」は「秋の聲」の誤なるべし

がらうかれぬ明れば朝霧の

木の間たえ〴〵に樂人烏の

ごとくつらなり社僧雲に似

てたなびき出る神のみゆき

の嚴重なるに階下塵しづま

り松の嵐も聲をとゞめぬ

烏帽子着て白きもの皆小田の雁

月

名月や柳の枝を空へ吹く(一)

名月や烟這ひゆく水のうへ

旅泊

錢矢立空に三五とよぶ聲を

仕合な岨の松かなけふの月(二)

青空に松を書きたりけふの月

花折新發意に戸ぼそを扣て(三)

茶飯の狼藉をする一客あり

名月は蜂もおよばぬ梢かな

明月や先づ蓋取りて蕎麥を嚙ぐ

海も山も坊主にしたりけふの月(四)

清涼紫宸のあらたにつくり

みがかれたる中に

新月や内侍所の棟の草

名月や歌人に髭のなきがごと(五)

青鷺の叱(ギヤツ)と鳴きつゝけふの月

名月の團友坊は男かな(六)

土臭き艢(ボラ)にはあらずけふの月

(一)類柑子集に、「塗垂のうしろに一株高し」と前書あり

(二)支考の「其許は涼しさうなり峰の松」蓼太の「名月や生れかはらば峯の松」皆これよりいゞ

(三)花折新發意は能の狂言なり

(四)門人清水周竹が剃髮せし時の吟なり

(五)萬葉、「かつまたの池はわれ知る蓮なしかいふ君の髭なきがごと」

(六)團友坊は涼菟の初名

ひたちの鮭かまくらのかつを松江の鱸膾わたらぬ雁に
俎板をならし遠き海の珍物
ちかき江のひれもの心におもへばよだれに流れさもあれ
ことしの名月眺め得たり
(一)獻々は嘶ですみぬけふの月
名月は絶えたる瀧のひかり哉
詞書あり略
(二)早雲寺名月の雲はやきなり
鎌倉大佛
(三)明月は南を得たり佛頂珠
名月やたしかに渡る鶴の聲

(一)獻々は酒盛をいふ
(二)塔澤記中の句、早雲寺は箱根湯本にあり
(三)塔澤記中の句
(四)白氏、「三五夜中新月色、二千里外故人心」の句意をとれり
(五)蜷遊稿にいづ
(六)とこぶしは蚫に似て小なる貝
(七)ねこは粉の腐敗しかゝるをいふ

高笑ひ月見る人に見さげたり
けふ長崎の泥足めづらしき
顔もて目なれぬうつは物を
おくり侍るに
(四)新月の心ばえなり唐煙筒
明月や道心の名のおもしろき
(五)聾とは外よりしらぬ月見哉
詞書有略
(六)野に寢たる牛の黑さを秋の月
(七)とこぶしは宵の小貝か磯の月
信濃催馬樂
君來ずばねこにせむ信濃の眞そば
初眞蕎麥

新酒
(一)我もらじ新酒は人の醒めやすき
題しらず
(二)はぜ釣や水村山廓酒旗ノ風
あしの穂やおやぢと呼ぶは渡し守
木犀の晝は醒めたる香爐かな
八九月風やいづこのほらの貝
(三)穂に出でて世の中は田も疇もなし
(四)水音も鮎さびけりな山里は
柿　栗
ひとり旅しぶ柿くうた顔は誰
詞書有略
(五)猶石にしぶ柿をぬる翁かな
毬栗や手にさゝげたる法の場
秋の暮井手の蛙のからを見む　舟竹
(六)(七)というて土産ねだられける
に人丸の柿の實山の邊の栗
の殼けふの得もののあまり
なりと笑ひ興じて
(八)榧のから吉野の山の木の實見よ
標　茅
林間に煮燒する日をたゞたのめ
くち木となおほしめされそ榎茸
菊
(九)初菊やほじろの頰の白きほど
指に入る風はや寒しけふの菊

(一)越智越人にあひし時の句なり
(二)杜牧、「千里鶯啼綠映紅、水村山廓酒旗風、南朝四百八十寺、多少樓臺烟雨中」
(三)豐年の秋の樣
(四)塔澤記の中の句
(五)同前
(六)舟竹は周竹の前名
(七)節信が「井手の蛙のかち」と能因が「長柄の橋の鉋屑」と互に贈答せしこと袋草子にあり
(八)「林間煖酒燒紅葉」の句と、「只頼めしめぢが原のさしも草我世の中にあちんかぎりは」の歌とを取合せたり
(九)ほじろは靈眉鳥

蒼浪にのぞみたえけり菊の岸
一くねりくねるにもこそ菊の水

菊九章

其一　九日

菊もまだつゆ〳〵つぼむ九日哉

其二　素堂亭にて人々菊見ら
れけるに

かくれ家やよめ菜の中に交る菊

其三　百菊を揃へけるに

黄菊白菊其外の名はなくも哉

其四　名所の菊

白ぎくの鎌倉やすまば扇ヶ谷

其五　菖のたけのみやびやか
なるは歌の姿なりけら
し菊を見て句をまうく

鶴の聲菊七尺のながめかな

其六　琴

琴は語る菊はうなづく籬かな

其七　碁

菊買ふは又碁にまけし人やらむ

其八　書

書を抽(ニギル)芭蕉にねぶれ菊の兒

其九　畫

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿
京よりから崎へ詣るとてし
がの山越はすることなり

志賀越とありし被(カツギ)や菊の花(一)
鼾にておのれと覺めぬ菊の晝
霜の菊杖がなければおきふしも
繪の菊に今朝は餓ゑたる胡蝶哉(二)
蜂はさし蝶はねぶるや菊の花

瀧下圓哲に燕す

きくの香にさすが山路の雪踏哉
山路ふるこゝちや菊に榎茸
菊添ふやまた重箱に鮭の魚
さればこそ鄙の拍子のあなるかな

神田祭のつどみうつ音蛟足(三)

ひやうしさへあづまなりと
や
花すゝき大名衆をまつりかな

詞書有略

袖つまにもつれし雲や露時雨(四)
まつ風の里は籾するしぐれ哉

狐林紅葉

牛まれに茶道をかくす椹(モミヂ)かな(五)
莊子樗木の大きさ牛をかく
す紅葉の醉ざめを一ぷくと
かや化されけむと放散逍遙
のたはむれ事なり
ちり行くも二度の情や梅紅葉
去るかたへまるりて
蔦の葉やつたの身ながらかゝる時

(一)裝遊稿中の句
(二)胡蝶記には「今朝も」とあり
(三)神田祭は九月十五日
(四)塔澤記中の句
(五)茶道坊主

病床に虱をとる辨

しらず身の毛いよだちて襟の程うさ〳〵としつるが飯つぶの半したる物さすりあてたり疾くものの上に赦しはなちめがね二重に疊て渠(カレ)がさまを窺ひ見るに白き肉黑き腸呼吸につれて動搖ゆるぐ眼きら〳〵と見するゑ手足よつか六つかありて怒(イカツ)げなるが護摩堂にまします明王尊に似たり虎にも戰ひ龍とも爭ふべし誠や必死の人の床にはかいふり戻りてあざむきにらむとこそ本草には見えたれいまだ死まじきにやしりついむけて行く恐ろしと見ればこそさも覺ゆれおのれが姿のなべての虫におとれるものかは歌うたはぬは聲のなければなり今少し身かろからば待宵のふ(一)るまひもしかねやはすべきを蓑虫にゆかりたる鬼の子なればかかく世にうとみ果てられたる業生のほどこそいと拙けれ臭穢の中に質を請けて褌に潜りぬひめにかくれて人の血氣を犯し吸ふこと蚊子の鐵牛を嚙むより猶甚しその生涯の終れる所は火とりの中に細きけぶりと飛び木枕の角にからき恥をばさらされぬされば眞如の性のみてる事や摩竭なに(一)とかいへる魚の大百由旬より蟭螟(セウメイ)の微細なるまで行きわたりて憎愛かはる事なしとこそ見ゆれ内裏にもの祈りけるひじりの御灯の光に一夜しらみ拾はれたるに物の化のこと治りけるとぞ知識の肌に馴れまとひて德をおなじういはれけるもさるべき因緣にや柱の穴に生をたくはへて舊年の怨人(フタビト)には報ふともさもあれさついか(二)にゆるしてむとかたなひねくり鎗とりしごく迄いらちおもふ間にころ〳〵ところげて見えずこはもらしつるはと騷てあなぐり求むれど

(一)衣通姫「我背子が來べき宵なりさゝがにの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」

(一)摩竭は鯨

(二)「さつ」は「しやつ」(這奴)

なし淵に物落せし人の顔し
て手打ちはたきてより夢も
しらみにしらみ東雲の空も
しらみはてぬ白身坊が衣被
けしものか
あさがほの花ほど口をあくび哉

追加

われからと喪に住む人の涙かな
木蓮や花にて照らす秋もあり
ひえ鳥は椿の命しらねばや
きつゝきや鎧傳ふる家の軒
毬栗のにくさをにじる若衆哉

朝日山更に幽なり網代打
烏なと起出よあたら月夜哉
只ならぬ故にうへ吹くか荻の風
秋の日の事たらはしや三つ盒子
菊の香に鳩も硯の水添へむ

玄峰集

冬之部

讃大黒

神の留主能く女房を守るべし

十月の蟋

きりぐ〜す鼠の巣にて鳴終りぬ

凩

木がらしに梢の柿の名残かな(一)

前川亭にて

木がらしの僅にまねく庭木哉

芭蕉翁回郷

凩の吹きゆくうしろ姿かな

一葉ちりいくらも散りて月夜哉

時雨

茶を煎て時雨あまたに聞きなさむ

深谷(シンコク)やしきる時雨の音もなし

山茶花

いさはやの葉やあは雪も消えがてに(二)

延喜帝

寒夜に國土の民もか寒から

むと夜のおとどにて御衣を

ぬがせ給ひけるとなり

脱ぎたまふ御衣は天下の衾かな

京にて

(一)胡蝶記中にいゞ

(二)「いさはや」は椿

ふとん着て寢たる姿や東山
足袋はきて寢る夜隔てそ女房共

爐

爐びらきの日をしめし野に土菜哉
法華を聞き侍りて
沈著世樂無有慧心
つとめよと親もあたらぬ火燵哉
冬の日容をもてなす
君見よや我手いるゝぞ莖の桶
たま〳〵に引く人のあり赤大根
午といふ一字題
萱原や枯れかげろひて馬の陰嚢
水鳥
鈴鴨の聲ふり渡る月寒し
萍に何を喰ふやらいけのかも

汀氷

鴨おりて水まで歩む氷かな
題夷講
鱈汁をついて巖に落つるなる
霜朝の嵐やつゝむ生姜味噌
十月廿五日共桃隣出武江而
暨義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱
上略
霜月七日のゆふづくよの程
に義仲寺の冢上にひざまづ
く空華散じ水月うちこぼす

(一)元祿三年鬼貫來訪の時挨拶の句也
(二)文集に全文いでたり

時心鏡一塵をひかざれば萬
象よくうつる此師この道に
おいてみづからを利し他を
利して終に其神不竭今も
見給へ今も聞給へとて
此下にかくねむるらむ雪ほとけ

十月廿二日夜

十月を夢かとばかりさくらばな

四七日　題翁三物

木がらしの猿も馴染か蓑と笠

十一月十二日初月忌

泣く中に寒菊ひとり耐へたり

元祿乙亥十月十二日一周忌

夢人の裾を摑めば納豆哉

七回忌

霜時雨それもむかしや坐興庵

十三回

品々の蒲團にのぼる木魚哉

歸依法　肉邊の菜を喰ふ

鰒のやうに腹を立するあけ麩哉

海鼠

海鼠喰ふはきたないものかお僧達
海鼠だたみもむつかしき世や獨住

蠣を得て返事に

たまはるは石花にかしこしひねり文

神樂

(一)枯尾花集歌仙の發句なり
(二)枯尾花集にいゞ
(三)坐興庵は芭蕉庵の前名にや
(四)蠣を捨りて砂を去りたるをひねり石花といふ

かぐら舟澪の灯の御火白くたけ

雪

門の雪臼とたらひの姿かな
竹の雪百歩の馬屋見すかせり
蛇もせよ木兎もせよゆきの猫
初雪や裾へとゞかぬ白丁花
御築地のうちををがみ侍り
けるに如意が嶽より出る月
の南門にかゝりてかぎりな
くめでたかりければ
から花に月雪こぼすとびら哉
菓子盆やそもそめいろの雪ならば
澤庵の若衆ぜせりや雪のふみ

(一)駿州島田の刀鍛冶

(二)釋迦出山の時沙羅雙樹の下にて明星を見給ひしといふ

(三)嵯峨落柿舍にての作なり

藏ありと知りたる雪の光かな
今の島田よし助が門も見す
てがたくて
鍛冶の火も殊さらにこそ笠の雪
明星は乞食も見るか雪のうへ
雪中に雪を投込むあそび哉
雪はまうさず先づ紫の筑波山
此雪にむかひにおこす人も人

霰

武士の足で米とぐあられかな
顔出してはづみをうけむ玉霰

鉢たゝき

今少し年より見たし鉢叩

畫讃

畑中によし野靜やすゝ拂る事なんどおもひ出られ侍りて

歳暮

山伏の見ごとに出立つ師走かな
古足袋の四十に足をふみ込みぬ

東潮が子もてるに申遣す

つき立の餅に赤子や年の暮
おもへはや泣かれ笑はれとしの暮
とし一夜輾残さじ日の鼠
又汁粉さまで浮世にあかねども
ばせを庵の芭蕉もいまだう
ひうひしかりける秋桐の葉
の一葉とへと告げこし給へ
錢ほしとよむ人ゆかし年の暮

慰女房

三盒子ことたらはすや年の暮
古暦ほしき人には參らせむ
岡見すと妹つくろひぬこへの門
五十ばかりの古猫の鼠もと
らずなりて常にゐろりに鼻
さしくべて冬ごもりたりな
まじひに南泉の刀をのがれ
たるを身の幸にして今年も
暮れぬ

(一)畫にかきたる靜御前の市女笠きたるさまを媒拂の女の姿に見立てたり

(二)俗に赤子の肌はつき立の餅のやうといへり

(三)草庵集に兼好がもとより上れたまへ錢もほしといふ事を答冠にもきて歌よみて頓阿に送りし事あり

(四)「こへ」は小家か

(五)南泉といふ禪僧猫を斬りし事あり

いづれもの猫なで聲にとしの暮
軒の柊梅を探るにおほつかなし
豆をさへ聞かぬ藁屋にこれや此(一)
此句は家をやきたる年小屋の住居のわびしきに眼をさへやみての吟なるよし
蕎麥うちて鬢髭白し年の暮
猿猴の手に手をかるや年のくれ

辭世

一葉ちる咄(トツ)一葉ちる風のうへ

(一)師分の豆打の聲もきかずとなり、螺丸の「宮も藁屋」これやこの行くも返るも」の二首を併せ用ふ

追加

稲妻やあはれに薄きかんな月

六祖讃

そむきなりそゝ麥なりや年の暮
呑んで置く殘る齡や菊の宴
雪に折れ天窓の上に菊の杖
道の記に戀歌は多し狩使
見れば垣に裏表あり雪の聲

昔寛延三庚午正月 百萬旨原 校訂

丈草發句集

丈草俗姓は内藤にして、世々尾張の國犬山の城主に武を以て仕ふ、文を右にして和漢の才あり、若きより佛乘に歸して玉堂和尚の禪意を傳へ、奉公を辭して薙髪す。偈曰、多年負屋一蝸牛、化做蛞蝓得自由、火宅最惶涎沫盡、追尋法雨入林丘、發句、涼風にきゆるを雲の舍り哉と云々。終に故鄕を去りて、湖南の粟津龍ヶ岡に茅屋を結び、佛幻庵と號し、芭蕉翁を開祖とす、近くまで其跡ありて、岡の堂といふ。翁の滅後山に籠りて、師恩の報せむために、一石一字の法華經を書寫して墳に築く。元祿十七年の春二月廿四日病床に坐化す。墳は龍ヶ岡の東林の中にあり、正秀が墓に隣る。

丈草發句集

(一)一本「竹簀子にあほちこぼすや」とあり

春

うぐひすや茶の木畑の朝月夜

竹簀戸のあふちこぼつや梅の花(一)

床脇は梅さくかたか荷茶屋(ニナヒヂヤヤ)

待つことは梅にあるかも茶摺子木

奉納

梅が香や湯立の跡の炭の切

片屋根の梅開きけり烟出し

遲望が新宅を賀す

水仙に作事は濟んで梅の客

尾張の國に春を探りて

梅の花散り初めにけり難追風

芭蕉翁の往昔を思ふ

梅が香に迷はぬ道のちまた哉

引寄せてはなしかねたる柳哉

我事と鯲の逃げし根芹かな

寒だけは寒く、土用だけは暑し、春ひとり何ぞ餘興なきや

春だけはもちのこさぬや面白み

背戸中は冴返りけり田螺殼

里の男の田螺殼を水底に沈め、待ち居たれば、腥を貪

る鮠のいくらともなく入り
籠りて

入替る鮠も死ぬに田螺がら
(一)
取付かぬ心で浮ぶ蛙かな

梅本寺に遊びて

松風を打越して聞く蛙かな

草庵

火を打てば軒に啼合ふ雨蛙
のら猫やうかれ行くほど松の中
歸る空なくてや夜半のやもめ鴈
眞野雄琴雲雀にとゞく煙哉
朝ごとに同じ雲雀か屋根の空

支考餞別

松風の空や雲雀の舞ひ別れ
燕の鴈に問うてや鴉まはり

蘆文に別るゝとて

落付の知れぬ別や鳳巾(イカノボリ)
大原や蝶の出て舞ふ朧月
陽炎に隣の茶さへすみにけり

芭蕉翁の墳に詣でて我病身をおもふ

陽炎や墓より外に住むばかり
春雨や何から言はむ嵯峨戻り
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴

身を風雲にまろめ、あらゆる乏しさを物とせず、唯一つの頭の病もてる故に、枕のかたきを嫌ふのみ、惟然子が不自由なり、蕉翁も折折之を戯れ興ぜられしに、此人はつぶりにのみ奢を持てる人なりとぞ、此春故郷へとて湖上の草庵を覗かれける、猶末遠き山村野亭の枕に、いかなる木のふしをか侘びて、殘る寒さも一入にこそと、後見送る岐にのぞみて

(一)晉の劉伶常に鹿車に乘り一壺酒を携へ人をして鋤を荷ひて隨はしむ、蓋し醉死の時直に埋めさせんため也

木枕の垢や伊吹に殘る雪

閑居

朝夕にせゝる火燵や春のたし
白妙に月夜烏や花の奥
眞先に見し枝ならむ散る櫻
角入れた人をかしらや花の友

更に劉伶が鋤を倩はじと興(一)じて

醉死なぬ先から花の埋みけり
うか〳〵と來ては花見の留主居哉
鳶の輪の崩れて入るや山櫻
花曇田螺のあとや水の底
死んだとも留主とも知れず庵の花
塗樽の庵に立寄る花見かな

花散るや覗きあひたる岩の穴
水壺にうつるや花の人出入
片尻は岩にかけたり花莚
散る方は志賀にしておけ澳の花
木啄や枯木をさがす花の中
笠松に舞ひもどりけり花の友
小疊の火燵ぬけてや花の下

洛東の花

落込むや花見の中のとまり鳥

病中

山がらは花見もどりや枕もと
夕ばえや花の波こすあらつゝみ

餞別

見送りの先に立ちけりつくぐし
咲立て柴のならぬや躑躅山
さし覗く窓へ躑躅の日脚哉
あぐらかく岩から下や藤の花

畫讃

何の葉の影ぞねぢむく雉子のてり
三月や冬の景色の桑一木

三月盡

明けぬ間は星も嵐も春の持ち

夏

時鳥啼くや湖水のさゝ濁り
飛込んだまゝか都のほとゝぎす
子規瀧より上のわたりかな
川越の途中に立つや郭公
ほとゝぎす誰にわたさむ川向ひ
啼かぬ間よ空一ぱいの時鳥
菜種殼焚くや野風の子規
杜鵑なくや榎も梅さくら
しるべして山路もどせよ杜宇
山道や壺荷にひゞく時鳥

嵯峨にて

鹿追の寢入るや藪の杜鵑

木曾川のほとりにて

ながれ木や篝火の上の不如歸

月夜の松原に醉出て

狂亂のけいこの中にほとゝぎす

遊長命寺

筍の鮓を啼出せ郭公
寢て待つや梅田枇杷麥蜀魂(一)
屋の棟の麥や穗に出て夕日影
杉なりにせり上りたる田植かな
谷風や青田を廻る庵の客
松風を中に青田の戰ぎかな
夕ばえや茂みに洩るゝ川の跡

(一)攝津梅田村は枇杷と麥との名產地なり

去來が落柿舍にて

芽出しより二葉に茂る柿の實

はね釣瓶蛇の行方や杜若

青雲や馬鍬休むる晝の芥子

晝鐘や若竹そよぐ山づたひ

子につれて返る青みや去年の竹

草芝を出づる螢の羽音かな

はしりこむ螢の中や谷の水

螢火や蟹のあらせし庭のへり

豐後龍門寺の瀧

螢火や村中に取る瀧の水

曲水の子を悼む

呼聲は絶えて螢のさかり哉

やうくと出て啼く時か閑古鳥

仰木の里書懷

おのが音の尼や水鷄の磯の闇

(一)血を分けしものと思はず蚊の憎さ

朝日さす紙帳の中や蚊の迷ひ

衰病倚人

行先にのがれ入りけり蚊帳の中

魯九剃髮せし時暇辭

蚊帳を出て又障子あり夏の月

隙明や蚤の出て行く耳の穴

電のさそひ出してや火とり虫

梅本寺より歸るとて

蟬啼くやわかれて上る軒の山

(一)尼の字は誤なるべし

夕立のかしら入れたる梅雨かな

美濃の關にて

町中の山や五月の上り雲

白雨に走り下るや竹の蟻

夕立に飛びのく月や松の上

涼しさに寢よとや岩のくぼたまり

小屏風に山里すゞし腹の上

あら壁や水で字をふく夕涼

(二)突立て帆となる袖や涼舟

(三)草臥の根ぬけや澳の晝涼

すゞしさの心もとなし蔦うるし

丈山の像

さかさまに扇を懸けて猶すゞし

(三)犬山にて市中苦熱

涼しさを見せてや動く城の松

ぬけ果てし納涼のあとや椽の月

四梅廬の納涼

(四)打水にのこるすゞみや梅の中

澁笠に受合せけり蓮の露

浦舟の頭へしに匂ふ蓮かな

惟然行脚を送りて

炎天に歩行神つくうねり笠

雨乞の雨氣こはがる借着哉

元春法師身まかりけるに

世の中を投出したる團扇かな

旅行

(二)一本「字をかく」とあり

(二)一本「帆になる」とあり

(三)丈山の富士の詩、「白扇倒懸東海天」の句による、一本「又すゞし」とあり

(四)四梅廬は僧李由の別號

帷子にあたゝまり待つ日の出哉

梅本寺を立出るとて

雨乞に先立つけふや破笠

秋

朝夕べ秋の廻るや原の庵

夜明まで雨吹く中や二つ星(一)

精靈の好かれし人を集めけり

聖靈の隣ありきや山の上

魂棚や藪木をもるゝ月の影

精靈も出てかりの世の旅寢哉

舊里に歸りて

精靈に戻り合せつ十年ぶり

送火の山に上るや家の數

稻妻のわれて落つるや山の上

夜舟より上りて洒堂亭に眠る

いなづまや夜明けて後も舟心

悔みいふ人の途切やきりぐす

行燈に飛ぶや袂のきりぐす

宵までや戸にうたれたる蟋蟀

踊子のかへり來ぬ夜や蚤(キリ〳〵ス)

寒けれど穴にも啼かずきりぐす

きりぐす啼くや出立の膳の下

物かけて寢よとや裙のきりぐす

寢がへりの方になじむや蟋蟀

つれのある所へ掃くぞきりぐす

(一)一本「朝夕を」とあり

病床

虫の音の中に咳出す寢覺哉

啄木の入りまはりけり藪の松

ばせを翁へ文通の奥に

招けどもとゞかぬ空や天つ雁

山ばなやわたりつきたる鳥の聲

脱殻にならびて死ぬる秋の蟬

旅中

蜻蛉の來ては蠅とる笠の内

啼き腫れて目ざしもうとし鹿の形

北嵯峨や町を打越す鹿の聲

あれこれを思ひはづれる花野かな

早稲の香や雇出さるゝ庵の舟

名月や雨にはりあふ風光

名月や車きしらす辻番屋

辻堂に梟たてこむ月夜かな

戸を明けて月のならしや芝の上

から樽を漏にあてけり月の雨

野山にもつかで書から月の客

京筑紫去年の月問ふ僧仲間

淀川の邊にて

舟引の道かたよけて月見かな

發句して笑はれにけり今日の月

此句は林之助といひける

九歳の時、はじめて言出

せる句の由

(一)友づれの舟に寢つかぬ夜寒哉

答見寄山庵

(一)一本「友つれて」とあり

燒栗も客も飛び行く夜寒かな

(一)病人と撞木に寢たる夜寒かな

洛の惟然が宅より故郷へ歸

るに

鼠ども出立の芋をこかしけり

鷄頭に置いて逃るや笠の蠅

鷄冠の畫をうつすや塗枕

つり柿や障子に狂ふ夕日影

木傳うて穴熊出づる熟柿哉

落柿舍すたれける頃

(二)澁柿はかみのかたさよ明屋數

谷越に鳴子の綱や窓の中

居風呂(スエノロ)の下や案山子の身の終

借りかけし庵の噂や今日の菊

嵯峨にて

竹伐の外には見えず菊の主

蘆の穂や顔撫上る夢さかり

蘆の穂や蟹をやとひて折りもせず

早咲の得手を櫻の紅葉かな

稲積に出づるあるじや秋の雨

松の葉の地に立並ぶ秋の雨

ねばりなき空を走るや秋の雲

伊賀へ越す時おとき峠にて

いひおとす峠の外も秋の雲

飼猿も秋はことさら山の聲

旅痩を見には寄らぬに秋の池

(一)二人丁字形に寢るなり

(二)頑健なるを「かみがかたい」といへり

青空や手ざしもならず秋の水
歸り來る魚のすみかや崩築
堂頭の新蕎麥に出る麓かな
夜嘶の長さを行けばどこの山

須磨の浦

眺めあふ秋のあてどや寺と船
行く秋や梢にかゝる鉋屑
行く秋の四五日弱る薄かな

(一)「磯時雨」一本「幾時雨」とあり
(二)「峠こす鴨の羽なりや諸きほひ」の誤なるべし

冬

雷落ちし松は枯野の初時雨
一方は藪の手つたふ時雨かな
黑みけり沖の時雨の行處
幾人か時雨駈けぬく瀨田の橋
鳥の羽もさはらば雲のしぐれ口
屋根葺の海をふりむく時雨哉
鍋もとにかたぐ日影や村時雨
風雲や時雨をくゞる比良おもて

東湖あたりの冬空を吟じて

むきたらで又や時雨のかり着物

越中翁塚手向

入る月や時雨るゝ雲の底光り
海山の時雨つきあふ庵の上

所思

もたれたる柱も終に磯時雨(一)

芭蕉翁病中祈禱の句

峠こす(二)鴨のきほひや諸きほひ
ばせを翁の病床に侍りて
うづくまる藥の下の寒さかな

傷亡師之終焉

曉の墓もゆるぐや千鳥數寄

芭蕉翁追悼

ゆりすわる小春の湖や墳の前

芭蕉翁の七日〳〵もうつり

行く哀さ、無名庵に偶居して心地さへすぐれず、去來が許へ申送る

朝霜や茶の湯の後のくすり鍋

國々の墓所も同じ蕉葉の霜

にしらめる三年の喪は疎ならぬ中に、湖上の木曾寺は其全き姿を收めて、人々のぬかづき寄る袖の泪も、一しほの時雨をすゝむる、舊寺の夕べより朝をかけて、梵筵吟席の勤ねもごろなり、然れども野衲は獨り財なく病有る身なれば、なみなみの手向も心にまかせず、あたり近き谷川の小石かきあつめて、蓮經の要品を寫し、その菩提を祈り、その恩を謝せむ事を願へり、誠に今更の夢とのみ驚く心喪のかぎりに筆を抛ち、手を拱して、唯墓前の枯野を見るのみ

石經の墨を添へけり初時雨

芭蕉翁七回忌追福の時、法華經頓寫の前書あり

待受けて經書く風の落葉かな

水底の岩に落ちつく木の葉哉

凩のあたり所や瘤柳

奈良の玄梅、蕉翁のこがらしの身は竹齋に似たる哉といへる句を夢見て、其翁の像を畫きて讃望みけるに、

木がらしの身は猶輕し夢の中

飛返る岩の霰や窓の中

山中泊

雹ふる宿のしまりや蓑の夜着

初霜の泥によごれつ草の色

思はずの雪見や比叡の前うしろ

雪空の片隅さびし牛の留守

狼の聲そろふなり雪の暮

納豆するとぎれや嶺の雪おこし(一)

ふりかへて山から見たし雪の窓

狐なく岡の晝間や雪曇

野も山も雪にとられて何も無し

さかまくや降積む峰の雪の雲

折れあうて中行く道や雪の友(二)

都の人に申遣しける

山雲の餘りをやれば京の雪

嵯峨の野明別莊にて

柴の戸や夜の間に我を雪の客

去來が菴を訪ひ來れるに別

(一)北國にて雪の降ちんとして雷鳴あるを雪おこしといふ

(二)一本「雪の松」とあり

るゝとて

雪曇身の上を啼く烏かな

村雲の岩を出づるや吹雪の根

しまき來る雪の黑みや雲の間

淋しさの底ぬけて降る霙哉

背戸口の入江に上る千鳥かな

小夜千鳥庚申待の舟屋形

水底を見て來た顏の小鴨哉

夜烏をそやし立てけり鴨の群

霜腹の寢覺々々や鴨の聲

榾の火や曉がたの五六尺

草庵の火燵の下や古狸

下京を廻りて火燵行脚かな

ほた〳〵と朝日さしこむ火燵かな

守り居る火燵を庵の本尊かな

吹く嵐あらしや今は山やお

もふ行く曉の寢覺なりしを

といふを誦して

山やおもふ紙帳の中の置火燵

炭賣や隣の人が焚きに行く

紙子着て寄れば火燵の走り炭

貧交

まじはりは紙衣の切を讓りけり

一夜さに猫も紙子もやけどかな

居寢さへかゝらぬものなり

ければ、立別るゝ宿の跡も

(一)舟岡は京の墓地

然こそと思ひて、

踏破る紙帳の穴や置土產

鷄の片足づつや冬ごもり

靜さを數珠も思はず網代守

舟岡に影氷らすや鉢たゝき

(一)一月はわれに米かせ鉢たゝき

うら門の竹にひゞくや鉢敲

長崎卯七渡鳥撰集の時

句選や霙降る夜の霰酒

水風呂に寬しかけて谷の柴

鷹の目の枯野にすわる嵐哉

神松のさえこむ影や禰宜の夢

黑海苔は雪海苔ともいふ、

岩間に降積れる雪の日に照

されて、此物とはなれりと

ぞ、浪化より惠まれしに取

りあへず

海苔の名やたゞ打見には雪と炭

あら猫の駈出す軒や冬の月

雪よりも寒し白髮に冬の月

獨法師はなか〳〵の手廻し

にて

煤掃や山風うけて吹通し

寒は既望の日より明けて、

風景殊更に悠然たり

十五日春やのしこむ年の暮

行燈を消せば鼠の年忘　月代や時雨の中の蟲の聲
追鳥も山へ歸るか年の暮　粟津野や山から京のほとゝぎす

安永三年年六月　翠樹堂

追加

鶯に取らばや庵の風ふせぎ　荆口尋ねられしに
着て立てば夜の衾もなかりけり　名月の前へまはるや旅枕
影法師の横になりたる火燵哉　賀助然于山彦撰集
白粥の茶碗隈なし初日影　月花や好きこたへある里の山
酒賣のもどりは樽に野梅かな
子規たしかに峯の早松茸
とゝ川の春や暮れ行く葭の中
船待の笠にためたる落葉哉

惟然坊句集

梅華烏落人、惟然坊は美濃國關里の産、廣瀨氏安通が舍弟なりけり。或日庭前の梅花時ならずして烏の羽風に落散るを感動せしより、しきりに隱遁のこゝろざし起りてやまず、ある夜妻子を捨て、自ら薙髮して芭蕉門にかけ入り、吟徒となりて、晝夜をわかず俳諧三昧にして、終に此道の大眼悟徹を遂げたり。翁遷化後師として隨ふべき人なし、友とし親むものなしとて、風羅念佛といふものを作り、古き瓢を打鳴し、諷ひ風狂して足の行く處に走り、足のとどまる處にとゞまりて、心の儘に身の天然を終れり。まことに世に奇々たる風骨のこのもしきあまり、わが旅寢のびまく、かの烏落人の句々、奇事奇談眼に見耳にふれたる程の數々書集め、一囊となしたるを、關里巴圭が勸めにまかせて、一とぢの冊子とはなしぬ。

曙菴秋擧

鳥落人惟然坊は蕉門の一奇人なること、世に知る人まれなり。秋擧之をかなしび、草枕の時時目に見耳にふるゝ毎に年頃書置きぬ。こたび惟然坊がふるさと關に假寢して巴圭にかたらひ、鳥落人の遺稿をあはせて、かの風韻を世に輝かすこととしかり。

朱樹叟　士朗

惟然坊句集

曙庵先生選定　巴圭校

春

しづかさの上の靜や梅の花
梅さくや赤土壁の小雪隱
梅の花赤いはく〳〵あかいはな

梅畫

梅の花あの月ながら折らばやな

人日

芹薺踏みよごしたる雪の泥
山の幅(一)啼きひろげけり雉の聲
風呂敷へ落ちよ包まむ舞雲雀
衣更着の重ねや寒き蝶の羽
山吹や水にひたせるゑまし麥(二)
まだ山の味覺えねど松の花

こよひ智積院の鐘聞、今朝まで其元の事ども益御無事之旨及承ル、秋與風須磨明石のはつ花一兩日已前にあわてゝ東山に飛びまはれば

花もなう少しの分かまたなんぼ
久世に弱り果て、いづ方にてもゆるりと伏し申分別のみ、大雲樣近日御下可被成

(一)人日は正月七日
(二)一本「啼きひろげたる雉かな」とあり
(三)一本「衣更重ねや重き」とあり
(四)此二三行誤脫あるべし、意義通ぜず

いよし御聞可被成いかしく

三月廿七日　　惟然

東暇丈

かう居るも大切な日ぞ花盛

我儘になるほど花の句をさらり(一)

富貴なる酒屋にあそびて、

文君が爪音も醉のまぎれに

おもひ出らるゝに

酒部屋に琴の音せよ窓の花

上市にとまりける夜は雨ふりけるに、明けて晴渡りける、よしの川をわたれば、

口の花はちり過ぎて、かへらぬころほひになりぬ、それよりしてひたはひりにはひれば、花も奥あるけしきにて、匂ふばかりに咲きわたりぬ、なほ山深く入れば、圓位の住める蹟と幽靜の谷(二)あり、鳥しづまり處々花はかなげにて、しばらく此石上に眠れば、心空しく萬事を休す

今日といふ今日この花の暖かさ

馬の尾に陽炎ちるや晝多葉粉

出羽にて

(一)一本「かう居ても大切な日ぞ花の陰」とあり

(二)圓位は西行

しとやかな事ならはうか田うち鶴

鶯や笹葉をつたふ湯だて曲突(一)

新壁や裏もかへさぬ軒の梅

宗鑑の陳蹟を尋ねて

梅散て觀音艸の道の奥

詣聖廟(二)

如月や松の苗賣る松の下

乙鳥や赤土道のはねあがり

鳥散す檜木(くしき)の中や雉子の聲

菜の花の匂や庵の磯畠

文臺に扇ひらくや花の下

(一)曲突はくど(竈)

(二)觀音草、又吉祥草ともいふ、喰地れ生じ[illegible]冬に似て晩秋淡紫花を開く

(三)聖廟は天滿宮

夏

若葉吹く風さら〳〵と鳴りながら(一)

於知足亭

名所夏

涼まうか星崎とやらさて何處ぢや

澤水に米ほゝばらむ燕子花

かるの子や首さし出して浮藻艸(二)

撫子やそのかしこさに美しき

夕顔や淋しう凄き葉のならひ

糊ごはな帷子かぶる晝寢哉

追善

追付かむ誰もやがてぞ夏の月

故郷の空ながめやりて

、あれ夏の雲又雲のかさなれば

四日市にて

涼しさよ饅頭食うて蓮の花

無花果や廣葉にむかふ夕涼

竹の子によばれて坊のほとゝぎす

蓴菜やひと鎌入るゝ浪のひま

嵯峨鳳仞子の亭を訪ひし頃、

川風涼しき橋板に踞して

すゞしさや海老のはね出す日の曇り

史邦吟士に別る

起臥にたほふ蚊帳も破れぬべし(三)

芭蕉翁岐阜に行脚の頃した

(一)一本「若葉吹くさちさちさちと雨ながち」とあり

(二)「かるの子」は「かりの子」か、「かもの子」の誤なるべし

(三)「たはふ」は「たばふ」にて貯ふの意か、或は「にはふ」の誤にや

ひ行き侍りて

見せばやな茄子をちぎる軒の畑

遣悶

鶏鳴くや柱踏まゆる紙張ごし

玉江

貰はうよ玉江の麥の刈り仕舞

秋

なほ秋に竹のしわりのしなし哉

更け行くや水田のうへの天の川

七夕やまづ寄合うて踊初

張り残す窓に鳴入る竈馬(イトド)かな

尚々御無事之段承りたく奉存ゐ、爰もと折々の會にて風流のみにゐ、以上

先月はじめて罷越、ゆるゆる得貴意、大慶に奉存ゐ、色々預御馳走、御懇意の御事ども忝奉存ゐ、翁彌御無異にて奈良一宿仕、重陽の日に大坂着仕ゐ、翁

菊に出て奈良と難波は宵月夜

此御句にて會など御坐ゐ、其元彌御無事に被成御坐ゐ哉、御句など少々承たくゐ、先日奈良越にて、近付になりて別るゝ案山子哉

錢百のちがひが出來た奈良の菊

、右兩句いたし申ゐ、御聞可被下ゐ、土芳丈望翠丈どれどれ様へも可然様に御心得被成可被下ゐ、如何様ふと

(一)義仲の落馬をいふ

(二)一本「鹽尻の」とあり

(三)長生亟は「おとなゝみ」と讀むべきか、一本に「悲しさよ」とし「悼少年」と前書あり

(四)所雲は未詳

(五)一本「山の形」とあり

罷越、萬々可得貴意ゐ、京都にて高倉通松原上ルつどらや町笠屋仁兵衛店にて素牛と御尋被下ゐへば相知れ申候、何時にても風流の御宿可申上ゐ、恐惶謹言

九月廿二日　惟然

意專老人

此冬の寒さもしらで秋の暮

粟津にて

いまならば落ちはなされじ田刈時(一)

鹽壺の庇のぞかむ今日の月(二)

なほ月に知るや美濃路の芋の味

奥の細道

萩枯れて奥の細道どこへやら

田の肥る藻や刈寄せる磯の秋

物干にのびたつ梨子の片枝哉

朝露に躄車(キザリグルマ)や草のうへ

廣瀬氏の別墅を萩山とも又は松山ともいへり

萩にのぼる雲の下のは木曾山か

悲しさや麻木の箸も長生並(三)

竹藪に人音しけり栖蔓(四)

伊賀の山中に阿叟の閑居を訪ひて

松茸や都にちかき山の味(五)

湖邊

八景の中吹きぬくや秋の風
我寺の藜は杖になりにけり
(一)肌寒きはじめに赤し蕎麥の莖
世の中をはひりかねてや蛇の穴
翁に坂の下にて別るゝとて
別るゝや柿食ひながら坂のうへ

(一)一本「我家の」とあり

冬

何事もござらぬ花よ水仙花
水仙の花のみだれや藪屋敷
(一)凩や刈田の畔の鐵氣水
鵜の糞の白き梢や冬の山
しかみつく岸の根笹の枯葉哉
鵜や霜の梢に鳴きわたり
枯蘆や朝日に氷る鮠の顔
欲塡溝壑只疎放
水草の菰にまかれむ薄氷
茶を啜る桶屋の弟子の寒さ哉
稲荷堂に詣る
(二)撫房(ナデバウ)のさむき影なり堂の月
萬句興行
はつ霜や小笹が下のえび蔓
冬川や木の葉は黑き岩の間
寒き日にきつとがましや枇杷の花
蕉翁病中祈禱之句
足ばやに竹の林やみそさゝい
看病
引張りて蒲團ぞ寒き笑ひ聲
於義仲寺六七日
花鳥にせがまれ盡す冬木立
越路にて
(三)薪も割らむ宿かせ雪の靜さは

(一)鐵氣水は「かなけみゞ」
(二)撫房はなで佛をいふ
(三)一本「靜さよ」とあり

あそびやれよ遊ぼぞ雪の德者達

世の中はしかじとおもふべし、金銀をたくはへて人を惠める事もあらず、己をも苦しめむより、貧しうして心にかゝる事もなく、氣を養へるにはしかじ、學文して身を行はざらむより、知らずして愚なるにはしかじ

人はしらじ實に此道のぬくめ鳥

有ニ千斤金一不レ如ニ林下貧一

ひだるさに馴れてよく寢る霜夜哉

水さつと鳥はふは〳〵ふうは〳〵

水鳥やむかうの岸へつうい〳〵

芋鮹汁は宗因の洒落

奈良茶漬は芭蕉の淸貧

冬籠人にもの言ふことなかれ

臘八(一)や今朝雜炊の蕪の味

煤掃や折敷一枚ふみくだく

節季候や疊へ鷄を追上げる

天鵝毛の財布さがして年の暮

年の夜や引結びたる續守

年の雲故鄕に居てもものの旅

尋元政法師塚

竹の葉やひらつく冬の夕日影

(一)臘八は十二月八日の意にて、釋迦成道出山の日なりとて佛徒は之を尊み臘八粥を作りて食ふ

曾根松

曾根の松これも年ふる名所哉

貧讃

いにしへより富めるものは世のわざも多しとやらむ、老夫こゝの安櫻山に隱れて、食はず貧樂の諺に遊ぶに、地は本より山畑にして茄子に宜しく、夕顏に宜し。今は十とせも先ならむ、芭蕉の翁の美濃行脚に、見せばやな茄子をちぎる軒の畑、と招隱のこゝろを申遣したるに、その葉を笠に折らむ夕顏、とその文の回答ながら、それを繪にかきてたびけるが、今更草庵の記念となして、猶はた茄子夕顏に培ひて、その貧樂にあそぶなりけり。さて我山の東西は木曾伊吹をいたゞきて、郡上川其間に横ふ。ある日は晴好雨奇の吟に遊び、ある夜は輕風淡月の情を盡して、狐たぬきとも枕を竝べてむ、いはずや道を學ぶ人はまづ唯貧を學ぶべしと、世にまた貧を學ぶ人あらば、はやく我が會下に來りて手鍋の功を、積むべし。日用を消さむに、經行靜坐もきらひなくば、薪を拾ひ水を汲めとなむ。

訪ふに、をりしも人つどひ、俳席を設けゐたりけり。あるじ進出でていふやう、いづこの人かはしらざりけれど俳諧好みけるとあれば、まづ此席へつらなれかしといふ。坊頓ににじりあがりて、はるか末座につらなり、たゞ默々として沈吟す。もとより孤獨淸貧の身なれば、衣服などとりつくろふべきやうなければ身すぼらし、一座のものみな見あなどりて、指さし呼きあへり。さるほどに附くるほどの連句、いひ出すほどの發句、盡く引直しけれど、さもうれしげに一々おし戴きぬ。とかくするうち卷滿尾にいた

椎葉文之事

坊適、おのれが庵に在て、紙なき時は自ら軒端なる椎の枝をりて、葉の次第に一二三のしるしをわかち、味噌ほしき、或は米ほしき、その餘のあらまし事葉毎に書て、關里の社友へおくり、事足しぬとなむ。家にあれば笥に盛る飯を旅にしあれば椎の葉にもる、事かはれど用を爲すこと一つにして、その氣韻もつとも高し。

坊名を僞り俳席に交る事

西國に遊びける頃にやありけむ、たはむれにおのれが名を隱し、ある好人（スキビト）の家を訪ふに、をりしも人つどひ、俳席を設けゐたりけり。あるじ進出でていふやう、いづこの人かはしらざりけれど俳諧好みけるとあれば、まづ此席へつらなれかしといふ。坊頓ににじりあがりて、はるか末座につらなり、たゞ默々として沈吟す。もとより孤獨淸貧の身なれば、衣服などとりつくろふべきやうなければ身すぼらし、一座のものみな見あなどりて、指さし呼きあへり。さるほどに附くるほどの連句、いひ出すほどの發句、盡く引直しけれど、さもうれしげに一々おし戴きぬ。とかくするうち卷滿尾にいたれば人々立還りぬ。坊も歸らむとしければ、あるじ呼びとゞめて、二夜とはならざれど、こよひ一夜は宿かさむなど、見下しがましくいひければ、坊大笑して、天を幕とし地を席とし、雲に風に身を易うするもの、何ぞ一夜のやどりに身を屈せむやとて、たゞはしりに走りゆきぬ。あるじも今更いさゝか訝しき者とおもひいりぬ。明る日朝疾くきのふのあらまし且「粟の穗を見あげてこゝら鳴鶉」かかる句書て、加筆ねがはしとて、けふは惟然坊と文の奥に書きしたゝめて遣りけり。あるじひらき見て、さてはきのふ來られしは聞及ぶかの惟然道人にてありしやと、開たる口をもふさがず、腋下に冷汗流し、恥ぢに恥入て返事さへ得せざりしとぞ。

翁に隨從惟然行脚の事

翁と共に旅寢したるに、木の引切りたる枕の頭いたくやありけむ、自らの帶を解て、これを卷て寢たれば、翁見て惟然は頭の奢に家を亡へりやと笑はれしとなり。

蕉像の事

風羅念佛の事

翁の亡骸いとねもごろに粟津義仲寺に

葬りたてまつりて、幻住菴の椎の木を伐りて、初七日のうちに蕉像百體をみづから彫刻し、之を望めるものに與へぬ。又「まづたのむ椎の木もあり夏木立」降るはあられか檜笠古池や〳〵蛙とびこむ水の音南無アミダ〳〵」かゝる唱歌九つを作りて風羅念佛となづけ、翁菩提の爲にとて古き瓢をうちならし、心の趣く所へはしりありく、そも風狂のはじめとぞ。

翁亡きあと旅のものの具携

行事

かくて惟然坊翁遷化し給ひし難波花屋何がしが家に歸り、殘れる蓑笠をはじめ、旅硯、錢入、杖などひとつにとり集め、みづから背に負て播磨國姫路にゆきぬ。舊友のしひて求むるにまかせて、みな與へぬ。今增井山のふもと風羅堂の什物となりぬ。

翁百年忌の頃笠あて稍ほつれければ、堂守こはよく翁の筆の蹟に似たりとて、ほどきて見るに翁の草稿なり。こまやかに切れたるを彼此とつぎあつめぬれば、

芳野山こぞのしをりのみちかへて
まだみぬかたの花をたづねむ

わが戀は汐干にみえぬ沖の石の
人こそしらねかわくまもなし

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

かゝる一紙にて、ことに筆のすさみいとうるはしく、めでたき一軸とはなりぬ。

坊婚家一宿の事

坊ある俳士のもとにやどる、其あるじ近き頃妻をむかへていまだ座敷のかざりををさめず、振袖の小袖あまた衣桁にかけならべ置きたり。朝とく家なる下女座敷へ行きて見るに、かの坊は疾く出行きたりと見えて、やり戸明放ちたるまゝにてあるに、衣桁にかけたる娘の小袖ひとつうせたり、さはこの坊のぬすみたるものにこそ、と走り入てあるじにかくと告ぐるに、あるじの曰、惟然坊なか〳〵盗などすべき小器の人に非ず、しかし洒落の道人なれば、朝の寒さを凌がむ爲に此小袖を着て往くまじきものにもあらざれば、夜前のものがたりに、明日はそこそこの風士のかたへ行かむなどと聞えければ、先づかのかたへおとづれして見むと、やがて坊行くべき知るべのかたへ使もてたづねつかはしけるに、坊その家に在て答へけるは、その事なり、今朝とくたち出たるに、野風の身にしみて甚だ寒かりしゆゑに、たちかへりて衣桁に在りし小袖を一つとり、うへに覆ひ來れ

り、もとより小袖なることは知りたれども、男女の服のわかちは覺えず、さだめてこれにてやあらむと、かの振袖したる伊達模様の小袖を取出し、其使に返し侍りけるとぞ。

坊布を得る事

西國行脚の時ならむ、播州姫路の方に知る人ありて立寄り侍りける。もとより風狂者のならひ、裾を結び、肩をつなぎたる單物を身にまとへり。あるじ憐みて、布一匹とり出て與へけり。坊これを得て柱杖にかけていでて行き、旅店に到りていふやう、この布にて帷子一つ縫て給れ、殘りは内義にあたへむといひけるゆゑ、あるじ悅び、取急ぎ縫立てゝ與へぬ。やがて古衣をぬぎ捨て新衣に着かへ出けるが、二町もゆきぬらむとおもふころ、立返りていふやう、何としても着なれたるものは心よきものなり、新しきものはどこやち着心あしければ、もとの古衣に着かへむために返りたりとて、やがてかの帷子をぬぎ、もとの垢つきたるものに着かへ、あとをも見ず出行きぬ。ここにおきてあるじも始めて道人なる事を感じ、このものがたりしてたふとみけるとぞ。

俳諧の心を語る事

姫路に寓居しておはせし頃、久しく俳諧の席へ出ず、うち籠りて居侍りけるを、或人いふやう、此程は何とて俳諧の交りしたまはざる、今宵は誰が亭にて俳諧あり、いざさせ給へかしとすゝめければ、坊うちわらひ、をかしき事をいふ人かな、我は俳諧師なり、さあれば日いでて起き、日入て休らふ、喫茶餐飯行住坐臥共に皆俳諧なり、それを外に俳諧せよとは何事ぞや、さやうのことは俳諧と常とかはりたる人にこそ勸むべき業なれといはれければ、其人且恥ぢ且歎じて還りけるとぞ。

娘市上に父惟然坊に逢ふ事

坊風狂しありくのちは娘のかたへ音信もせず。ある時名古屋の町にてゆきあひたり。娘は侍女下部など引連れてありしが、父を見つけて、いかに何處にかおはしましけむ、なつかしさよとて、人目もはぢず乞丐ともいふべき姿なる袖に取付きて歎きしかば、おのれもうちなみだぐみて、

兩袖にたゞ何となく時雨かな

と言捨てゝ走り過ぎぬとなむ。

娘父を慕ひ都に登る事并娘

葬髪の事

娘父に逢はまほしとおもふ心明くれ已まざりけるを、ある時父都に在りと聞て、いそぎ都に登り、書肆橘屋何がしの家は諸國の風客いりつどふ處なれば、此家にゆきて問はゞ、父の在家もしらるべければとて、ゆきてあるじに逢ひていふやう、みづからは惟然坊といふものの娘にて侍る、父風雲の身となりてより、たえて音信なかりしを、さいつ頃ある街にてふと行逢ひ侍りていとうれしく、近くよりて過ぎこし程の事いひ出でむとし侍りしほどに、かきけすごとく遁れ隠れて、影だに見えずなり侍りつれば、いはむかたなく打歎きつゝ日數過しつるほどに、此ごろ都におはする由風のたよりに承りて、取るものもとりあへず、はるばる登り侍りぬ。父の在家知り給はゞ逢はせ給へ、いかで〳〵と泣く〳〵言出づれば、うちうなづきて、げにことわりなりけり、さらば尋ね求めて逢はせ參らせむとて、彼方こなたかけあるきつゝ、からうじて坊がありか尋ねあたりて、かくてしか〴〵のよしかたりければ、坊とかうの返事なく、硯とり出て、墨すり流し、かゝる畫かきて、うへにほ句書ていふや

眞蹟縮圖

う、あふべきよしなし、此一片の紙を與へて還したまひてよとて投出しつゝ、かくて其身は雪の越路の冬ごもりこそ好もしけれとて、うち立たむとしけるを、袖をひかへて引きとゞむれど、ふりはなちて草鞋さへはかずして、越路をさして走りゆきぬ。橘屋何がしほいなく思ひけれど、せむすべもなく、かのかいつけたるを持て歸り來て、ありしことのよしを語りければ、むすめはたゞふしにふして泣きけり。あるじも共に涙にかきくれけるを、やゝありて娘頭を擡げていふやう、かくまで淸き御こゝろを强ひて慕ひまゐらするは、わが心匠のつたなきなり、これぞ我身にとりてのうへ無きかたみなるとて懷に入れて、いとねもごろにあるじに暇乞して、父のふるさとこそ戀しけれとて、關の里にかへり、みづから髻をはらひ、幽閑なる山陰の竹林に草の菴をむすび、かの都よりもて歸りたるを一軸となして、明暮父に事ふる心にして、かの一軸をぞかしづきける。坊かゝるよし越路にて聞て、遽に馳せ歸りて、かく染衣の身となりぬれば、過ぎこし方の物語し、一碗の物をも分けつゝ食ひて、ともに侘住居せむと、心うちとけて

多年の思一時にはらし、かくて辨慶庵といふ額を自ら書て懸けつゝ、此庵の名としぬ。（調度七つをもて明暮の辨用するゆゑとぞ）さるを一とせもたゞざるうちに、又風雲の心おこりて、風羅念佛を歌ひ、浮れて走り出ぬ。かくて播磨國姫路の里は親しき友多ければ、尋行きてこゝに足とゞめしを、日あらずして病して終に姫路にて身まかりぬとぞ。

（一）松むしりは小鳥の名

追加

春

南部に年を越して

まづ米の多い處で花の春

鶯のうす壁もるゝ初音かな

下萠もいまだ那須野の寒さ哉

宵闇も朧に出たりいでて見よ

飛て又みどりに入るや松むしり（一）

山中に入湯して

こゝもはや馴れて幾日の蚤虱

惟然坊は枕のかたきを嫌はれしが、故郷へ歸るとて草庵を訪はれける、なほいま